

平成三十二年年度

学生生活実態調査「学群」

報告書 筑波大学



まえがき

このたび、「平成 22 年度学生生活実態調査（学群）報告書」が発行される運びとなりました。筑波大学の学群生を対象とした学生生活実態調査は、開学 5 年目の昭和 53 年度（1978）に第 1 回が実施され、以後平成 20 年度まで 5 年間隔で、7 回行われてきました。しかし、学生の実態や意向を、より頻度高く正確に把握することで、学生支援の質を高めようと、平成 22 年度（2010）より 2 年に 1 度実施することとなりました。本書はその第一回目の報告となります。実施にあたっては学生生活支援室と学生部を中心とし、それに調査や解析を専門とする教員の参加を得ております。また、各支援室並びに教育組織の協力を得ました。日常業務に追われる中、短期間でまとめていただいた皆様に心からお礼申し上げます。

今回の調査において、特に留意したのは次の 4 点です。1) 学生生活支援向上に資するデータの取得。2) 留学生への配慮。留学生は近い将来、全学生数の 4 分の 1 程度を占める予定であり、そのために英文の調査票を準備しました。3) 簡便な調査。可能な限り設問を絞り、15 分程度で回答できるものとししました。4) 正確な情報を得るための悉皆調査と自由記述欄の設置。設問で拾いきれない意見の収集に自由記述欄は有効です。

調査は印刷物を用い、回答肢に直接しるしを付けてもらう、最も回答しやすい方法としました。回答者数は 4,493、回答率は 44.6%でした。各部局によって回答比率に相当なばらつきがでましたが、回答率の向上は今後の課題としたいと思います。

調査結果は報告書で配布する他、ホームページにも載せ、学内の教職員ならびに学生はもとより、必要に応じて学外にも公表していきます。教職員におかれましては、結果として表れた学生諸君の意向を最大限汲み取り、各部署との連携を図りながら、支援の質の向上に活用していただくよう、お願い申し上げます。

なお、筑波キャンパスは 3 月 11 日に震度 6 という大地震の直撃を受けました。学生関係部署は宿舎の学生の一時避難や在学生の安否確認等、対応に追われましたが、幸いにして大きく遅れることなく本報告が刊行の運びとなりましたのは、加賀学生生活支援室長はじめ関係者の努力に負うところ大です。心から感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月

学生担当副学長 西 川 潔

目 次

まえがき

概要

平成 22 年度学生生活実態調査（学群）概要	1
第 1 章 あなた自身について	13
1.1 性別・所属学類（専門学群）・在籍年次（問 1～問 3）	13
1.2 現在のすまい（問 4）	15
1.3 学生宿舎への入居希望について（問 5）	16
1.4 現在の居住地について（問 6）	17
第 2 章 生活全般について	18
2.1 学資支援世帯の年間収入について（問 7）	18
2.2 収入と支出について（問 8）	19
2.3 アルバイトの有無について（問 9）	23
2.4 アルバイトの種類について（問 10）	24
2.5 アルバイトの理由について（問 11）	26
2.6 「つくばスカラシップ」制度について（問 12）	28
2.7 希望する経済支援について（問 13）	29
2.8 平均的な 1 日ないし 1 週間の過ごし方について（問 14）	30
2.9 学生宿舎についての満足度について（問 15・問 16）	31
2.10 学生宿舎での生活について（問 17）	32
2.11 日常生活の満足度について（問 18）	33
第 3 章 通学・事故等について	34
3.1 通学の交通手段について（問 19）	34
3.2 通学時間について（問 20）	36
3.3 キャンパス交通システムの利用頻度について（問 21）	37
3.4 交通事故について（問 22）	38
3.5 盗難被害について（問 23）	39
3.6 傷害等の被害について（問 24）	40
3.7 カルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘について（問 25）	41

第4章 健康状態について	42
4.1 健康状態について (問 26)	42
4.2 過去一年間の困り事・悩み事について (問 27)	43
4.3 過去一年間の精神的な健康について (問 28)	44
第5章 クラス制度、学生組織、サークル活動等について	45
5.1 クラスの機能について (問 29)	45
5.2 学生組織の活動について (問 30)	46
5.3 サークル活動について (問 31)	47
5.4 サークル活動の動機について (問 32)	48
第6章 相談相手について	49
6.1 主な相談相手について (問 33)	49
6.2 相談相手に話す機会 (問 34)	50
第7章 筑波大学の志望理由等について	51
7.1 筑波大学の志望理由について (問 35)	51
7.2 筑波大学のイメージについて：入学前後の変化 (問 36)	53
第8章 筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について	54
8.1 教員に期待することについて (問 37)	54
8.2 教育面や制度面で不十分な点について (問 38)	55
8.3 整備・充実して欲しい施設等について (問 39)	56
8.4 学内の福利厚生施設に関する満足度について (問 40)	57
8.5 TWINS の満足度について (問 41)	58
8.6 向上を望むキャンパス内マナーについて (問 42)	59
第9章 進路や就職活動について	60
9.1 卒業後の進路について (問 43)	60
9.2 進路決定の際の相談相手について (問 44)	62
9.3 進路を決める理由について (問 45)	63
9.4 将来の進路についての感じ方について (問 46)	64
9.5 CARIO (つくばキャリアポートフォリオ) の活用について (問 47)	65
9.6 就職活動に役立った情報源について (問 48)	66
9.7 就職活動の学習への影響について (問 49)	67

第 10 章 その他	68
10.1 情報取得源について (問 50)	68
10.2 相談機関について (問 51)	69
10.3 定期的に読む学内広報誌について (問 52)	70
10.4 学外研修施設利用の有無について (問 53)	71
第 11 章 自由記述	72

平成 22 年度学生生活実態調査（学群）概要

1. 調査の目的

筑波大学では、学生生活の実態を把握し、「学生生活の一層の向上および教育・研究環境の改善に資する」ことを目的として、学生生活実態調査を実施している。これまで、学群学生に対しては、1978年（昭和53年）度から5年毎に実態調査を実施し、2008年（平成20年）度に7回目の調査を行ったところである。前回の調査実施後、学生生活支援室では、学生生活実態調査の実施について再検討を行い、学生生活支援の質をさらに向上させるためには、よりきめ細かな生活実態および学生の要望・提言等の把握が重要になるとの見方に立ち、今後は2年に1度の間隔で実態調査を実施する旨の案を作成した。西川学生担当副学長のご判断を仰ぐとともに、平成21年度第8回学群教育会議にその旨を報告し、基本的な了解を得ることができた。このような経緯で、今回の学生生活実態調査は前回から2年後、平成22年度に実施されることになったわけである。なお、大学院学生に対する調査も同時に実施され、その結果は別冊子『平成22年度学生実態調査（大学院）報告書』としてまとめられている。

2. 実施方法の検討と調査項目の設定

学生生活支援室では、2010年4月に入るとすぐに学生生活実態調査の準備にとりかかった。第1回学生生活支援室会議において、室長から学生生活実態調査の実施に向けて、室員全員への協力要請があり、第2回会議では、具体的な実施要領を検討し、1) 実態調査を2010年9月に実施すること、2) 学群全学生を対象とすること、3) 回答は調査票に直接記入する方式とすること、などを決定している。第3回会議で実態調査の作業工程について議論し、第4回から第7回の会議では、前回（平成20年度）の調査票設問項目をもとに、すべての設問について慎重な検討を行い、7月上旬までに第1次案を作成している。なお、調査の実施形態や調査項目の検討を進める段階において、社会・市場調査を専門とされる石井健一学生生活支援室員から、有益な情報や建設的な意見を多数提供していただいた。また、全学学類・専門学群代表者会議（全代会）の調査委員会からは、学生の視点を踏まえた設問全般に対する貴重な意見を得ることができたことも付言しておきたい。

調査項目の設定においては、回答率を向上させるためにも、設問総数を増やさないことが重要であるとの認識から、項目を厳選する作業を続けた。しかしながら、前回調査で51問であった調査項目は、今回はわずかながら増え、53問になった。これは、経済支援の充実を図るために家計状況などかなり踏み込んだ調査が必要と判断したこと、平成21年度から改修に着手している学生宿舎について改修前後の満足度の比較を行う必要が生じたこと、食堂など厚生施設の満足度についてきめ細かな調査を行いたいとの要望が出たこと、などの理由に拠っている。また、カルト宗教団体への勧誘に関する設問もぜひ含めて欲しいとの意見が出て、最後に付け加えられることになった。

以上のような準備作業を経て、平成22年度第4回学群教育会議（7月20日開催）に「平成22年度筑波大学学群学生生活実態調査」の実施案が提案され、調査の実施が了承された。また、各学類・専門学群の学生担当教員には、電子メールで実施案および調査票案が提示され、意見の聴取が行われた。学群長・学類長および学生担当教員から調査票および実施方法についていくつかの意見・要望が出されたため、それに応じて調査票の修正などの作業を行った。同時に、筑波大学の国際化拠点整備事業（G30）への採択を受け、留学生が増加傾向にあることから、英文の調査票を用意することとし、業者に英文翻訳作業を委託した。最終的に8月末までに和文と英文の調査票を確定させ、実施の細部について詰めの作業を行った。調査は、大学院学生向けの調査と同時に実施するため、混乱を招かないように、前回同様、学群学生向け

の調査票は黄色（大学院学生向けの調査票は青色）にすることとした。また、今回から、情報の秘匿性を確保するため、回答後に調査票を封印する保護シールを導入している。

3. 調査の実施

9月上旬に調査票が各学類・専門学群に届けられ、9月8日（水）から各教育組織の実情に合わせて配布および回収が開始された。実施期間は9月30日（木）までとした。実施期間中、またその後の回収作業においても、トラブルなど問題になることはなく、とりわけ学生部学生生活課と各支援室の担当事務員の方々のご尽力により、スムーズに調査を実施することができたのはたいへん有難かった。回収率は全体で44.6%となり、前回の48.6%からわずかに減少したものの、まずまずの結果である。調査票の配布と回収については、学群長・学類長を始め、各教育組織の教員・職員の方々にひとかたならぬお骨折りをいただいた。心より感謝申し上げたい。

4. 調査結果の分析と報告書の作成

10月上旬に調査票の回収を終え、データの集計を業者に委託した。データ集計は12月中旬までに終了し、戻ってきた集計結果を踏まえて、学生生活支援室員と学生部職員が各項目の分析と報告書の作成に取りかかった。報告書の原稿が1月末までにほぼ出揃い、編集と全体の統一に関する作業を行い、2月中には原稿を印刷所に入稿することができた。このまま予定通りに進めば、本報告書を平成22年度内に刊行することができたはずであったが、3月に入り、東北関東大震災が起これ、校正作業が一定期間ストップせざるを得ず、実際の発刊は平成23年度に入ってからになってしまった。天災の影響とはいえ、予定の期日に発刊できなかったことに対してはお詫びを申し上げなければならない。

本報告書の原稿は、次頁に記した学生生活支援室員および関係部局の方々に用意していただいたが、様々な角度からデータの分析を行い、要領よく原稿を作成していただいたことに感謝したい。

なお、本報告書では、表記等において以下のような工夫を施している。

- 1) グラフにはできるだけ、回答率等の数字を入れることにしたが、小さい数値でスペースが確保できないところでは、数字を省略している場合がある。
- 2) 表において、注意を喚起したい数値については、黄色で表示している部分がある。
- 3) 表における回答率の表示では、原則、%を省いている。小数点下一桁の数字は、回答率であるご理解いただきたい。

執筆分担：

概要	加賀 信広 (人文社会科学研究科)
問(1)～問(6)	加賀 信広 (人文社会科学研究科)
問(7)～問(11)	八畑 謙介 (生命環境科学研究科)
問(12)～問(13)	学生部学生生活課
問(14)	齋藤 慎二 (人間総合科学研究科)
問(15)～問(17)	学生部学生生活課
問(18)～問(21)	齋藤 慎二 (人間総合科学研究科)
問(22)～問(25)	学生部学生生活課
問(26)～問(28)	樫村 正美 (人間総合科学研究科)
問(29)～問(32)	前田 清司 (人間総合科学研究科)
問(33)～問(34)	樫村 正美 (人間総合科学研究科)
問(35)～問(39)	原田 悦子 (人間総合科学研究科)
問(40)	学生部学生生活課
問(41)～問(42)	潘 亮 (人文社会科学研究科)
問(43)～問(49)	キャリア支援室・学生部就職課
問(50)～問(53)	潘 亮 (人文社会科学研究科)
自由記述	八反地 剛 (生命環境科学研究科)
	酒井 克郎 (数理物質科学研究科)
	水谷 哲也 (システム情報工学研究科)

平成 22 年度 筑波大学学群学生生活実態調査

*** お願い ***

この調査は、皆さんの学生生活の実態を把握し、本学の学生生活の一層の向上および教育改善に資することを目的として実施するものです。

今回の調査対象者は、すべての学群・学類の学生諸君です。

この調査は無記名で行い、他の目的に用いることはありませんので、ありのままを記入してください。調査結果は、実態調査報告書として公表し、必要な方策を講じる予定です。

この調査の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

平成 22 年 9 月
筑波大学 副学長（学生担当） 西川 潔

1. 記入の方法などについて

- ① 回答は、すべてこの調査用紙（次頁から全 8 ページ）に記入してください。
- ② 回答は、番号を選ぶ選択方式と、具体的に記入または記述するものがあります。
番号選択方式の場合は該当する番号に○をつけてください。
記入または記述の場合は指定された欄に書き込んでください。
- ③ 氏名・学籍番号などあなた自身を特定し得る情報を書く必要はありません。回収した調査用紙は無記名のまま統計的に処理されます。
- ④ 平成 22 年 9 月 1 日現在で記入してください。

2. 提出期間

平成 22 年 9 月 8 日（水）～平成 22 年 9 月 30 日（木）

3. 回収方法

記入が済んだ調査用紙は、指導教員・授業担当教員に提出するか、あるいは、各支援室に設置されている「回収箱」に投函してください。

4. 問い合わせ

この調査についてのご質問・ご意見等は、

学生生活支援室：電話 029-853-2465

にご連絡ください。

Ⅰ. あなた自身について

問(1) あなたの性別をお答えください。

1. 男性 2. 女性

問(2) あなたの所属する学類あるいは専門学群の番号に○を付けてください。

・2007年度以降入学者

- | | | | |
|--|--|---|---|
| <p>人文・文化学群</p> <p>1. 人文学類</p> <p>2. 比較文化学類</p> <p>3. 日本語・日本文化学類</p> | <p>社会・国際学群</p> <p>4. 社会学類</p> <p>5. 国際総合学類</p> | <p>人間学群</p> <p>6. 教育学類</p> <p>7. 心理学類</p> <p>8. 障害科学類</p> | <p>生命環境学群</p> <p>9. 生物学類</p> <p>10. 生物資源学類</p> <p>11. 地球学類</p> |
| <p>理工学群</p> <p>12. 数学類</p> <p>13. 物理学類</p> <p>14. 化学類</p> | <p>15. 応用理工学類</p> <p>16. 工学システム学類</p> <p>17. 社会工学類</p> | <p>情報学群</p> <p>18. 情報科学類</p> <p>19. 情報メディア創成学類</p> <p>20. 知識情報・図書館学類</p> | |
| <p>医学群</p> <p>21. 医学類</p> <p>22. 看護学類</p> <p>23. 医療科学類</p> | <p>専門学群</p> <p>24. 体育専門学群</p> <p>25. 芸術専門学群</p> | | |

・2006年度以前入学者 (学群再編前組織)

- | | | |
|---|--|-----------------------------------|
| <p>第一学群</p> <p>26. 人文学類</p> <p>27. 社会学類</p> <p>28. 自然学類</p> | <p>第二学群</p> <p>29. 比較文化学類</p> <p>30. 日本語・日本文化学類</p> <p>31. 人間学類</p> | <p>32. 生物学類</p> <p>33. 生物資源学類</p> |
| <p>第三学群</p> <p>34. 社会工学類</p> <p>35. 国際総合学類</p> <p>36. 情報学類</p> <p>37. 工学システム学類</p> <p>38. 工学基礎学類</p> | <p>専門学群</p> <p>39. 医学専門学群医学類</p> <p>40. 医学専門学群看護・医療科学類</p> <p>41. 体育専門学群</p> <p>42. 芸術専門学群</p> <p>43. 図書館情報専門学群</p> | |

問(3) あなたの在籍年次の番号一つに○を付けてください。

1. 1年次 2. 2年次 3. 3年次
4. 4年次 5. 医学5年次 6. 医学6年次

問(4) あなたの現在のすまいについて、あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 筑波大学学生宿舎 2. 民間のアパート・マンションなど 3. 親と同居
4. 親戚・知人宅 5. その他 (_____)

以下の問(5)～問(6)の2問には、問(4)において2～5に○を付けた方がのみが回答してください。

問(5) 学生宿舎への入居を希望していますか。

1. 希望する (理由: _____)
2. 希望しない

問(6) あなたの現在の居住地について、あてはまる番号一つに○を付けてください。

- ・筑波大学外でつくば市内の _____ →
- | | | | |
|--------|--------|------|-------|
| 1. 天久保 | 2. 春日 | 3. 桜 | 4. 柴崎 |
| 5. 吾妻 | 6. その他 | | |
- ・つくば市以外で茨城県内の _____ →
- | | | | |
|---------|---------|--------|--|
| 7. 県南地域 | 8. 県西地域 | 9. その他 | |
|---------|---------|--------|--|
- ・茨城県外で関東地方の _____ →
- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 10. 東京都 | 11. 千葉県 | 12. 埼玉県 | 13. その他 |
|---------|---------|---------|---------|
14. 上記以外の地域 (_____)

問(7) あなたを学資支援している世帯の年間収入についてお答えください。あてはまる番号一つに○を付けてください。

- | | | |
|---------------------------|--------------------|----------------------|
| 1. 200万円未満(約 _____ 万円) | 2. 200万円以上～300万円未満 | 3. 300万円以上～400万円未満 |
| 4. 400万円以上～500万円未満 | 5. 500万円以上～600万円未満 | 6. 600万円以上～700万円未満 |
| 7. 700万円以上～800万円未満 | 8. 800万円以上～900万円未満 | 9. 900万円以上～1,000万円未満 |
| 10. 1,000万円以上(約 _____ 万円) | 11. 学資支援は受けていない | 12. 分からない |

問(8) あなたの1か月の平均的な収入と支出についてお答えください(臨時の収入や支出を除いた1か月の平均を、例えば35,000円の場合は3.5万円と書いてください)。

[収入]

- A 仕送り (____ . ____ 万円)
 B 奨学金 (____ . ____ 万円)
 C アルバイト (____ . ____ 万円)
 D 借金 (____ . ____ 万円)
 E その他 (____ . ____ 万円)

[支出]

- F 食費 (____ . ____ 万円)
 G 住居費(家賃, 共益費, 光熱費等) (____ . ____ 万円)
 H 就学費(授業料を除く図書, 文房具等) (____ . ____ 万円)
 I 交通費(定期代, ガソリン代, 駐車場代等) (____ . ____ 万円)
 J 通信費(電話料, 郵便料等) (____ . ____ 万円)
 K その他(交際費, 教養娯楽費, 被服費, 医療費等) (____ . ____ 万円)

問(9) 今年4月以降にアルバイトをしましたか?あてはまる番号一つに○を付けてください。

- | | |
|-----------------------------|---------------------|
| 1. 全くしなかった → 問(12)へ進んでください。 | 2. 定期的なアルバイトをした |
| 3. 臨時的なアルバイトをした | 4. 上記2・3両方のアルバイトをした |

以下の問(10)～問(11)の2問には、問(9)において2～4に○をつけた方がのみが回答してください。

問(10) アルバイトの種類はどのようなものですか?あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- | | | |
|-------------------|-----------------|-----------------------|
| 1. 家庭教師 | 2. 塾講師, 添削指導 | 3. 一般事務 |
| 4. 特殊技能(翻訳, 通訳など) | 5. 飲食店での業務 | 6. 飲食店以外の軽労働(調査, 配達等) |
| 7. 建築・土木作業の重労働 | 8. 建物倒壊作業等の危険作業 | |
| 9. その他(_____) | | |

問(11) アルバイトをした理由はなんですか?あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

- | | | |
|-----------------|-----------------|-------------------|
| 1. 学費や生活費のため | 2. サークル活動費のため | 3. 自動車等の購入・維持費のため |
| 4. 携帯電話の料金などのため | 5. レジャー・海外旅行のため | 6. 時間の有効活用のため |
| 7. 技術を得るため | 8. 友人を得るため | 9. その他(_____) |

問(12) 本学独自の奨学金「つくばスカラシップ」制度をご存じですか?あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 知っている
 2. 知らない(ホームページに掲載していますのでご覧ください)。
 「つくばスカラシップ」についてご意見等がありましたら記入してください。
 (_____)

問(13) 大学に希望する経済支援は何ですか?あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. とくに希望しない 2. 給付型(返還義務なし)奨学金 3. 貸与型(返還義務あり)奨学金 4. 授業料免除
 5. 一時貸付金(必要理由に○を付けてください。 ① 授業料のため ② 生活費のため ③ その他)
 6. その他(具体例: _____)

問(14) 平均的な1日ないし1週間の過ごし方についてお答えください。

- | | |
|------------------------------------|---------------------------|
| 1. 授業出席および予習・復習等の学習時間 (____ 時間/日) | 2. 授業以外の勉強時間 (____ 時間/日) |
| 3. コンピュータや携帯電話を使用する時間 (____ 時間/日) | 4. 睡眠時間 (____ 時間/日) |
| 5. サークル・ボランティアなどの活動時間 (____ 時間/週) | 6. アルバイト時間 (____ 時間/週) |

問(23) 大学入学後、盗難の被害に遭ったことがありますか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。また、被害に遭った方は、盗難物と具体的な場所をお答えください。

1. 被害に遭ったことはない
2. 学内で被害に遭った (盗難物：_____ 場所：_____)
3. 学生宿舎内で被害に遭った (盗難物：_____ 場所：_____)
4. 学外で被害に遭った (盗難物：_____ 場所：_____)

問(24) 大学入学後、引ったくりや暴行・傷害・たかり・恐喝などの被害に遭ったことはありますか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 被害に遭ったことはない
2. 学内で被害に遭った
3. 学生宿舎内で被害に遭った
4. 研究学園都市内で被害に遭った
5. 上記以外の場所で被害に遭った

問(25) カルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘についてお尋ねします。あてはまる番号一つに○を付けてください。

- A 大学入学後、勧誘を受けていやな思いをしたことが 1. ある 2. ない
 B 大学入学後、人が勧誘を受けてこまっているのを見たり、聞いたりしたことが 1. ある 2. ない

Ⅳ. 健康状態について

問(26) あなたの過去1年間の健康状態はどのようなですか？あてはまる番号に○を付けてください。

1. 健康である
2. 健康不良で数日寝込んだ(受診・入院を除く)
3. 身体の病気で受診・入院した
4. 精神的な問題で受診・入院した
5. 心理的な問題で相談機関を利用した
6. けがで受診・入院した
7. その他(_____)

問(27) あなたは過去1年間にどのようなことで困ったり悩んだりしましたか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 学業や研究の不振
2. 単位修得の問題
3. 休学・退学
4. 転学類・転学群
5. 進路
6. 就職
7. 友人との関係
8. 教員との関係
9. 研究室内の問題
10. サークル内の問題
11. 恋愛関係
12. 家族関係
13. 自分の性格
14. 自分の精神的・心理的状態
15. 経済状態
16. ハラスメント
17. その他(_____)
18. とくにない

問(28) 次の事柄について、過去1年間のあなたの感じ方に最も近いのはどれですか？A～Gのそれぞれについて、あてはまる番号一つに○を付けてください。

	とても 当てはまる	少し 当てはまる	あまり 当てはまらない	まったく 当てはまらない
A 自分のやりたいことができている	1	2	3	4
B 何となく不安になることがある	1	2	3	4
C 自分のことをよく分かってくれている人がいる	1	2	3	4
D 何をやってもうまくいかない気がする	1	2	3	4
E 気分がゆううつである	1	2	3	4
F 「死にたい」と思ったことがある	1	2	3	4
G 大学生活が充実している	1	2	3	4

Ⅴ. クラス制度、学生組織、サークル活動等について

問(29) あなたのクラスは、どのように機能していますか？あてはまる番号二つ以内に○を付けてください。

1. 大学への要望をまとめる
2. 大学からの情報を学生に連絡する
3. 勉強会を行う
4. 行事を企画運営する
5. 友人・知り合いをつくる
6. クラス担任教員とのつながりを維持する
7. その他(_____)
8. 機能していない

問(30) 学生組織の活動についてお答えください。あてはまる番号一つに○を付けてください。

	よく知っている	まあまあ知っている	あまり知らない	まったく知らない
A クラ代会の活動	1	2	3	4
B 全代会の活動	1	2	3	4

問(31) サークル活動について、あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 大学から認定された1つのサークルに属して活動中
2. 大学から認定された複数のサークルに属して活動中
3. 大学の認定を受けていないサークルで活動中
4. 以前は活動していた
5. 活動したことはない→問(33)へ進んでください。

以下の問(32)は、現在サークル活動をしている、または、以前していた方のみが回答してください。

問(32) サークル活動の動機はどのようなものですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 友人が欲しくて
2. 知識・教養のため
3. 健康のため
4. 技術向上のため
5. 団体生活を経験したい
6. 趣味と一致
7. 余暇の利用のため
8. レクリエーションの一環で
9. 希望の進路と同じで有益
10. 就職などにプラス
11. 高校時代からの継続
12. 勧誘されて
13. 社会貢献のため
14. その他 (_____)

Ⅶ. 相談相手について

問(33) あなたが重要なことを話したり、悩みを相談する人はどなたですか？あてはまる番号を三つ以内で選び、話したり相談しやすい順に記入してください。

- ① 家族 ② 恋人 ③ 友人 (学内) ④ 友人 (学外) ⑤ 先輩・後輩 (学内) ⑥ 先輩・後輩 (学外)
 ⑦ 教員 ⑧ その他 (_____) ⑨ とくにない
 1番 (_____) 2番 (_____) 3番 (_____)

以下の問(34)は、上の問(33)において話したり相談しやすい人を選んだ方のみが回答してください。

問(34) 問(33)で話したり相談しやすいとして選んだ人たちとあなたが話をする機会は普段どのくらいありますか(電話やメールも含まれます)？それぞれの人について、あてはまる番号一つに○を付けてください。

	頻繁にある	すこしある	あまりない	ほとんどない
A 1番の人とは	1	2	3	4
B 2番の人とは	1	2	3	4
C 3番の人とは	1	2	3	4

Ⅶ. 筑波大学の志望理由等について

問(35) 筑波大学を志望した主な理由について、あてはまる番号二つ以内に○をつけてください。

1. 教育や研究の特色に魅かれて
2. 施設や設備が充実している
3. 受験の実力ランクを考えて
4. 推薦入学制度があったので
5. 高校の先生や家族に勧められて
6. 大学説明会に参加して
7. 筑波研究学園都市にある大学なので
8. TXを利用して東京に出やすいので
9. 他大学の受験に失敗、あるいは断念して
10. その他 (_____)

問(36) 入学前と入学後の筑波大学のイメージについて、それぞれ、あてはまる○数字の番号を三つまで記入してください。

- A 入学前 () () () B 入学後 () () ()
- ① 伝統 ② 新構想 ③ 教育 ④ 研究 ⑤ 開かれた ⑥ 閉ざされた
 ⑦ 科学技術 ⑧ スポーツ ⑨ 国際性 ⑩ 研究学園都市 ⑪ 首都圏 ⑫ 自由
 ⑬ 管理 ⑭ その他 (_____)

問(37) 筑波大学の教員にとくに期待することはどのようなことですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 学問・研究の楽しさを教えて欲しい
2. 授業内容を充実させて欲しい
3. もっと解りやすく教えて欲しい
4. 研究成果を教育の現場にもっと反映して欲しい
5. 休講を無くして欲しい
6. 学生との会話の場を持って欲しい
7. 社会的実践との結び付きを示して欲しい
8. ハラスメントの問題に敏感になって欲しい
9. メンタル面に関するサポートをして欲しい
10. その他 (_____)

問(38) 教育面や制度面で不十分であると感じるのはどのようなことですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 教育スタッフ
2. カリキュラム
3. 教職課程
4. 課外教育プログラム (講演会・講習会等)
5. 留学制度
6. 就職説明会
7. クラス制度
8. 学生組織
9. 奨学金・授業料免除
10. 課外活動に対する支援
11. ボランティア活動に対する支援
12. その他 (_____)

問(39) キャンパス内の施設等で、特に整備・充実して欲しいのはどれですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 教室・実験室
2. 図書館
3. IT環境
4. 体育施設
5. 課外活動施設
6. セキュリティー
7. 駐車場
8. 自転車置き場
9. 学内循環バス
10. ペDESTリアン
11. 外灯
12. その他 (_____)

問(40) 学内の福利厚生施設A～Gに関する満足度について、それぞれあてはまる番号一つに○を付けてください。

	満足	まあ満足	普通	やや不満	不満
A 食堂	1	2	3	4	5
B 喫茶	1	2	3	4	5
C パン販売	1	2	3	4	5
D 書店	1	2	3	4	5
E 画材	1	2	3	4	5
F その他売店	1	2	3	4	5
G 自動販売機	1	2	3	4	5

① 上記の回答について特に理由があればお書きください。

(理由: _____)

② 現在の学内の食堂や売店等に不便を感じたり改善してほしい点があればお書きください。

(_____)

問(41) 学務システム：TWINSについて満足していますか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 満足している
2. 満足とも、不満とも言えない
3. 不満である (理由: _____)

問(42) 筑波大学生のキャンパス内でのマナーに関して向上を望みたいことはどのようなことですか？あてはまる番号すべてに○を付けてください。

1. 自動車・バイクの運転マナー
2. 自動車の駐車マナー
3. 自転車の運転マナー
4. 自転車・バイクの駐輪マナー
5. アルコールハラスメント
6. 各種の勧誘活動
7. 談話室等共有スペースの利用マナー
8. 喫煙マナー
9. その他 (_____)
10. とくにない

問(43) あなたの卒業後の進路は？あてはまる番号一つに○を付けてください。

- 進学 → 1. 筑波大学大学院 2. 国内の他大学大学院 3. 海外の大学院 4. その他 (_____)
- 就職 → 5. 企業 6. 教員 7. 公務員 8. 自営・起業 9. その他 (_____)
10. その他 (_____) 11. 決まっていない 12. まだ考えていない

問(44) あなたの進路決定の際の主な相談相手はどなたですか？あてはまる番号二つ以内に○を付けてください。

1. 家族 2. 親戚・知人 3. 友人・先輩 4. 教員 5. 事務職員
6. その他 (_____)

問(45) あなたが進路を決めた(決める)主な理由はどのようなことですか？あてはまる番号二つ以内に○を付けてください。

1. やりがい 2. 社会的貢献 3. 給与が多い 4. 安定した生活
5. 自分の能力や適性 6. 専門知識を深める 7. 大学で学んだことが生かせる 8. 社会的評価
9. 将来性 10. 地理的利便性 11. その他 (_____)

問(46) 将来の進路について、あなたの感じ方に最も近いのはどれですか？A～Fのそれぞれについて、あてはまる番号一つに○を付けてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A 将来の進路について、とても関心をもっている	1	2	3	4	5
B 働くことについて、真剣に考えたことがない	1	2	3	4	5
C 将来の進路決定では、周囲の雰囲気に流されることはない	1	2	3	4	5
D 職業生活を充実させるには、自分自身の責任が大きいと思う	1	2	3	4	5
E 希望する進路に進むための具体的な計画を立てている	1	2	3	4	5
F 希望する進路は決まっているが、それに向けての努力は特にしていない	1	2	3	4	5

問(47) あなたは、CARIO（つくばキャリアポートフォリオ）を活用していますか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 現在、活用している 2. 時々、活用している
3. フレッシュマンセミナーでのみ活用した 4. 活用していない

以下の問(48)～問(49)の2問には、就職活動をした方と、就職活動中の方が回答してください。

問(48) 就職活動に役立った主な情報源は何ですか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 就職情報誌 2. 企業からのDM 3. インターネットによる企業情報
4. 就職課・キャリア支援室 5. スチューデントプラザの就職資料コーナー 6. 大学の就職情報提供システム
7. 就職ガイダンス 8. 企業によるインターンシップ 9. OB・OG訪問
10. その他 (_____)

問(49) 就職活動によって、大学での学習に支障が出ましたか？あてはまる番号一つに○を付けてください。

1. 支障はまったく出ていない 2. 支障はほとんど出ていない
3. 支障が多少は出ている 4. 支障が非常に起きている

X. その他

問(50) 学業や生活に関わる一般的な情報を得ようとするとき、主に誰にあるいどこにアクセスしますか？あてはまる番号三つ以内に○を付けてください。

1. 担任・指導教員 2. 支援室の事務職員 3. 支援室の掲示版 4. TWINS 掲示版
5. 大学のHP 6. 学群・学類等のHP 7. 学群・学類やクラスのメーリングリスト
8. 友人等 9. その他 (_____)

問(51) 筑波大学には、学生生活の中で生じる様々な問題について相談できる機関があります。それらの相談機関について、あてはまる番号一つに○をつけてください。

	利用したことがある	利用の仕方などを知っている	存在を知っている	存在を知らない
A 保健管理センター学生相談室	1	2	3	4
B 保健管理センター精神科	1	2	3	4
C 総合相談窓口(スチューデント・プラザ内)	1	2	3	4

第1章 あなた自身について

1.1 性別・所属学類（専門学群）・在籍年次（問1～問3）

◎平成22年9月1日現在で、学群の在籍学生数は10,067名。

◎全体の回収率は44.6%。

本章「あなた自身について」では、まず、性別・所属する学類ないし専門学群・在籍年次を尋ねている。今回の学生生活実態調査は、平成19年（2007年）度に施行された学群・学類の改組再編から4年が経ち、ちょうど新学群生が4年生まで揃った年に実施された。しかし、平成18年度以前に入学した、いわゆる旧学群組織の学生もかなり在学しているために、所属についての集計には難しさが伴った。

次頁に掲げる回収率の表1.1では、煩雑になるのを避けるために、新学群制度における学類・専門学群だけを項目として出し、その在籍学生数、回収票数、および回収率を示している。ただし、旧学群制度下の学生、すなわち、平成18年度以前の入学者もできるだけここに加えるために、学類・専門学群ごと新学群制度に移行した組織については、この表に加算する方式をとった。旧学群組織の自然学類、人間学類、看護・医療科学類、図書館情報専門学群は、学類・学群が分割したことにより、この表に入れることが難しかったため、便宜的に「その他」の欄を作り、そこに数値を示した。「その他」の在籍学生数110名および回収票数71は、その4つの旧学類・旧専門学群に所属する学生である。

平成22年9月1日現在で、学群の在籍学生数は10,067名であった。前回調査が行われた平成20年度（10月1日現在）は10,187名であったので、わずかに減ったことになる。新学群制度への移行で定員が少し減少したためであると思われる。また、年次別にみると、在籍学生数は低学年になるにつれ徐々に減ってきているので、これは定員充足率110%枠を意識した入学者の確保が進んできていることと関係があるとも考えられる。

回収率については、前々回の調査では26.0%、前回は48.6%であったが、今回は44.6%である。年次別に見ると、1年次：58.4%、2年次：45.6%、3年次：41.2%、4年次：34.4%となっていて、低年次生ほど回収率が高いが、学年間でバランスを欠くほどの違いは出ていない。

学類・専門学群によって回収率はまちまちであるが、80%を超える学類がある一方で、20%に満たない回収率を示す組織も見受けられる。回収数が少ないことで、教育組織ごとの分析においてデータの信頼性が失われる場合も出てくるので、低い回収率にとどまった組織においては改善を望みたい。なお、日本語・日本文化学類1年次で回収率が100%を超えているが、在籍学生数に入っていない研修留学生の方などが回答してくださったためであると考えられる。集計において、そのまま有効な回収票として扱われている。

表 1.1 平成 22 年度 筑波大学 学生生活実態調査 回収率

学 群	学 類	在籍学生数 (平成 22 年 9 月 1 日現在)							回 収 票 数							回 収 率 (%)						
		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	5 年次	6 年次	合 計	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	5 年次	6 年次	合 計	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	5 年次	6 年次	合 計
人文・文化	人文	133	134	125	157			549	68	39	30	21			158	51.1	29.1	24.0	13.4			28.8
	比文	86	91	95	128			400	44	32	19	42			137	51.2	35.2	20.0	32.8			34.3
	日日	42	44	45	57			188	43	28	25	11			107	102.4	63.6	55.6	19.3			56.9
	小計	261	269	265	342			1,137	155	99	74	74			402	59.4	36.8	27.9	21.6			35.4
社会・国際	社会	89	85	100	136			410	20	17	20	17			74	22.5	20.0	20.0	12.5			18.0
	国際	93	90	89	158			430	38	0	14	30	(年次不明1)	83	40.9	0.0	15.7	19.0			19.3	
	小計	182	175	189	294			840	58	17	34	47			157	31.9	9.7	18.0	16.0			18.7
人間	教育	40	38	42	39			159	15	11	6	13			45	37.5	28.9	14.3	33.3			28.3
	心理	52	51	53	59			215	39	25	23	28			115	75.0	49.0	43.4	47.5			53.5
	障害	41	40	37	37			155	30	20	30	26			106	73.2	50.0	81.1	70.3			68.4
	小計	133	129	132	135			529	84	56	59	67			266	63.2	43.4	44.7	49.6			50.3
生命・環境	生物	91	92	88	100			371	74	24	16	18			132	81.3	26.1	18.2	18.0			35.6
	生資	140	143	144	164			591	108	66	49	72	(年次不明1)	294	77.1	46.2	34.0	43.9			49.7	
	地球	54	61	60	60			235	51	29	10	14			104	94.4	47.5	16.7	23.3			44.3
	小計	285	296	292	324			1,197	233	119	75	104			530	81.8	40.2	25.7	32.1			44.3
理工学	数学	46	52	49	50			197	36	3	7	26			72	78.3	5.8	14.3	52.0			36.5
	物理	71	67	69	65			272	52	7	22	24			105	73.2	10.4	31.9	36.9			38.6
	化学	54	58	64	57			233	50	54	8	35			147	92.6	93.1	12.5	61.4			63.1
	応理	130	146	146	173			595	110	116	126	109			461	84.6	79.5	86.3	63.0			77.5
	工シ	134	148	166	203			651	40	43	127	84			294	29.9	29.1	76.5	41.4			45.2
	社工	135	143	141	171			590	12	116	70	15	(年次不明1)	214	8.9	81.1	49.6	8.8			36.3	
	小計	570	614	635	719			2,538	300	339	360	293			1,293	52.6	55.2	56.7	40.8			50.9
情報	情報	84	86	112	131			413	37	27	23	58			145	44.0	31.4	20.5	44.3			35.1
	情メ	53	53	71	69			246	19	22	30	29			100	35.8	41.5	42.3	42.0			40.7
	知識	109	101	115	119			444	103	71	104	26	(年次不明1)	305	94.5	70.3	90.4	21.8			68.7	
	小計	246	240	298	319			1,103	159	120	157	113			550	64.6	50.0	52.7	35.4			49.9
医学	医学	106	108	100	99	100	117	630	105	69	69	43	39	107	432	99.1	63.9	69.0	43.4	39.0	91.5	68.6
	看護	70	70	83	78			301	58	66	54	28			206	82.9	94.3	65.1	35.9			68.4
	医療	38	38	39	41			156	36	32	34	33			135	94.7	84.2	87.2	80.5			86.5
	小計	214	216	222	218	100	117	1,087	199	167	157	104	39	107	773	93.0	77.3	70.7	47.7	39.0	91.5	71.1
体 育	251	251	248	285			1,035	17	70	19	84	(年次不明1)	191	6.8	27.9	7.7	29.5			18.5		
芸 術	110	109	113	159			491	105	57	49	48	(年次不明1)	260	95.5	52.3	43.4	30.2			53.0		
その他							110	5	4	2	27	1	2	71								
合 計		2,252	2,299	2,394	2,795	100	114	10,067	1,315	1,048	986	961	40	109	4,493	58.4	45.6	41.2	34.4	40.0	95.6	44.6
		903	912	939	1,118	30	40	3,989	605	461	409	391	14	39	1,919	67.0	50.5	43.6	35.0	46.7	97.5	48.1

※回収票には、白紙および年次・学類とも不明が 30 件あった。合計欄の下段は、女子を内数で示してある。なお、性別不明は 92 件。

※各組織の在籍学生数には、旧学群組織の自然学類、人間学類、看護・医療科学類、図書館情報専門学群の 4 年次生数（110 名）は含まれていない。

1.2 現在のすまい（問4）

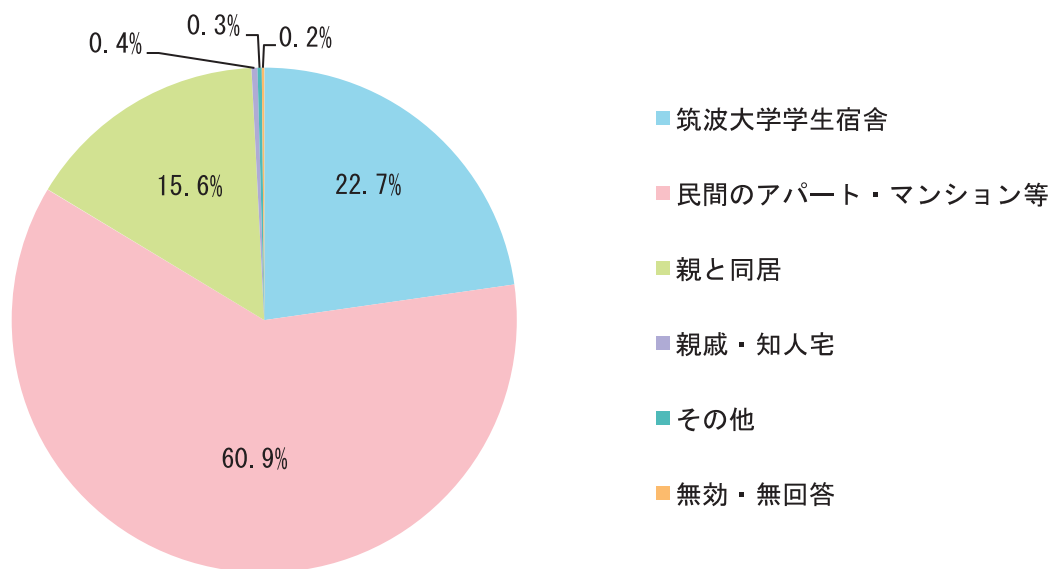
- ◎近隣のアパート・マンション住まいが全体の約6割。
- ◎学生宿舎住まいが減り、自宅通学が増える傾向にある。

現在のすまいを尋ねた。下の円グラフに見るように、①本学の学生宿舎に居住する学群生が22.7%、②近隣のアパート・マンションに居住する学生が60.9%、③「親と同居」すなわち自宅通学の学生は15.6%となっている。前回および前々回の学生生活実態調査時の数値は、それぞれ、平成20年度：①25.1%、②61.6%、③12.4%、平成15年度：①34.4%、②57.1%、③8.2%、であったので、アパート・マンションの居住者の割合はほぼ変化がなく、学生宿舎の割合が減っている分が、自宅通学者に変化してきているとみることができる。

自宅通学者の増加は明らかに、つくばエクスプレスの開通に関係していると考えられる。平成17年(2005年)夏のTX開通に伴い、自宅通学の可能な首都圏からの入学者が増えたとも考えられるし、ある程度の遠距離に居住している学生であっても、TXを利用することで自宅通学が可能になったというケースもあるだろう。

学年別に詳細を見てみると、1年次生に関しては①57.9%、②24.0%、③17.6%、2年次生は①11.4%、②72.2%、③15.7%、3年次生は①8.9%、②74.6%、③15.3%、4年次生は①4.6%、②80.9%、③13.6%、となっている。1年次生の宿舎居住率は7年前の76.7%からは約20%近く下がっているが、2年前とはほぼ同率である。その分、2年次生・3年次生の学生宿舎居住率が下がっており、大学院生および留学生の学生宿舎利用率が高まっている現状において、学群上級生があおりを受けている形である。

図 1.2 現在のすまい（全体）



1.3 学生宿舎への入居希望について（問5）

- ◎学生宿舎への入居を希望する学生は、全体の5.8%。
- ◎しかし、主に経済的理由により、数百名の学生が入居を望んでいる。

前問において、「筑波大学学生宿舎」以外を選択した学生に対して、学生宿舎への入居を希望するか否かを尋ねた。結果として、「希望する」と回答した学生は全体として5.8%であった。学生宿舎は、新入生と留学生が優先的に入居する方式が採られており、2年生以上になると、宿舎に居住するためには抽選を経なければならないが、実際に宿舎に住んでいない学生で入居を希望している学生は、割合としてはそれほど高くない。

しかし、本調査に回答した学生のうち、200名は学生宿舎への入居を望んでおり、調査の回収率が5割未満であることを踏まえると、潜在的には400名程度の学生が学生宿舎の利用を望んでいる可能性がある。改修工事などのため、入居数を増やせない事情があるが、これらの学生の声にどう応えてゆくかを考えてゆく必要があろう。宿舎への入居を希望する理由としては、「生活費が安くすむ」「アパートの家賃は高すぎて払えない」等の経済的なものがほとんどで、切実である。

現在の入居者が多い1年次生からの回答は、当然のことながら少なくなっているが、それ以外の年次では、違いはあまり見られない。男女別では、女性の方が希望者が多めではあるが、大きな差は出ていない。学群・学類別でも、それほど目立ったパターンは観察されなかった。

表 1.3 学生宿舎への入居の希望（学年別、男女別、全体）

	希望する		希望しない		無効・無回答	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
1年次	22	4.0	509	92.5	19	3.5
2年次	60	6.5	816	88.0	51	5.5
3年次	60	6.7	781	87.1	56	6.2
4年次	49	5.3	828	90.3	40	4.4
医学5年次	4	10.0	33	82.5	3	7.5
医学6年次	5	4.6	94	87.0	9	8.3
男性	105	5.4	1,732	88.9	111	5.7
女性	88	6.2	1,280	89.7	59	4.1
全体	200	5.8	3,065	89.0	180	5.2

1.4 現在の居住地について（問6）

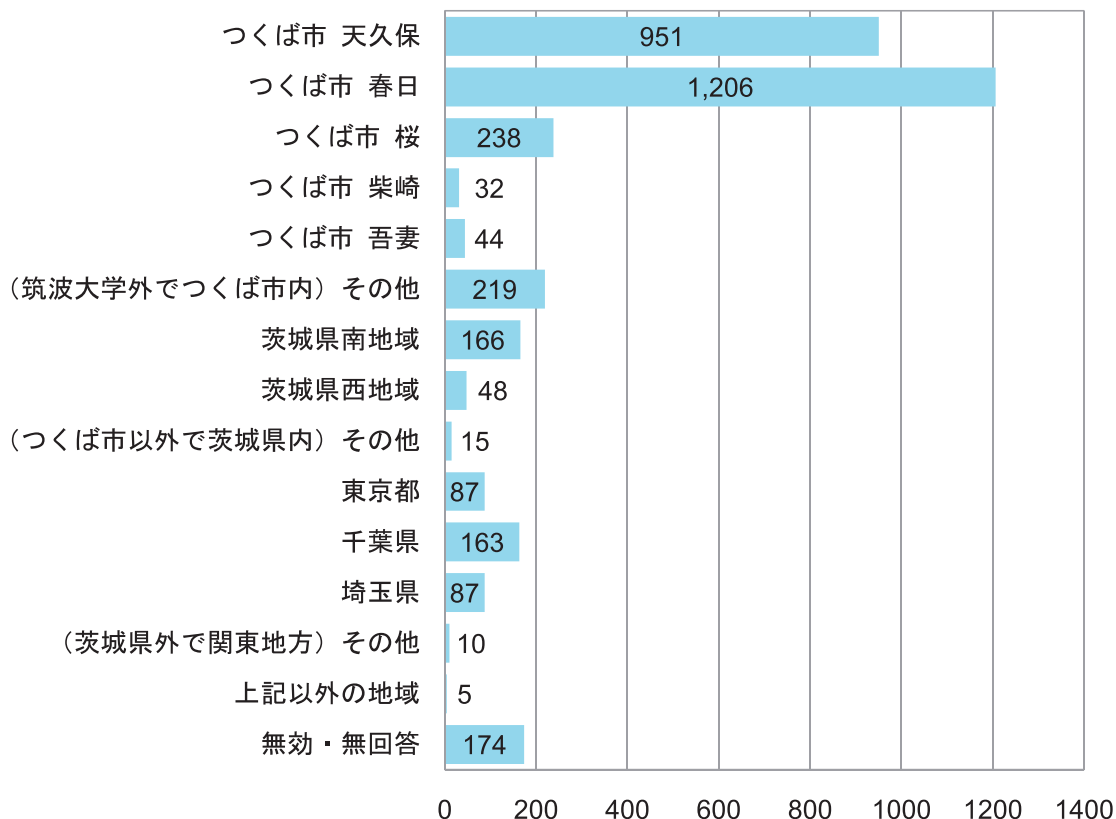
- ◎春日地区および天久保地区のアパートに住む学生が6割以上。
- ◎千葉県と埼玉県に住む学生が増える傾向にある。

学生宿舎の居住者以外の学生に対して、現在の居住地について尋ねた。下記グラフに見るように、つくば市春日（35.0%）、および、つくば市天久保（27.6%）の居住率が飛びぬけて高く、この2地区だけで全体の6割以上を占めている。前回の調査(平成20年度)では、この2地区の居住率(学生宿舎を除いた場合)はそれぞれ35.7%および32.5%であったが、それ以後、天久保地区で少し減少しているという結果である。つくば市内では、桜地区（6.9%）、吾妻地区（1.3%）がこれに次ぐが、これらの地域の居住者も2年前よりは少し減っている。

先の間4において、TX開通に伴う自宅通学者の増加という現象について触れたが、下記集計における「千葉県」「埼玉県」の数値はそれを裏付けるものとなっている。2年前と比較して千葉県は3.7%から4.7%に、埼玉県は2.0%から2.5%にそれぞれ割合が増えている。「茨城県南地域」は4.8%で、2年前と変わらずであった。

なお、無回答がかなりの数にのぼったが、居住地により本人が特定されるのを警戒したためと考えられる。

図 1.4 現在の居住地（全体、n = 3445）



第2章 生活全般について

2.1 学資支援世帯の年間収入について（問7）

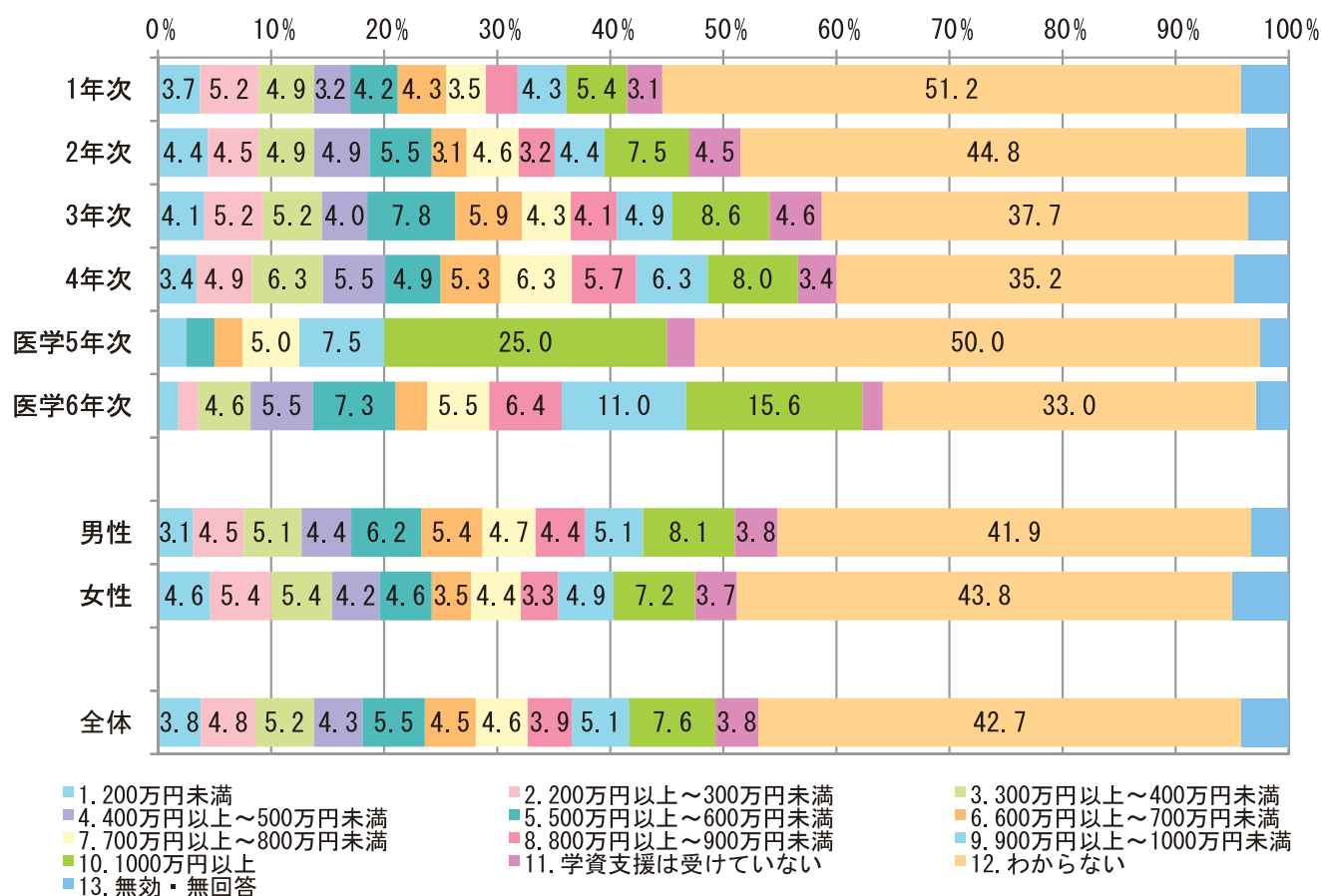
◎ 4割以上の学生は学資支援世帯の年間収入状況を知らない、または、無関心？

◎ 学資支援世帯は幅広い所得層にわたり、特定所得層への偏りはない

学資を支援している世帯の年間の収入について、200万円未満から1,000万円以上まで100万円刻みで回答を求めた。最も顕著な傾向は「分からない」と答えた学生が全体の42.7%に上ることである（図2.1）。この傾向は学類や男女の別を問わずほぼ同じである。学生に心配をかけぬようにとの親心から状況を知らされていないのか、あるいは、学生自身の無関心によるものか。しかし、学年が高くなるにつれて「分からない」と回答した割合は、51.2%（1年次）、44.8%（2年次）、37.7%（3年次）、35.2%（4年次）と次第に低くなる。

学資支援世帯の年間収入は200万円未満から1,000万円以上まで幅広く、特定の所得層への明瞭な偏りは認められない。図には示されていないが、学類別にみても、医学類に高所得世帯の割合が比較的多いことを除けば、顕著な差は認められない。また、学資支援を受けていないと回答した学生は全体で3.8%程度おり、この割合は学類別、学年別、男女別にみても、特に目立った傾向は認められない。

図2.1 学資支援世帯の年間収入（男女別・全体）：単位はパーセント



2.2 収入と支出について（問 8）

2.2.1 収入

- ◎収入項目の平均の合計は 126,000 円、前回調査時（平成 20 年度）に比べて 32,000 円減少。
- ◎仕送りの平均は 56,000 円、前回調査に比べて 6,000 円減少。
- ◎奨学金の受給額の平均は 38,000 円、前回調査時に比べて 7,000 円減少。

臨時の収入をのぞいた一か月の収入の平均を「仕送り」「奨学金」「アルバイト」「借金」「その他」の各項目に万円単位で記入してもらった。図 2.2.1.1 は全学平均の収入を示したグラフである。また、図 2.2.1.2 は学年別の、図 2.2.1.3 は学群・学類別の平均収入を示したグラフである。各項目の全額平均を合計すると 12.6 万円となり、この額は前回調査に比べ 3.2 万円減少している（前回調査では「収入合計」を記入する項目が用意されていたが、今回の調査では同項目は省かれたので、この比較には項目別の平均値の合計を用いた）。なお、収入についてはいずれの項目についても、男女間に目立った差は見られなかった。

仕送りについて： 仕送りの全学平均は 5.6 万円で、これは前回調査に比べて 6,000 円減少している。学年が上がるにつれて仕送りの額は高くなる傾向にある（図 2.2.1.2）。学類別にみると（図 2.2.1.3）医学類の額が突出している。逆に教育学類は目立って低い値であるが、他はほぼ同額である。

奨学金について： 奨学金の受給額の全学平均は 3.8 万円で、前回調査時に比べて 7,000 円減少している。学年が上がるにつれ受給額は上昇するが、その差は微々たるものである（図 2.2.1.2）。また、奨学金についても医学類の平均受給額は他の学類より明らかに高く、それ以外の学類間では大きな差は見られない（図 2.2.1.3）。

アルバイトについて： アルバイト収入の全学平均は 2.7 万円で、前回調査に比べて 7,000 円減少している。学類別では、化学類、生物学類、物理学類など自然科学系の学類で少ないのが目立つほか、体育専門学群でも低い値となっている（図 2.2.1.3）。他の学類間では目立った差は認められない。また、学年別にみると 1 年次には 1.7 万円と少なく、2 年次以降では 3 万円前後と増加する（図 2.2.1.2）が、医学の 5・6 年次では学年が上がるにつれ明らかに減少している。

借金について： 「借金」は今回の調査で新たに加えられた項目である。全学平均では 1,000 円となっているが、全回答者 4,468 人中で借金をしていると回答した学生は 18 人だけであり、最大で 37 万円、一人あたりでは 6 万円を超える額に上る。借金の理由は不明だが、一部の学生が非常に厳しい生活状況におかれている可能性がある。

図 2.2.1.1 1 か月の平均的な収入（全学平均）：単位は万円



図 2.2.1.2 1 か月の平均的な収入（学年別）：単位は万円

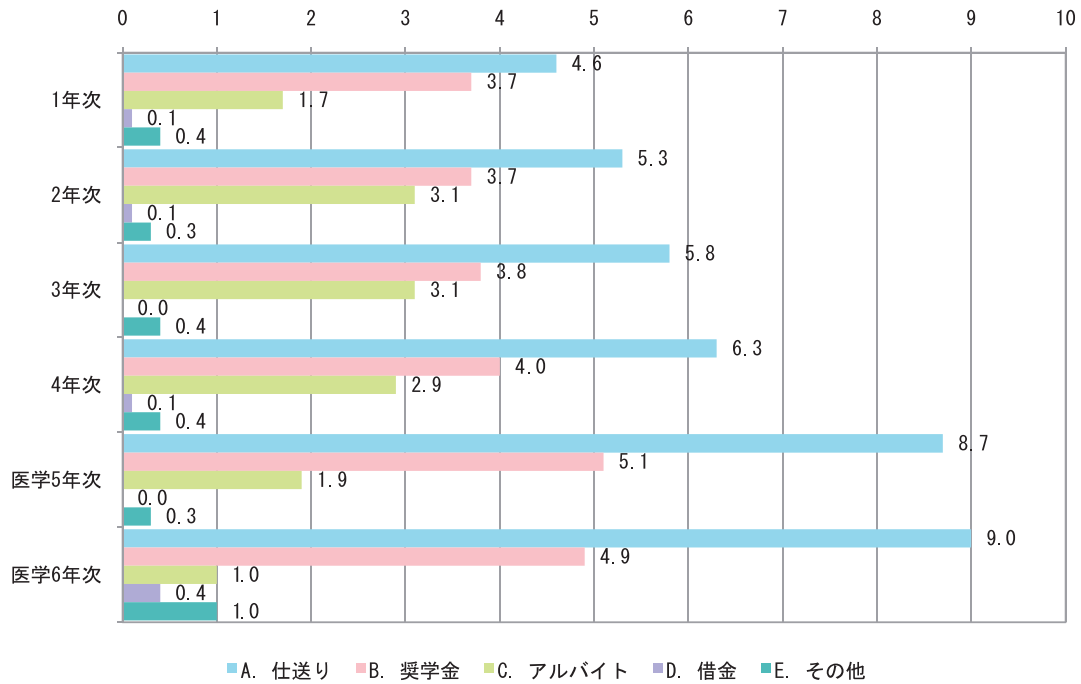
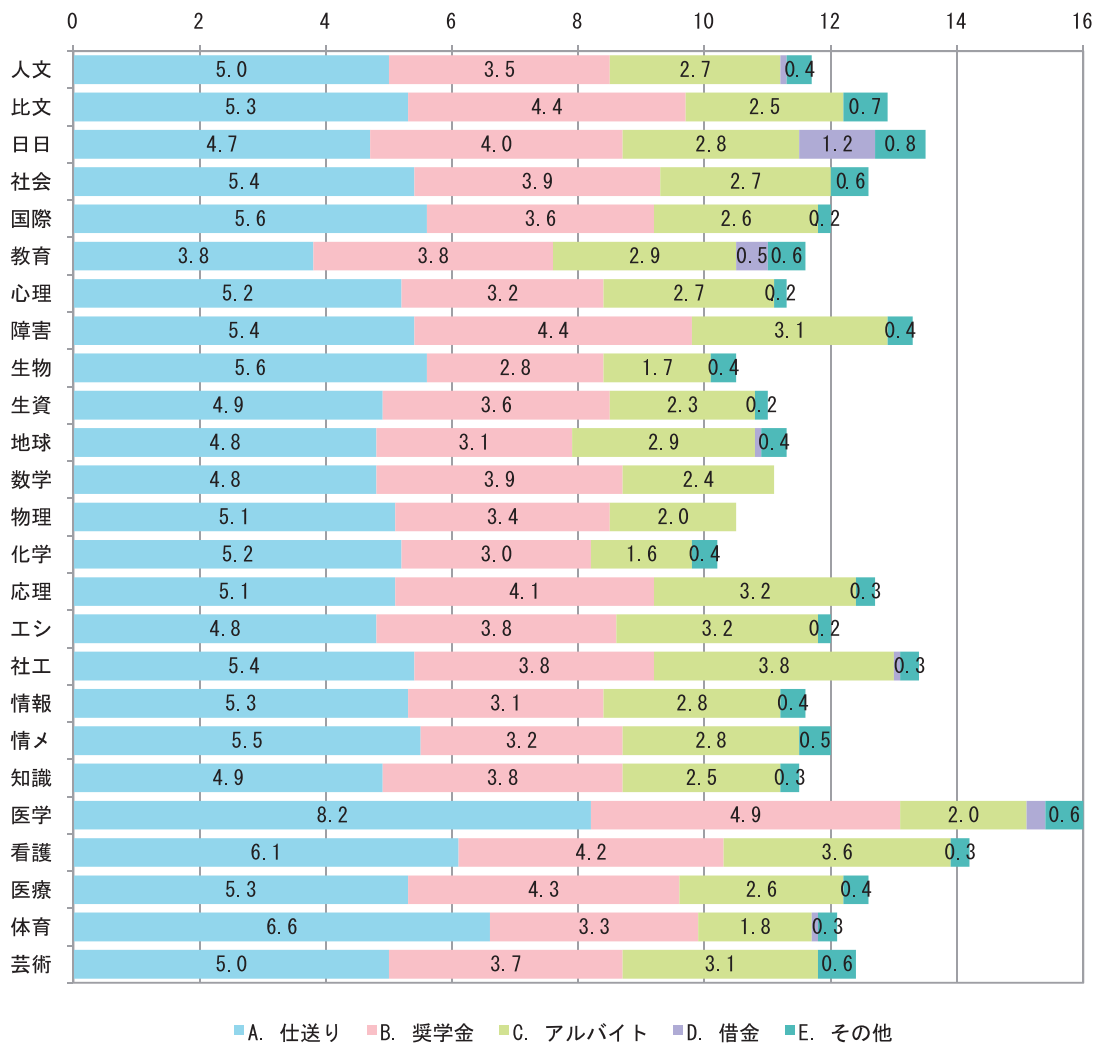


図 2.2.1.3 1 か月の平均的な収入（学群・学類別）：単位は万円



2.2.2 支出

- ◎支出項目の平均の合計は 94,000 円、前回調査時に比べて 7,000 円減少。
- ◎食費 24,000 円、住居費 35,000 円、ともに前回調査に比べて 2,000 円減少。
- ◎学年が上がるにつれて食費と住居費の支出額が上がる。

臨時の支出をのぞいた一か月の収入の平均を「食費」「住居費」「就学費」「交通費」「通信費」「その他」の各項目に万円単位で記入してもらった。図2.2.2.1は全学平均の支出を示したグラフである。また、図2.2.2.2は学年別の、図2.2.2.3は学群・学類別の平均収入を示したグラフである。各項目の全額平均を合計すると9.4万円となり、この額は前回調査に比べ7,000円減少している（前回調査では「支出合計」を記入する項目が用意されていたが、今回の調査では同項目は省かれたので、この比較には項目別の平均値の合計を用いた）。

学群・学類別の支出の項目別平均額の合計を比較すると（図2.2.2.3）、医学類が群を抜いて高額で、看護学類や体育専門学群で比較的高い。一方、地球学類や化学類および国際総合学類などの支出合計は、他に比べて低めとなっている。

食費と住居費は学年が上がるにつれて多くなる（図2.2.2.2）。特に1年次から2年次の間で住居費の伸びが大きい。これは1年次生に宿舍利用者が多いためと思われる。支出について、いずれの項目についても男女間にほとんど差が見られないが、食費だけは全学平均で男性が女性より4,000円多い。学群・学類別には、体育専門学群と医学類で食費が若干多いこと、医学類で住居費が明らかに多いこと以外には大きな差は見られない（図2.2.2.3）。

就学費については、芸術専門学群と医学類で明らかに他の学類より多い。この点を除くと、学年間でも学類間でも男女間でも就学費には大きな差はなく、全体にほぼ一定の値が示された（図2.2.2.2および図2.2.2.3）。交通費や通信費についても学年間や学類間および男女間に明瞭な差は認められず、全体にほぼ一定の値となっている（図2.2.2.2および図2.2.2.3）。また、これら就学費や交通費および通信費については、前回の調査から目立った変化は見られない。

図 2.2.2.1 1か月の平均的な支出（全学平均）：単位は万円

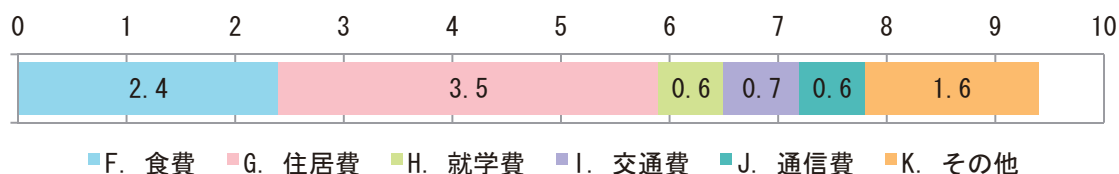


図 2.2.2.2 1 か月の平均的な支出（学年別）：単位は万円

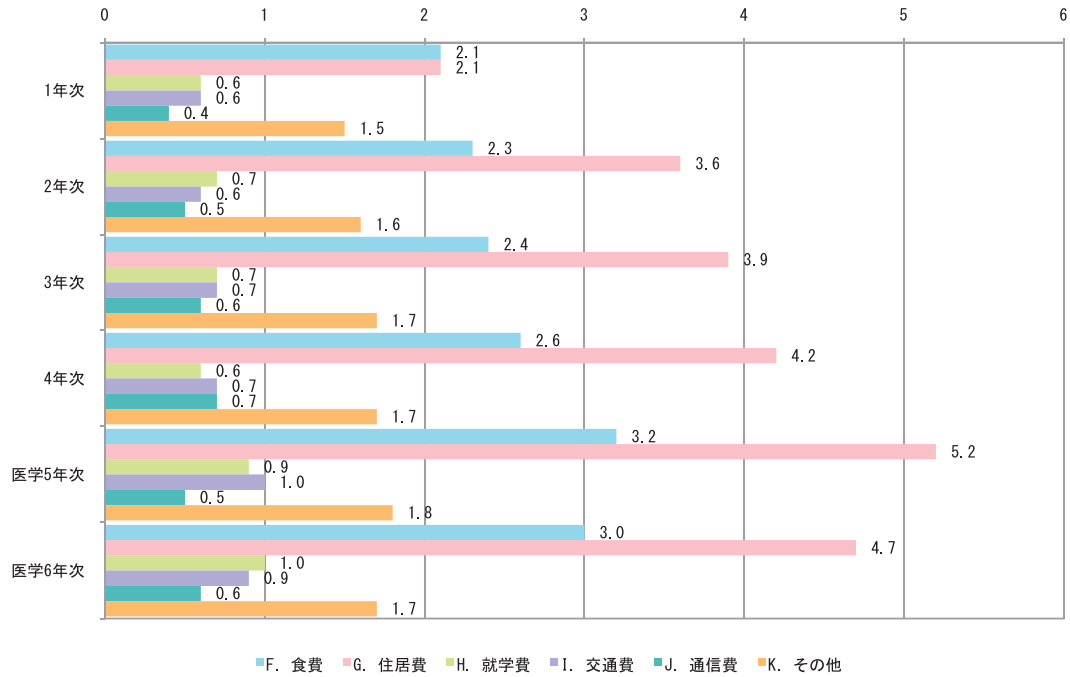
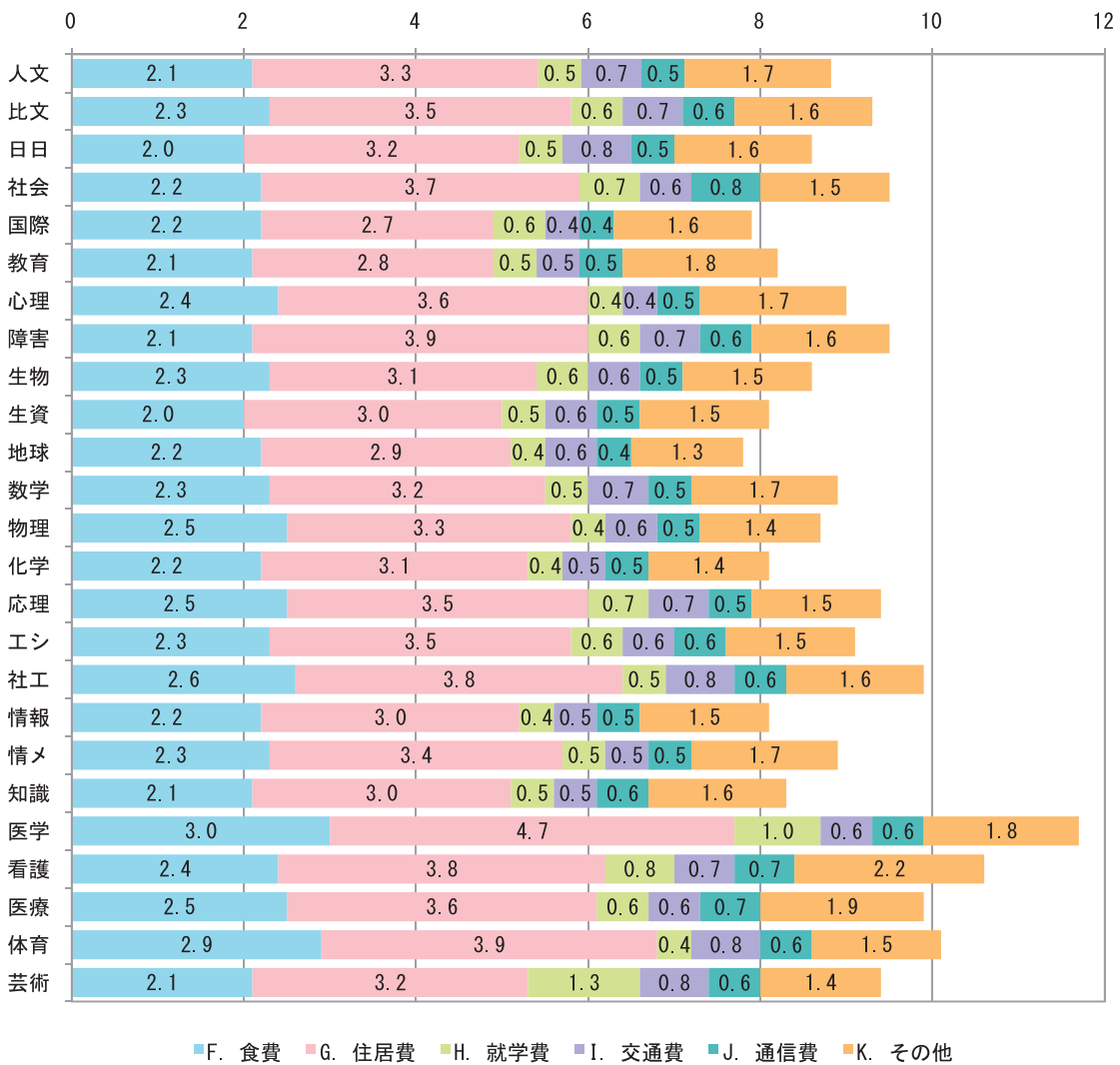


図 2.2.2.3 1 か月の平均的な支出（学群・学類別）：単位は万円



2.3 アルバイトの有無について (問9)

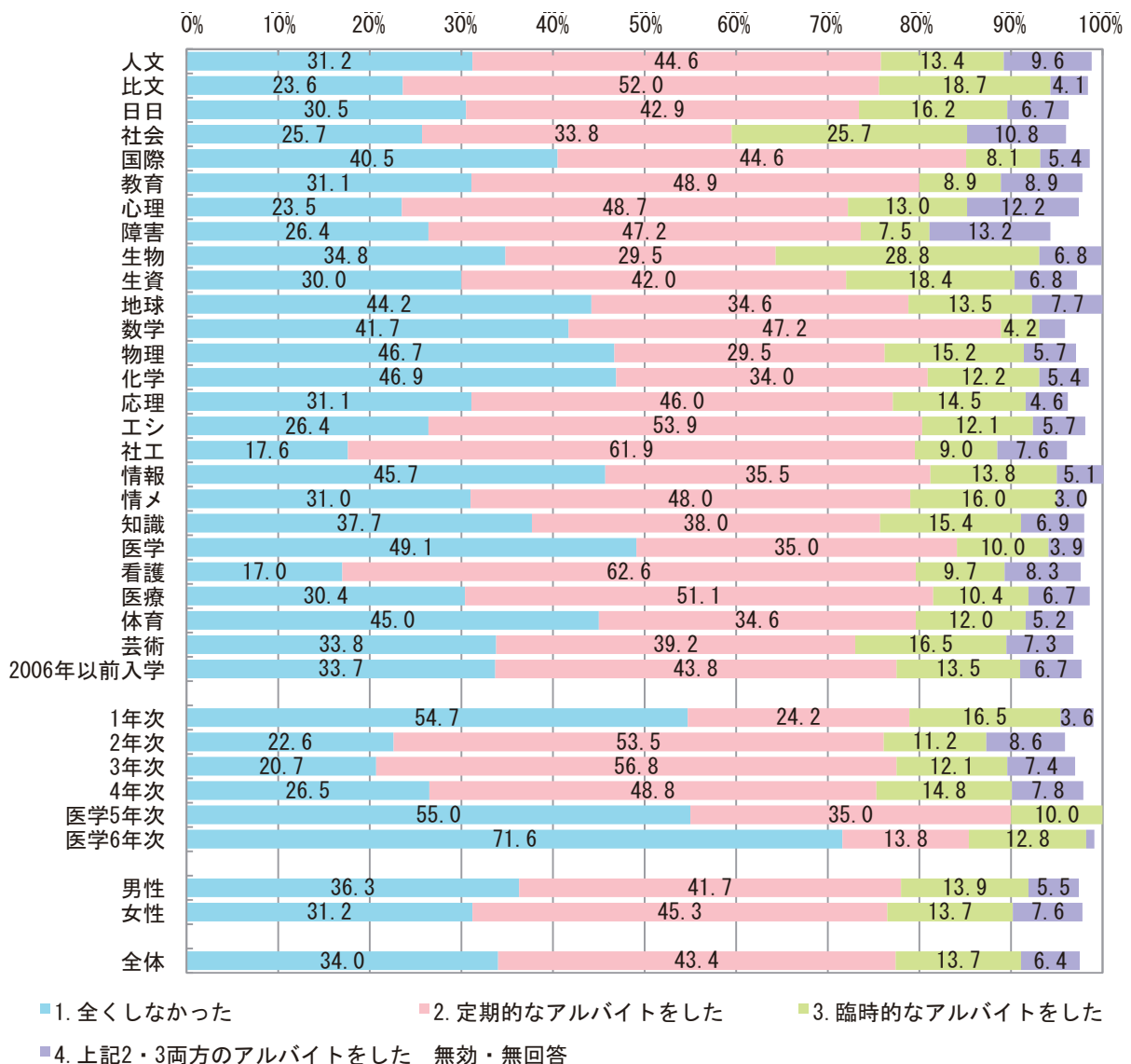
◎アルバイト経験者は全学平均で63.5%。前回調査から約10%減少

アルバイトの経験について、過去5か月間の状況を「全くしなかった」「定期的なアルバイトをした」「臨時的なアルバイトをした」あるいは「定期的と臨時的の両方のアルバイトをした」の4項目から選択してもらった(図2.3)。全学平均で63.5%の学生が4月以降に何らかのアルバイトをしているが、前回の調査(73.9%)から約10%減少している。臨時的なアルバイトだけをした学生の割合(13.7%)は前回調査(13.5%)と大きく変わらないことから、定期的なアルバイトをしている学生が減少したと考えられる。

学年別に見ると、1年次と他とに大きな差がみられる。1年次では半数以上(54.7%)が過去5か月間にアルバイト未経験と答えている。男女間では目立った差ではないものの、女性の方が若干アルバイト経験率が高い。男女間の差については、前回調査でも同様の傾向が見られている。

学群・学類による差は非常に大きい。「全くしなかった」学生の割合は、医学類や化学類、物理学類、地球学類、情報科学類、体育専門学群などで40%以上と大きく、社会工学類、看護学類で20%以下と小さい。このような学類間の差は前回の調査結果にもほぼ同じ傾向が出ており、何かしら学類に固有の事情を反映した差である可能性が高いと考えられる。

図2.3 アルバイトの経験(学類別・学年別・男女別・全体):単位はパーセント



2.4 アルバイトの種類について (問 10)

- ◎飲食店業務が4割、塾講師が2割、飲食店以外の軽労働と家庭教師が各1割強。
- ◎重労働や危険作業はしない。
- ◎個人の特殊技能を活かせるアルバイトの場は少ない。

先の設問9で何かしらのアルバイトの経験があると答えた学生に対して、そのアルバイトの種類について、「家庭教師」「塾講師」「一般事務」「特殊技能」「飲食店での業務」「飲食店以外の軽労働」「建築・土木作業の重労働」「建物倒壊作業等の危険作業」および「その他」の項目から最大3つまで選択してもらった(図24:複数回答を含んでおり、単位はパーセントであることに注意)。

全体では、「飲食店での業務」が最も多く約4割、次いで「塾講師」が約2割、続いて「飲食店以外の軽労働」と「家庭教師」がそれぞれ約1割強を占める。逆に「建築・土木作業の重労働(0.2%)」や「建物倒壊作業等の危険作業(0.1%)」に従事した学生は非常に少ない。前回調査(平成20年度)では「建築・土木作業の重労働」は2.6%見られたが、今回の調査では0.2%と著しく減少していることがわかった。

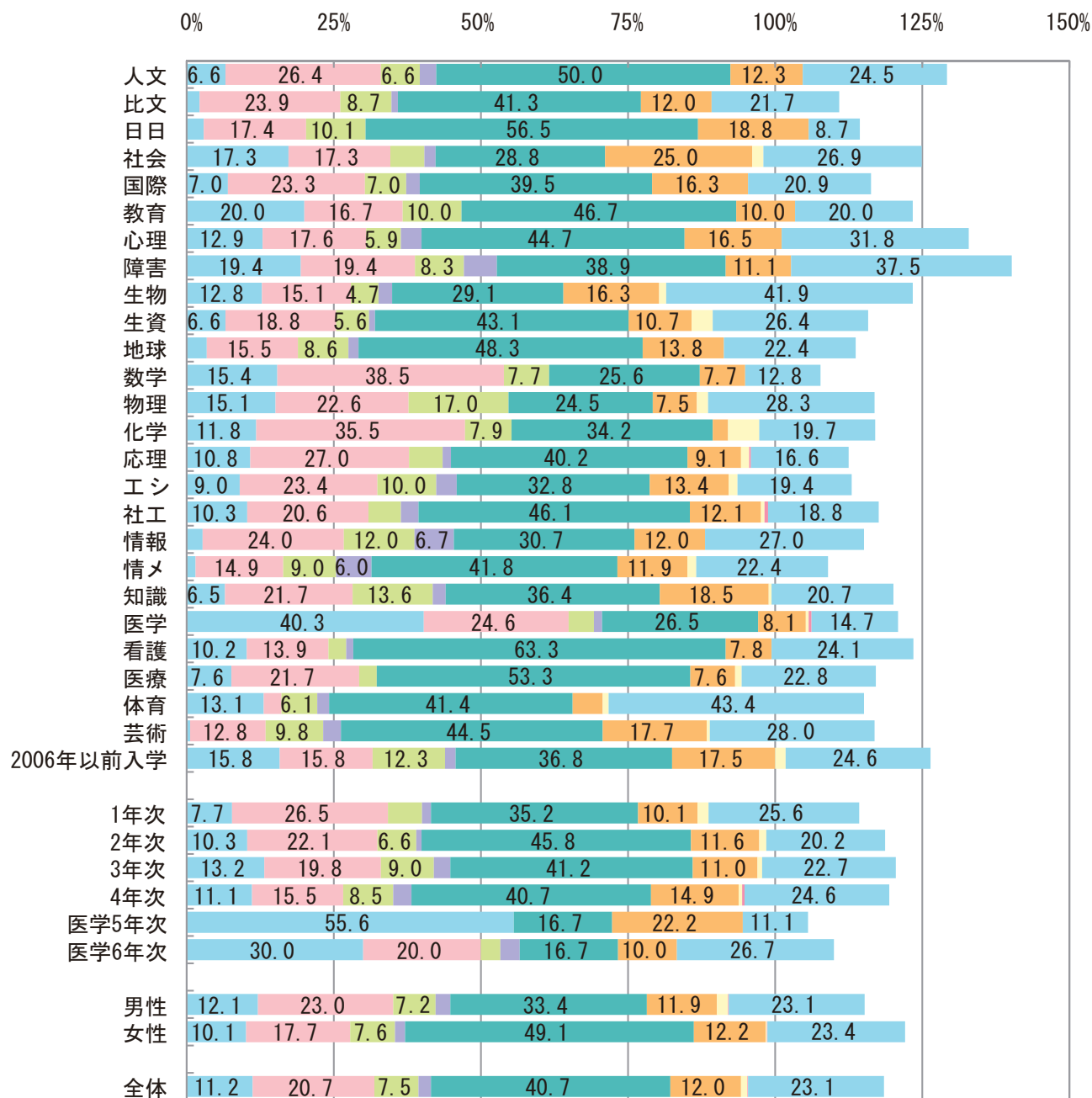
男女差としては、女性は「飲食店での業務」の割合が、男性では「塾講師」の割合がそれぞれ他方より多い。この男女差は前回の調査結果でも同様の傾向が出ている。学年によってアルバイトの種類の比率には差が見られるが、その変化に一定の傾向は認められない。

アルバイトの種類に関する学類による差は非常に大きい。医学類での「家庭教師」の割合は約4割に達し、「塾講師」も約2割半に達する。一方で、「家庭教師」の割合は、芸術専門学群(0.6%)、情報メディア創成学類(1.5%)、比較文化学類(2.2%)、情報科学類(2.7%)、日本語・日本文化学類(2.9%)、地球学類(3.4%)など、いくつかの学類では極端に低い。同様に、「塾講師」の割合は体育専門学群で3%と群を抜いて低い。これらの結果の理由は説明が難しく、前回あるいは前々回の調査結果とも必ずしも一致しない。

「特殊技能」を活かしたアルバイトの割合は全学平均で2.1%と非常に低く、個人の技能を活かされるアルバイトの例は少ないことを示している。また、「特殊技能」を活かしたアルバイトの割合は学類ごとの差が顕著で、日本語・日本文化学類、教育学類、数学類、物理学類、化学類、医療科学類では0%である。一方、情報科学類や情報メディア創成学類および障害学類では5%を超えるなど、学類間に顕著な差が見られる。これは学類によって身に付けられる特殊技能に差があるためか、それとも技能を活かせるアルバイトの種類に偏りがあるためか、あるいはその両方が理由なのか判断できない。

その他の回答のうち具体的な記述の中では、研究室などでの実験補助や被験者など研究に関わるもの(約80件)、学会など学術的なイベントの運営に関わるもの(約15件)、TAや留学生のチューターや大学説明会補助など大学の教育活動に関わるもの(約35件)など、大学や研究に関係する内容が比較的多い。また、スポーツインストラクターやコーチ(約40件)、保育補助や学童保育(約30件)、障害者支援や介護(約15件)、病院業務(約25件)、図書館業務(8件)など、大学での専門分野に深く関わると思われるアルバイトの例も少なくない。

図 2.4 アルバイトの種類（複数回答：学群・学類別・学年別・男女別・全体）：単位はパーセント



- 1. 家庭教師
 - 2. 塾講師, 添削指導
 - 3. 一般事務
 - 4. 特殊技能
 - 5. 飲食店での業務
 - 6. 飲食店以外の軽労働
 - 7. 建築・土木作業の重労働
 - 8. 建物倒壊作業等の危険作業
 - 9. その他
- 無効・無回答

2.5 アルバイトの理由について（問 11）

- ◎アルバイトの理由は、「学費・生活費」が7割弱、「時間の有効活用」が2割半、「サークル活動費」と「レジャー・海外旅行」が各2割強。
- ◎アルバイトの理由の全体的な傾向は前回および前々回の調査結果と変わらない。
- ◎学類による差は大きいですが、特別な傾向が認められる部分は少ない。

先の設問9で何かしらのアルバイトの経験があると答えた学生に対して、アルバイトの理由について、「学費や生活費のため」「サークル活動費のため」「自動車などの購入・維持費のため」「携帯電話の料金等のため」「レジャー・海外旅行のため」「時間の有効活用のため」「技術を得るため」「友人を得るため」および「その他」の項目から最大3つまで選択してもらった（図 2.5：複数回答を含んでおり、単位はパーセントであることに注意）。

全体では、「学費や生活費のため」が最も多く7割近くを占め、次いで「時間の有効活用のため」が約2割半、続いて「サークル活動費のため」と「レジャー・海外旅行のため」が約2割を占める。これら項目別の割合は前回調査の結果とほとんど変わらない。

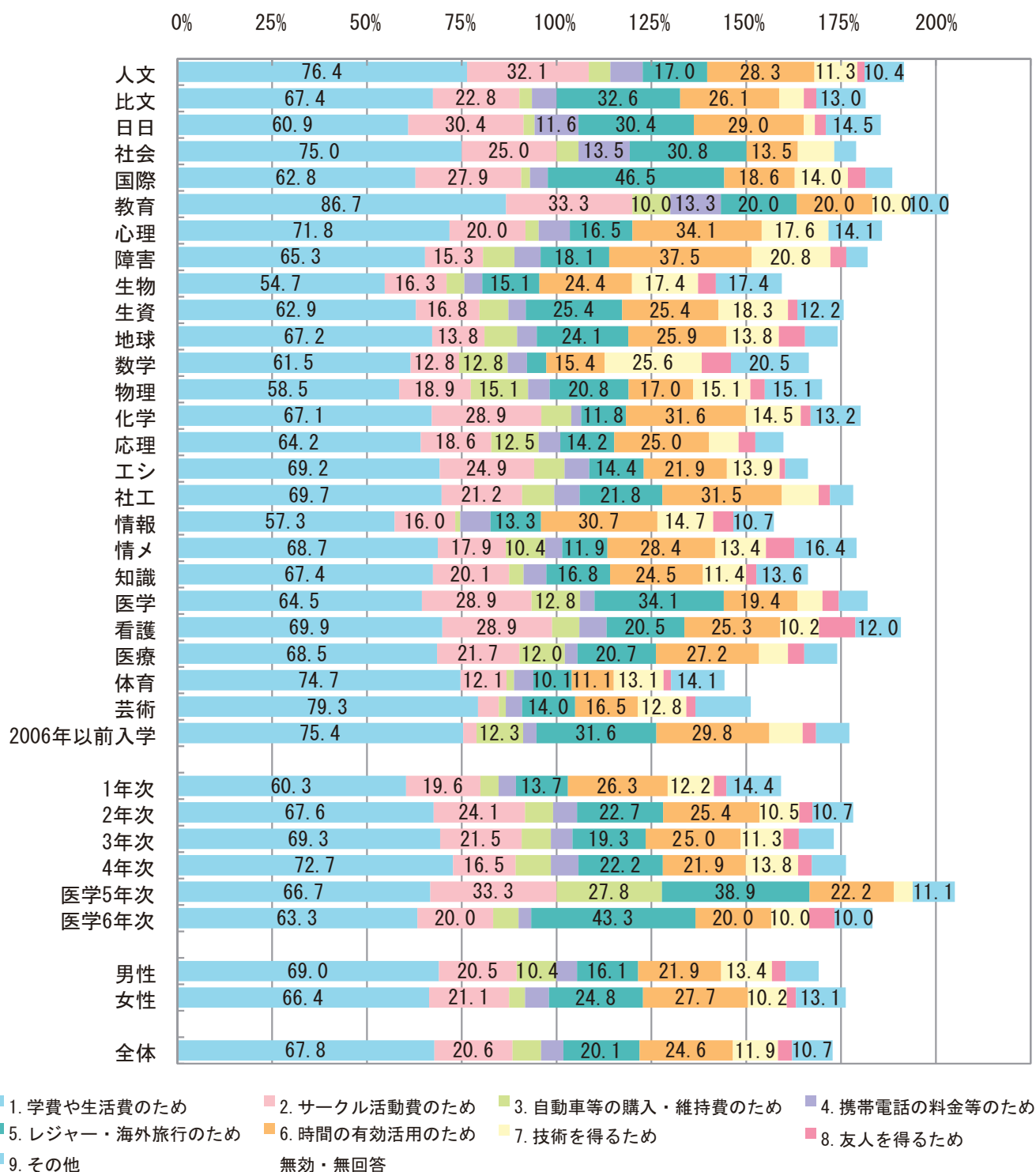
男女差としては、「レジャー・海外旅行のため」との回答が女性（24.8%）で男性（16.1%）より高く、「自動車などの購入・維持費のため」との回答は男性（10.4%）が女性（4.2%）より高い。この男女差については、前回ならびに前々回の調査でも全く同様の傾向が出ている。

学年別では、「学費や生活費のため」との回答が学年が上がるにつれて高くなるほか、「レジャー・海外旅行のため」との回答は1年次（13.7%）から2年次以降（19.3～22.7%）の間で大きく増加している。一方で、「時間の有効活用のため」との回答は学年が上がるにつれて減少する。これら学年別の違いについても、前回調査で全く同様の傾向が出ている。

アルバイトの理由は学群・学類による差が大きいですが、前回や前々回の調査結果とは必ずしも傾向が一致しない。唯一、「レジャー・海外旅行のため」との回答が、比較文化学類（32.6%）、日本語・日本文化学類（30.4%）、社会学類（30.8%）、国際総合学類（46.5%）の人文・社会系の学類で高い傾向は前回の調査結果と一致している（今回の調査では、これら学類のほかに医学類で34.1%と値が高い）。逆に同理由の回答が、数学類で極端に低く（5.1%）、次いで体育専門学群（10.1%）や情報科学類（13.3%）および芸術専門学群（14.0%）で低い値を示す点も、やはり前回の調査結果と一致している（今回の調査では、ほかに情報メディア創成学類の11.9%や化学類の11.8%なども目立って値が低い）。これらのように以前の調査での結果と一致する傾向は、学類ごとの興味の方向性の違いなどを反映している可能性がある。

その他の回答のうち具体的な記述の中では、社会経験や具体的な希望職種体験のためとの回答が91件と非常に多い。このほか、就職活動のためとする6件や貯蓄のためとする14件はともに将来に向けた取り組みと受け取ることができる。一方で、頼まれた・誘われたためとの回答が40件と比較的多く、受け身な理由でのアルバイトも少なくない様子が見える。

図 2.5 アルバイトの理由（複数回答：学群・学類別・学年別・男女別・全体）：単位はパーセント



2.6 「つくばスカラシップ」制度について（問 12）

◎ 「つくばスカラシップ」の認知度は2割弱

本学独自の奨学金制度「つくばスカラシップ」に関する調査は今回が初めてである。学群生で「つくばスカラシップ」について「知っている」が18.4%、「知らない」が80.6%となっている。

学群・学類別では、「知っている」割合が高い学類は、日本語・日本文化学類 31.4%、教育学類 31.1%であった。「知らない」割合が高い学類は、数学類 93.1%、体育専門学類 92.4%であった。

学年別では「知っている」の割合は、1年次 20.7%、2年次 19.6%、3年次 17.6%、4年次 16.6%であり、年次が上がるにつれて割合は減少するが、大きな違いはない。

今後、ホームページ等を活用した積極的な周知や修学支援の拡充が必要である。

図 2.6.1 「つくばスカラシップ」の認知度（全体）

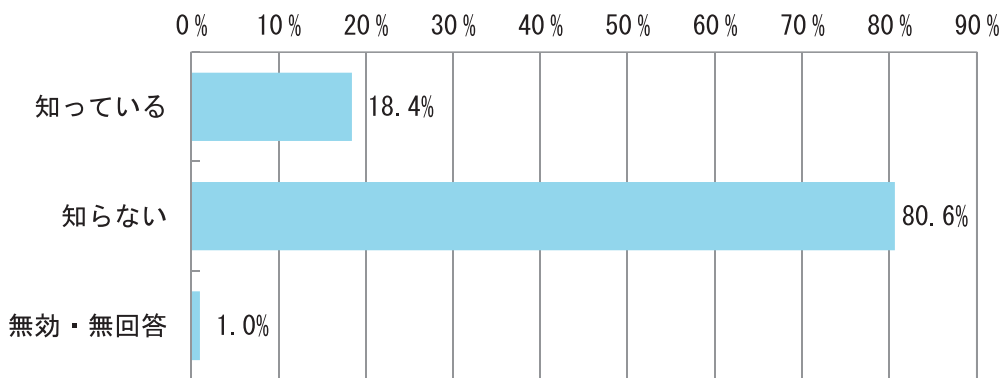
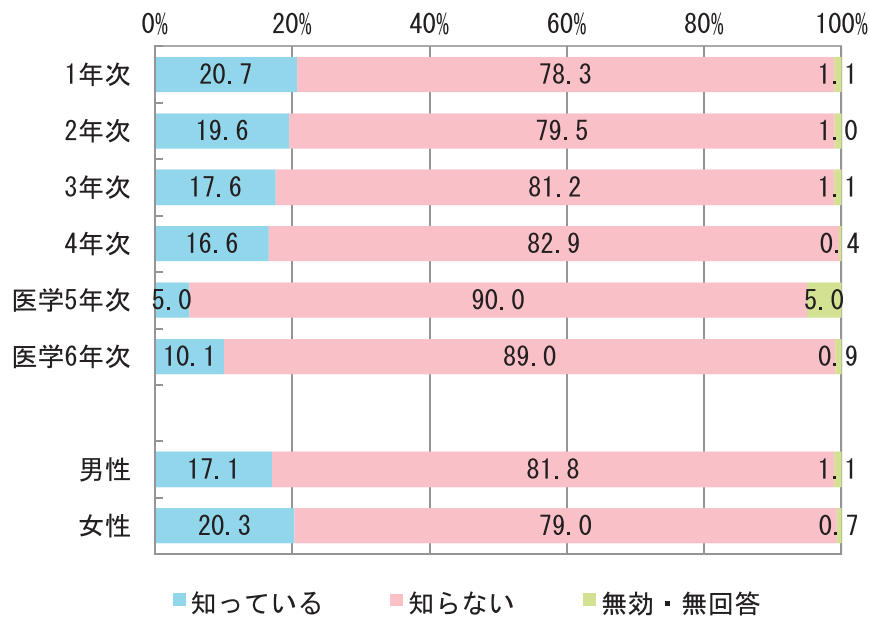


図 2.6.2 「つくばスカラシップ」の認知度（学年別・男女別）



2.7 希望する経済支援について（問 13）

◎学群生全体の7割の学生が何らかの経済支援を希望している。

希望する経済支援についての調査は今回が初めてである。学群生全体の7割の学生が何らかの経済支援を希望しており、希望する経済支援として「給付型の奨学金」が49.8%、「授業料免除」が39.3%であった。授業料の支払いまたは生活費のために「一時貸付金」を希望する学生も5.0%あった。

今後、給付型の奨学金や授業料免除の拡充が必要である。また、授業料支払費や生活費が不足した場合の一時的な貸付金等の支援策が必要である。

「授業料免除」を希望する割合は学年別で見ると1年次36.1%、2年次39.7%、3年次38.4%、4年次45.0%であった。

図 2.7.1 希望する経済支援（全体、%）

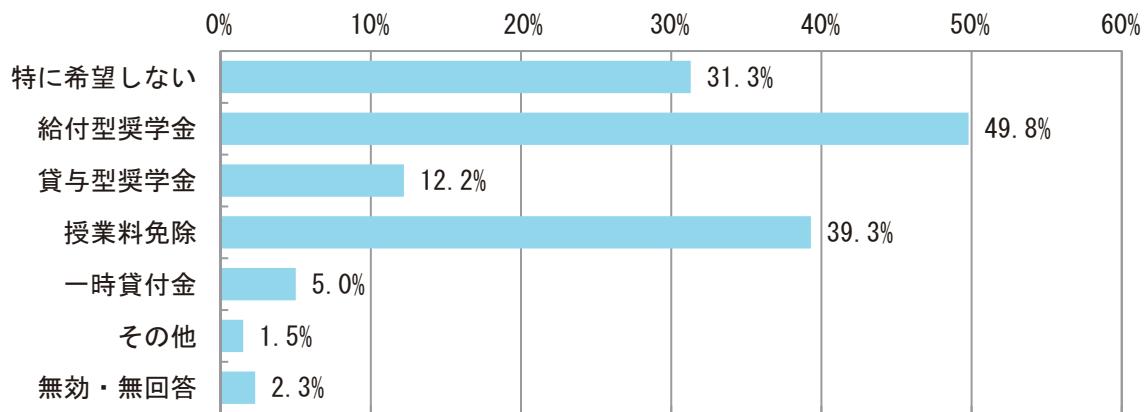


表 2.7.2 希望する経済支援（学年別、男女別、%）

	希望しない	給付型	貸与型	授業料免除	貸付金	その他	無効・無回答
1年次	33.2	50.2	9.8	36.1	4.7	0.9	2.1
2年次	32.1	49.2	11.5	39.7	3.9	1.9	2.5
3年次	31.6	48.3	11.6	38.4	5.3	2.0	2.2
4年次	25.9	52.9	15.9	45.0	5.8	1.7	2.1
医学5年次	40.0	55.0	25.0	30.0	7.5	0.0	2.5
医学6年次	42.2	38.5	17.4	33.9	8.3	0.9	2.8
男性	31.9	50.0	12.1	37.9	5.3	1.5	2.0
女性	30.2	49.8	12.3	41.3	4.8	1.6	2.4

2.8 平均的な1日ないし1週間の過ごし方について（問14）

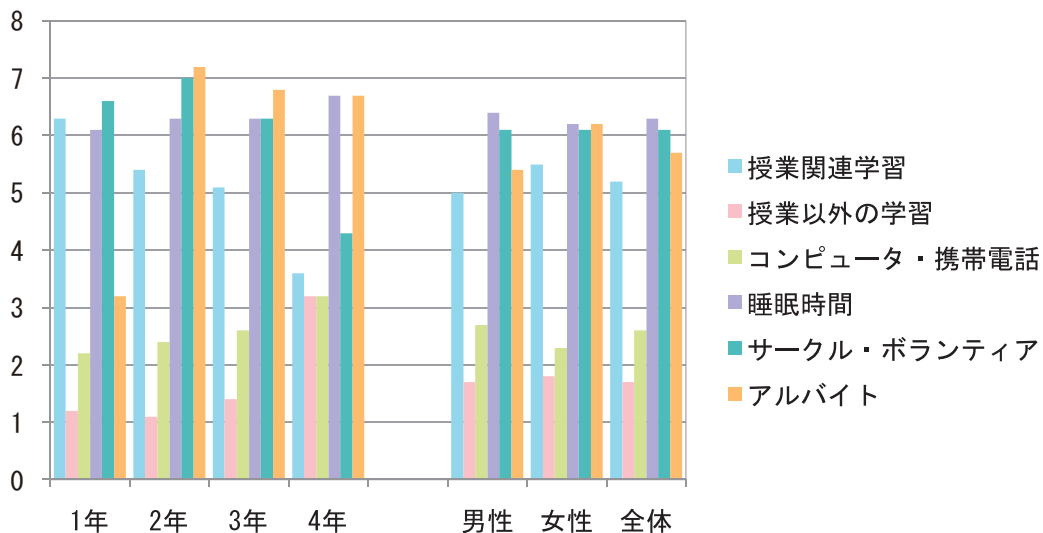
- ◎授業関連の学習時間は増加。
- ◎コンピュータ・携帯電話の使用時間は年次とともに増加。

平均的な1日の時間の使い方を「授業出席および予習・復習などの学習時間」「授業以外の勉強時間」「コンピュータや携帯電話を使用する時間」「睡眠時間」について、また、1週間あたりの「サークル・ボランティアなどの活動時間」「アルバイト時間」について計6項目で調査した。

全体の平均は、1日あたり、授業およびその関連学習に5.2時間、授業以外の勉強に1.7時間、パソコンや携帯電話の使用に2.6時間、睡眠に6.3時間、また、1週間あたり、サークル等の活動に6.1時間、アルバイトに5.7時間であった。男女で比較すると、女性と比べて男性は学習時間が0.5時間短く、逆にコンピュータ・携帯電話の使用時間が0.4時間長かった。学年で比較すると、授業に関する学習時間が、学年が上がるにつれて減少している。学習方法の効率化により予習・復習に割く時間が減少しているのかもしれない。また、4年生の授業以外の勉強時間は他学年より長い（3.2時間）が、合計の学習時間は2年生以上ではほとんど変わらない。コンピュータ・携帯電話の使用時間と睡眠時間は逆に学年が上がるにつれて増加している。2年前の前回調査と比較すると授業関連の学習時間が増加（0.5時間）しているがその他はほとんど変わっていない。

学群・学類ごとに比較すると、生物学類、化学類、医学類、看護学類および医療科学類での学習時間が6時間を超えていた。体育専門学群では、サークル等の活動時間（11.3時間/週）が長いなど、学類・学群ごとに特徴がみられた。

図 2.8 授業日の過ごし方（学年別、男女別、全体）：単位は時間



2.9 学生宿舎についての満足度について（問 15・問 16）

◎改修棟は新料金を含め満足度が高い。

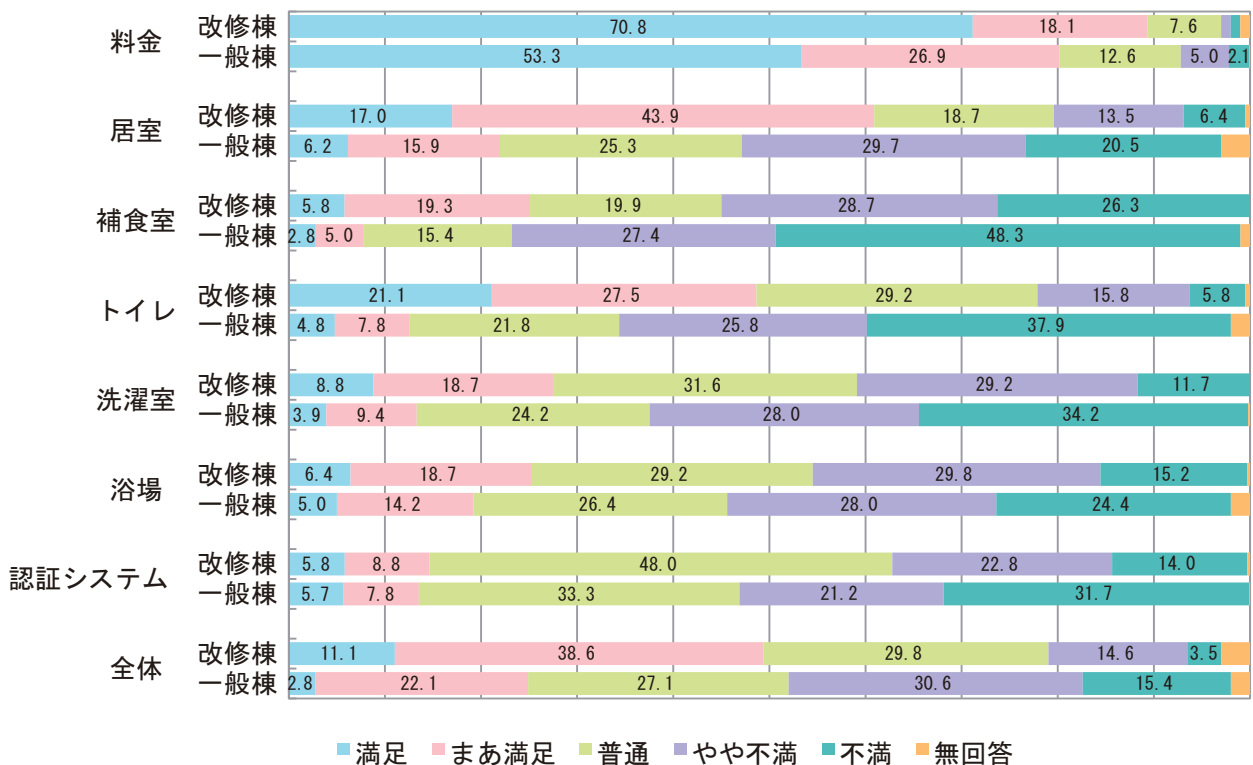
◎未改修棟の入居者は、前回調査と同様に半数以上が何らかの不満を感じている。

学生宿舎の満足度について、前回と同じく「入居している」または「入居していた」学生にのみ回答を求めた。併せて、今回は、平成 21 年度から 5 ヶ年計画で学生宿舎の一部改修を始めているため、問 15 において入居棟を記入してもらい、改修棟と未改修棟（一般棟）にそれぞれ入居している学生の満足度の比較を行った。また、改修棟は新寄宿料を設定しているため、問 16 に新たに料金についての設問を追加した。その結果、料金については、改修棟の新寄宿料に対して約 80%以上が満足しており、未改修棟の入居者を含め不満を持つ学生は少なかった。また、改修棟では、居室やトイレについて 5～6 割の学生が満足しており、不満は 2 割程度である。これに対して、未改修棟では、「補食室」「トイレ」に対する不満が多く、「補食室」には 75%の学生が（やや）不満と答えている。これは前回とほぼ同じ数値である。なお、改修棟であっても「補食室」に不満を感じる者が半数程度おり、これは利用者の使い方や後片付け等の問題に起因しているものと思われる。

洗濯室については、平成 22 年度からコインランドリーが導入されたが、前回と比べ、不満度がわずかに減少したものの、大きな改善にはつながっていない。料金面での負担が増加したと感じる学生が多いためであろう。「浴場」と「認証システム」については、依然として満足度は低いままである。

全体では、未改修棟の学生は前回と同じ約半数の者が何らかの不満を持っているが、改修棟にあっては約 8 割の学生が不満を感じていないという結果が得られた。

図 2.9 学生宿舎満足度（全体）



2.10 学生宿舎での生活について（問 17）

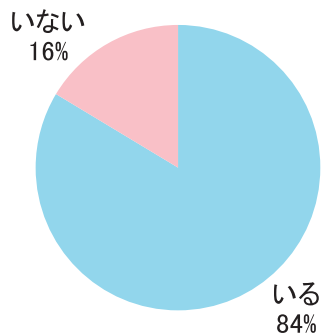
◎学生宿舎での生活については概ね不安を感じていない。

今回、学生宿舎に入居しているまたは入居していた学生を対象に、学生宿舎での生活について質問し、2,314人から回答を得た。その結果、約8割の学生が「棟内に友人」がおり、「近隣入居者と会話やあいさつを交わす」交流があり、「宿舎生活に不安はない」と回答している。これは、学生宿舎がキャンパス内に設置されていて、隣人は同じ学生であるという安心感からくるものと思われる。ただし、「不安がある」と回答した学生も全体の2割にのぼっており、理由として、防犯上のこと、災害時のこと、衛生上のことなどが挙げられている。

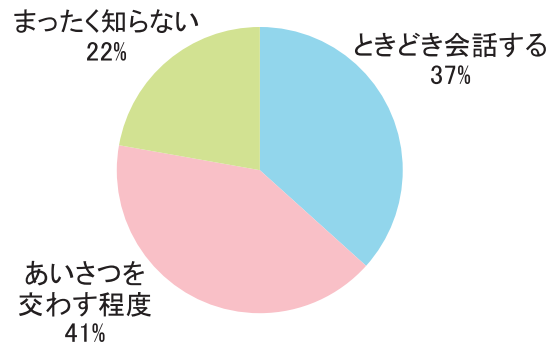
入居者間のコミュニティ組織の必要性については、「必要と思わない」学生が「必要と思う」学生を上回っている。必要性を認めない場合は、「学類やサークルでの友人で十分」「生活のリズムやライフスタイルが異なるので無理に作る必要はない」などの意見が多い。一方、必要と思う学生は、「清掃等の実施」はぜひ必要であると考えている。

図 2.10 学生宿舎での生活（全体）

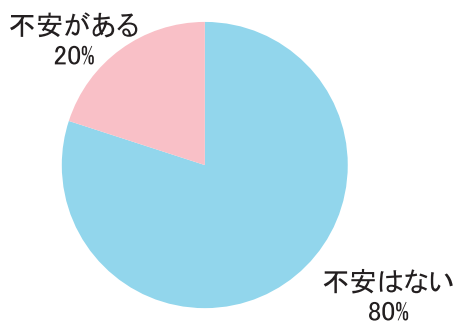
17-A.入居している学生宿舎棟内の友人



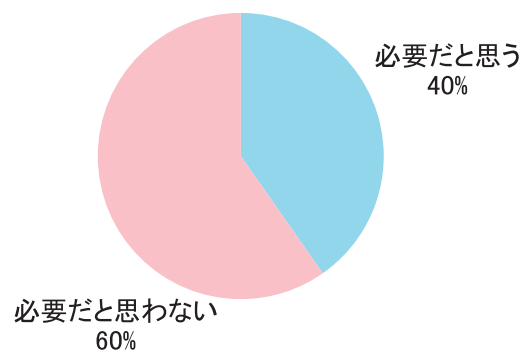
17-B.学生宿舎内の近隣入居者との関係



17-C.学生宿舎生活での不安の有無



17-D.学生宿舎のコミュニティ組織の必要性



2.11 日常生活の満足度について（問 18）

- ◎7割の学生が満足している。不満の学生は1割。
- ◎心理的、精神的な要因が満足度に大きく関係する。

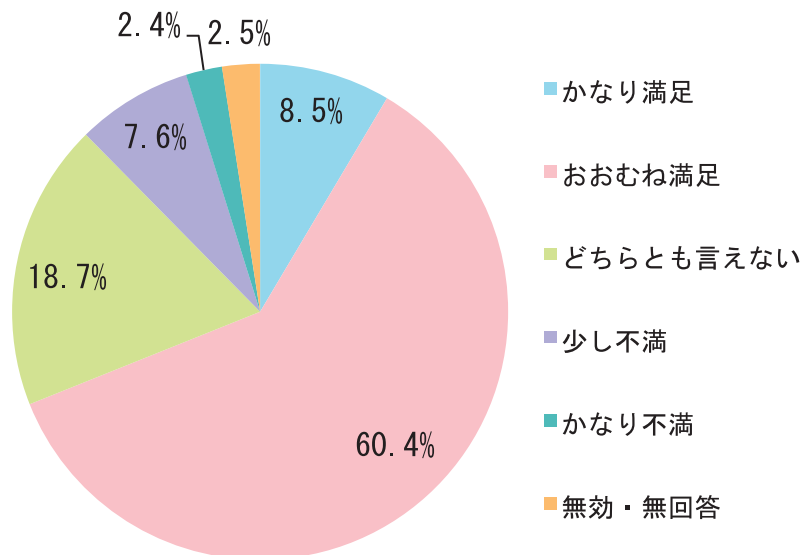
日常生活の全体的な満足度を答えてもらった。その結果、「かなり満足」が8.5%、「おおむね満足」が60.4%で、7割近くの学生が満足している。一方、「少し不満」が7.6%、「かなり不満」が2.4%で、不満を感じている学生が1割いることが分かった。2年前の前回調査と比べると、満足している学生が増加し、不満を感じている学生は減少している。

住居形態との関連をみると、学生宿舎に住んでいる学生は民間のアパート等に住んでいる学生より、満足度が7%ほど低いが、不満度には大きな違いはみられない。親と同居している学生は、満足度、不満度とも、学生宿舎の住人とほぼ同様である。また、1か月の収入や通学時間と日常生活の満足度との間にはあまり関連はみられない。

「自分のやりたいことができている」「大学生生活が充実している」と感じている学生では8割近くが満足している。一方、心理的、精神的問題を持つものでは日常生活に満足を感じている学生は5割を切り、逆に不満を感じる学生は3割近くになり、日常生活に満足度を感じる上でこれらの要因が大きく影響することが伺える。

男女別でみると、男性では65.4%、女性では74.0%が満足と感じており、女性の満足度が高い。学群・学類別では、理科系の学類や芸術学類等で満足度が6割前後とやや低いがそれほど目立った違いはない。

図 2.11 日常生活の満足度



第3章 通学・事故等について

3.1 通学の交通手段について（問 19）

- ◎自転車の圧倒的な利用率。
- ◎キャンパス交通システムは雨天時に高い利用率。

通学の交通手段として、「徒歩」「自転車」「バイク」「自家用車」「キャンパス交通システム」「路線バス」「TX」「常磐線」をあげて、複数回答方式で利用手段を尋ねた。

雨天時（図 3.1.1）、雨天以外（図 3.1.2）のどちらにおいても自転車の利用率が最も高い（それぞれ 50.8%、63.7%）。前回調査（平成 20 年度）に比べると雨天時、雨天以外ともに減少（それぞれ、－7.8%、－4.8%）している。前々回調査（平成 15 年度）では自転車利用が 80%を超えており、減少傾向が続いている。しかし、依然として本学の通学の足として最も利用率が高く、学生生活を象徴する一面となる一方で、駐輪スペース不足、交通マナーなど自転車環境の問題は深刻であろう。

キャンパス交通システム（学内循環バス）については、TX ないし常磐線と合わせて利用しているものもあり、それらを含めると雨天以外では 15%強であるが、雨天時では 25%を超えるシェアとなり高い利用率を示している。TX の利用者は 10%弱であるが、前回調査（7%前後）に比べると増加の傾向にあり、TX を利用した首都圏からの通学が定着している。しかし、学年が上がるに伴い TX 利用通学者の割合は減少する傾向にある。

雨天時と雨天以外を比べると、雨天時に自転車の利用が 13%ほど減り、その分が徒歩と学内循環バス利用で増えている形である。

なお、バイク、自家用車については、前回、前々回調査とほぼ同様の利用率となっている。

図 3.1.1 通学時の交通手段（雨天時、学年別、男女別、全体）

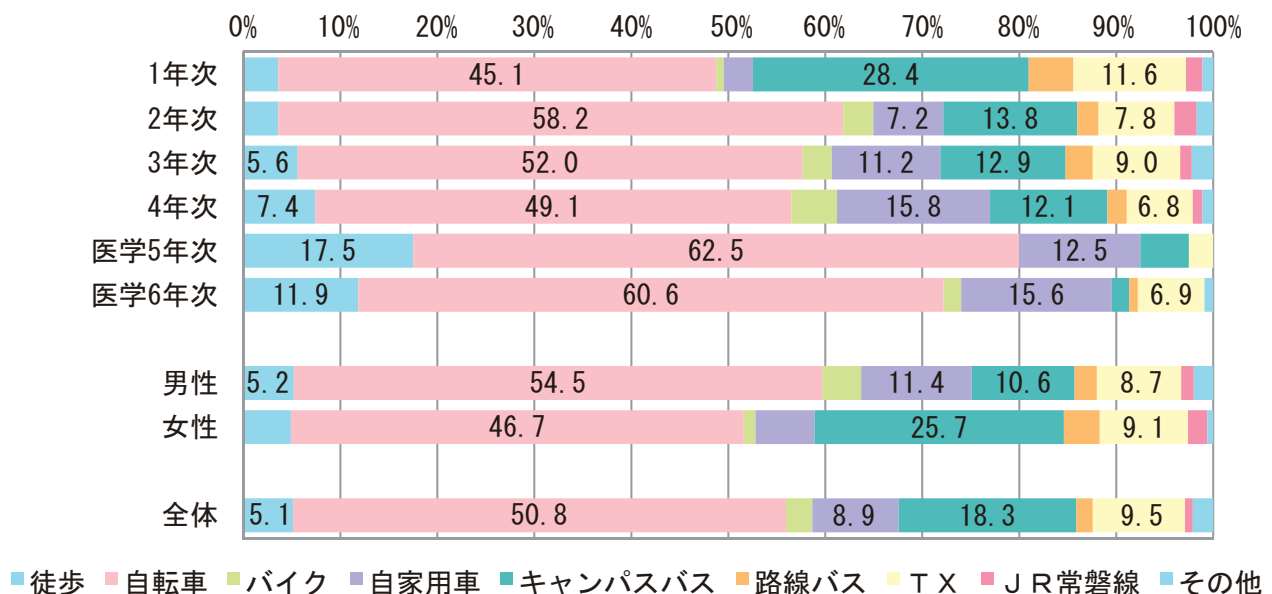
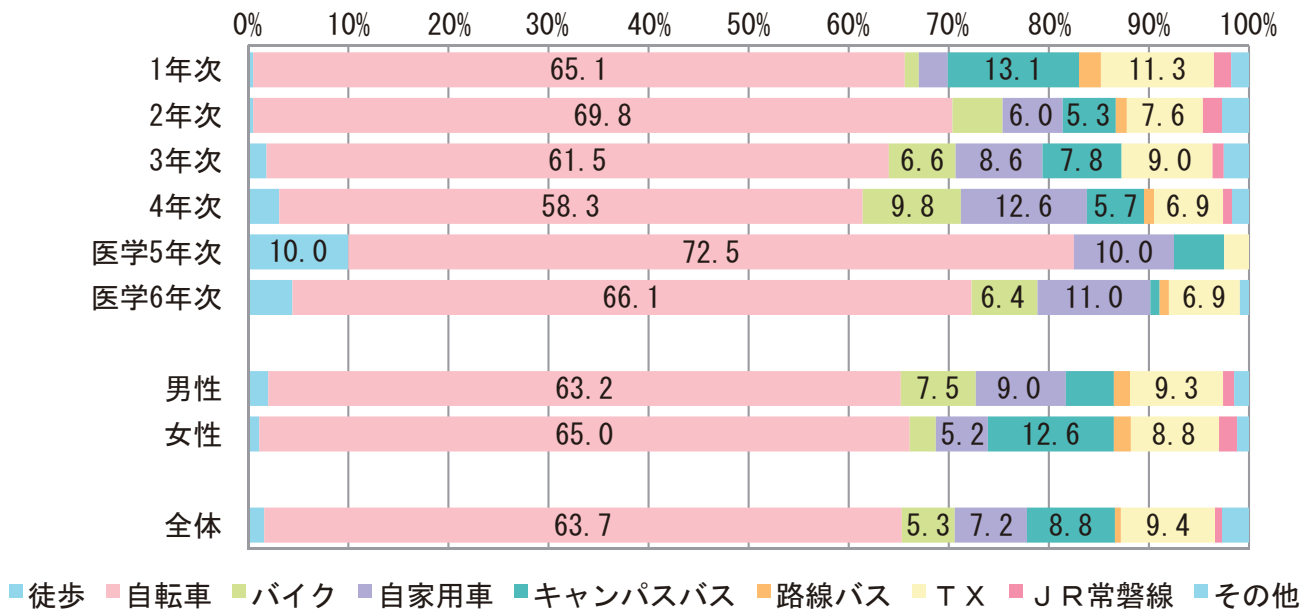


図 3.1.2 通学時の交通手段（雨天以外、学年別、男女別、全体）



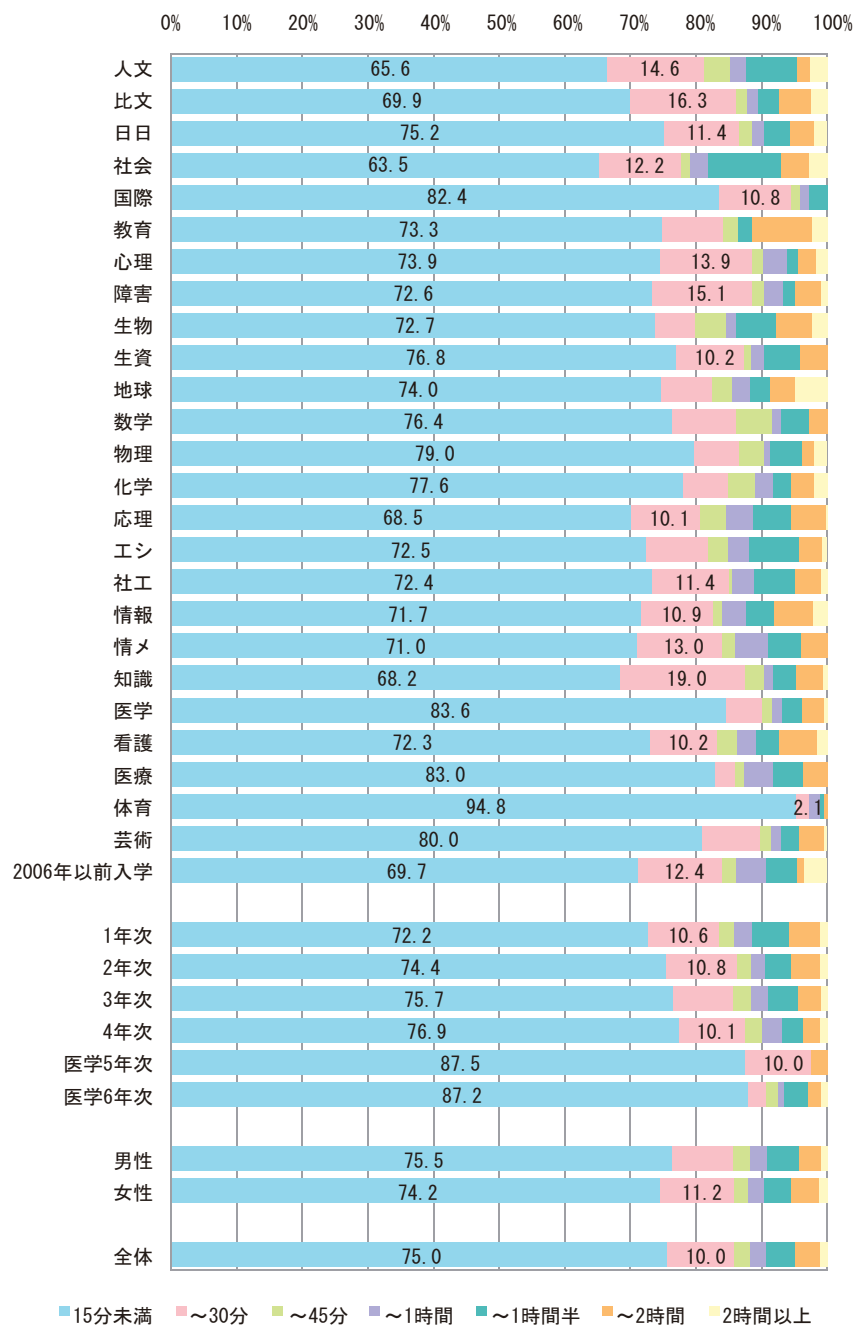
3.2 通学時間について (問 20)

- ◎およそ4分の3の学生が15分以内の通学時間。
- ◎1時間以上かけて通学する学生は1割。

通学に要する時間を7項目から選択してもらった(図3.2)。通学手段から容易に想像できるが、75%の学生が15分未満の通学時間となっている。学生宿舍の充実、キャンパス周辺の学生アパート等の多さがその背景にあると推察できる。特に学類別では、体育専門学群で95%の学生が15分未満の通学時間となっている。

その一方で、30分以上の時間をかけて通学している学生は全体の14%、1時間以上かけている学生は9.1%である。前回調査と比較すると3%前後増加しており、TXの開業等により通学の遠距離化が少し進んでいる。

図 3.2 通学時間 (学群・学類別、学年別、男女別、全体)



3.3 キャンパス交通システムの利用頻度について（問 21）

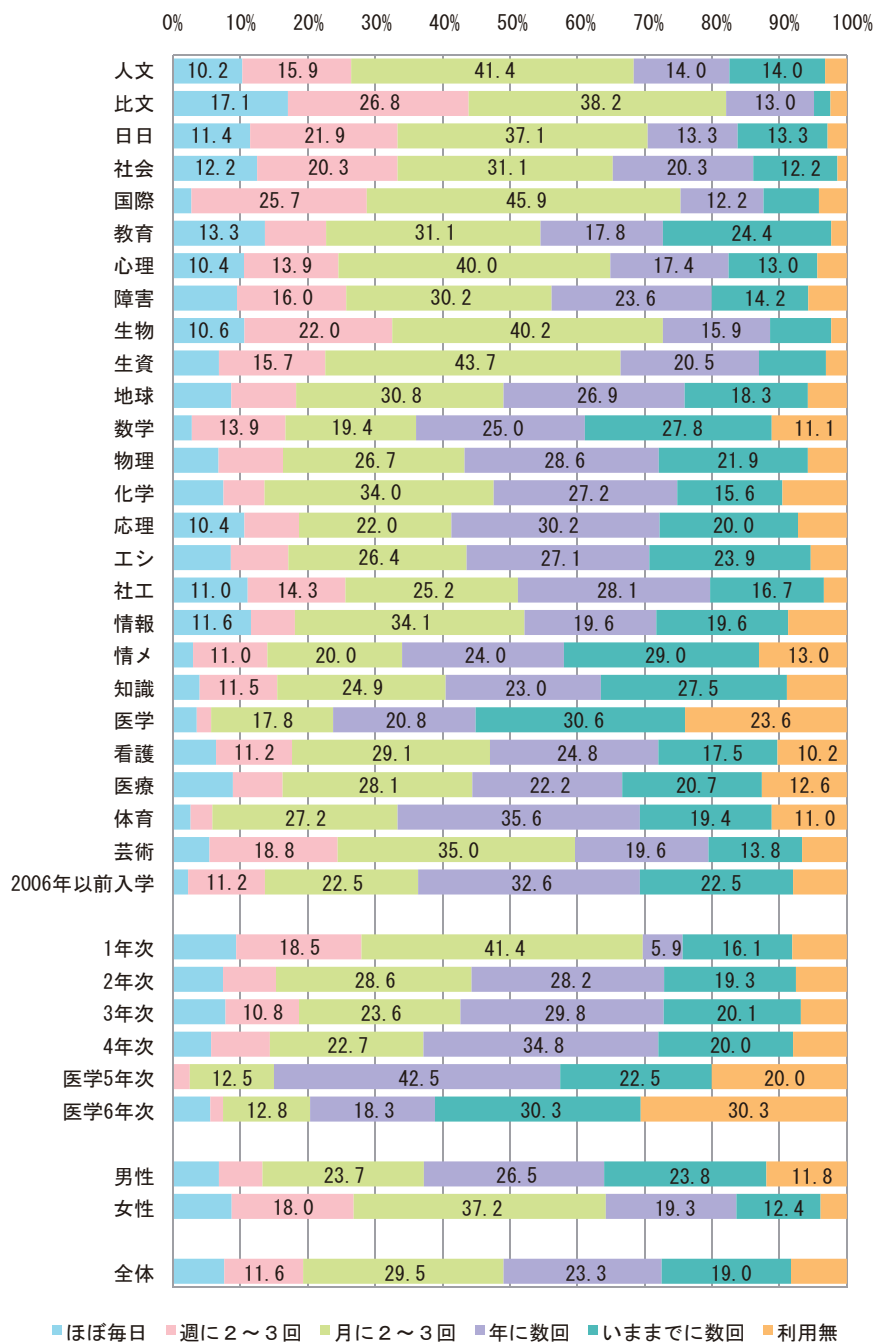
◎およそ 20%の学生が週に 2～3 回以上の多頻度利用。

キャンパス交通システムの利用頻度について、「ほぼ毎日」「週に 2～3 回」「月に 2～3 回」「年に数回」「いままでに数回」「利用したことはない」の 6 項目から 1 つ選択してもらった（図 3.3）。

医学類、体育専門学類など一部の学類を除き、およそ 5 割の学生が月に 2～3 回以上、キャンパス交通システムを利用していることがわかる。

しかし、学年があがるに従って、利用頻度は下がる傾向にある。講義等での学内の移動が少なくなると利用頻度が減少することが考えられる。前回の調査とはほぼ同じ結果であり、おそらくキャンパス交通利用システム利用証の所有率とも相関が高いと思われる。

図 3.3 キャンパス交通システムの利用頻度（学群・学類別、学年別、男女別、全体）



3.4 交通事故について (問 22)

- ◎全体の15%が事故の体験。
- ◎医学群医学類の事故体験率が大きく減少。

大学入学後の交通事故に関して、「加害者」「被害者」「自損事故」の経験を複数回答で尋ねた。結果を表3.4に示す。全体を見ると、事故の体験割合は約15%であり、前回の結果から大きな変化はみられなかった。過去の調査では、医学類の学生の事故体験率が際だって高く、5・6年次の割合の高さは顕著であったが、前回の結果に比べて、上位ではあるものの加害者、被害者、自損事故のすべてで大きく減少していたのは望ましい傾向である。年次があがるにつれて被害者の割合が増えていくのはやむをえないが、年次が早いうちから注意を促したい。目についたのは、前回の調査に比べて事故の体験率が約10%増加した社会学類である。学生は人の生命の尊さを改めて心に留め、交通ルールを守り、日々安全運転を心がけてほしい。

表 3.4 交通事故 (学群・学類別、学年別、全体)

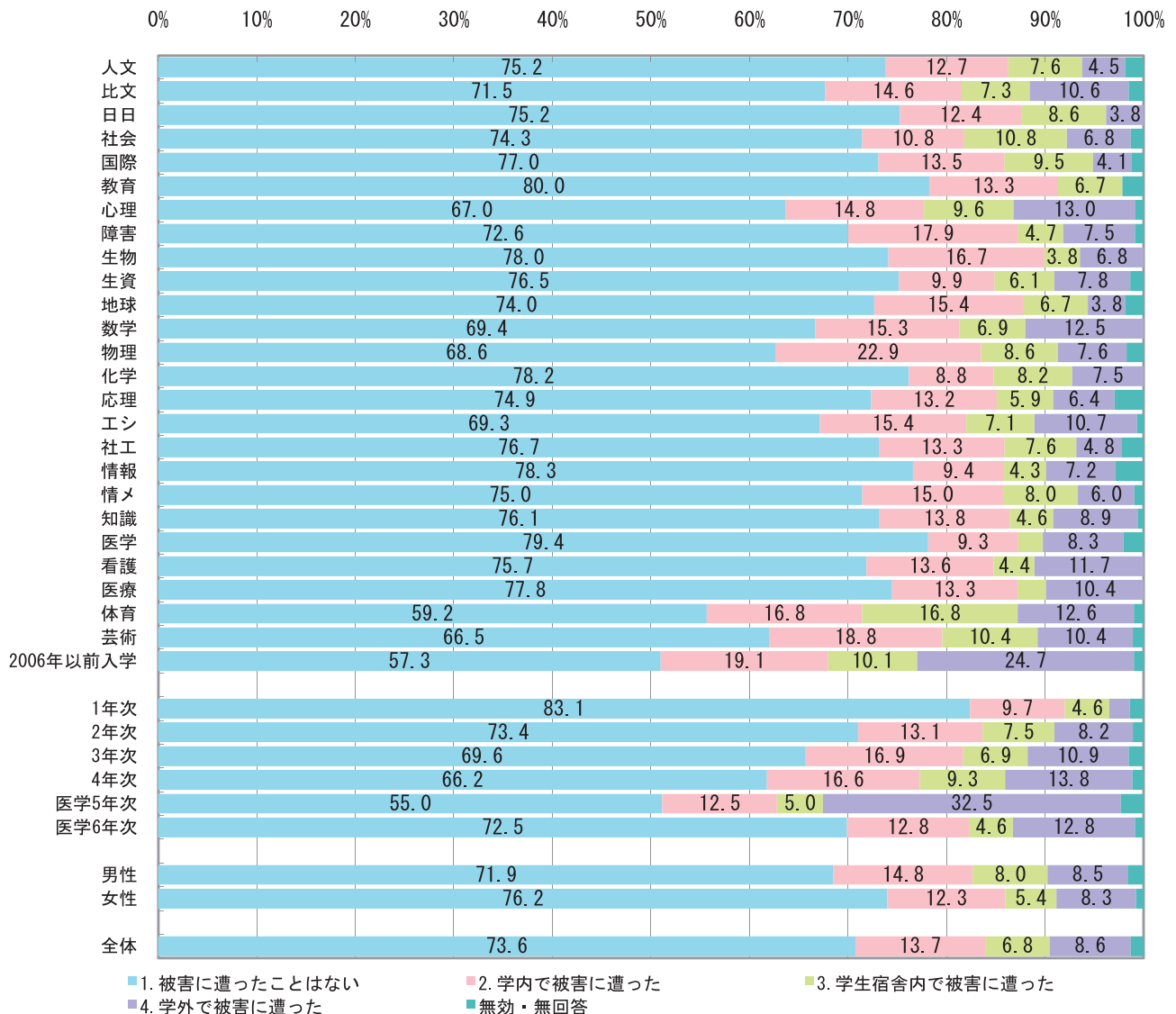
学類名等	回答数	1. 事故の経験はない		2. 加害者になったことがある		3. 被害者になったことがある		4. 自損事故の経験がある	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
人文	157	142	90.4	3	1.9	6	3.8	6	3.8
比文	123	108	87.8	3	2.4	9	7.3	5	4.1
日日	105	102	97.1	1	1.0	0	0.0	2	1.9
社会	74	57	77.0	2	2.7	12	16.2	6	8.1
国際	74	64	86.5	0	0.0	6	8.1	4	5.4
教育	45	36	80.0	2	4.4	5	11.1	2	4.4
心理	115	102	88.7	3	2.6	7	6.1	3	2.6
障害	106	91	85.8	3	2.8	6	5.7	7	6.6
生物	132	118	89.4	2	1.5	6	4.5	9	6.8
生資	293	255	87.0	9	3.1	17	5.8	16	5.5
地球	104	89	85.6	1	1.0	13	12.5	1	1.0
数学	72	61	84.7	1	1.4	8	11.1	4	5.6
物理	105	90	85.7	3	2.9	3	2.9	8	7.6
化学	147	137	93.2	3	2.0	6	4.1	4	2.7
応理	454	383	84.4	12	2.6	26	5.7	32	7.0
工シ	280	233	83.2	6	2.1	23	8.2	20	7.1
社工	210	185	88.1	3	1.4	15	7.1	7	3.3
情報	138	119	86.2	5	3.6	12	8.7	5	3.6
情メ	100	91	91.0	1	1.0	5	5.0	4	4.0
知識	305	268	87.9	5	1.6	24	7.9	11	3.6
医学	432	334	77.3	28	6.5	48	11.1	36	8.3
看護	206	181	87.9	5	2.4	17	8.3	4	1.9
医療	135	116	85.9	2	1.5	11	8.1	8	5.9
体育	191	169	88.5	11	5.8	6	3.1	12	6.3
芸術	260	229	88.1	3	1.2	19	7.3	12	4.6
2006年以前入学	89	63	70.8	9	10.1	16	18.0	5	5.6
1年次	1,315	1,244	94.6	12	0.9	43	3.3	18	1.4
2年次	1,048	920	87.8	23	2.2	57	5.4	45	4.3
3年次	986	814	82.6	24	2.4	83	8.4	73	7.4
4年次	961	754	78.5	51	5.3	114	11.9	75	7.8
医学5年次	40	28	70.0	6	15.0	6	15.0	6	15.0
医学6年次	109	67	61.5	12	11.0	23	21.1	17	15.6
男性	2,455	2,086	85.0	75	3.1	169	6.9	152	6.2
女性	1,921	1,674	87.1	48	2.5	151	7.9	78	4.1
全体	4,468	3,833	85.8	128	2.9	327	7.3	234	5.2

3.5 盗難被害について (問 23)

- ◎全体の26%が盗難の被害者。
- ◎調査項目全ての場所で被害者の割合が減少。
- ◎男性の方が女性に比べて被害者の割合が高い。

調査項目の場所別に前回と比較すると、「学内」で0.4%、「宿舎内」で1.3%、「学外」で2.1%、そして全体としては約3%、被害の割合が減少しており、鍵付きロッカーの設置を増やしたことや、日頃から行っている防犯意識を高める活動など、ハード・ソフト両面からの対策の成果が出ていると思われる。学群・学類別では、体育専門学群の被害率が高い。また、男女を比較すると、被害者の割合は男性の方が高いが、前回と比較して男性は全ての項目で減少しているのに対し、女性は「学内」の割合が増加している。そこで「学内」を学類別に見ていくと、女性が比較的多い第二エリアの学類で、教育学類を除いて、被害者の割合が全て増加している。今後とも男女問わず対策を立てていく必要がある。

図 3.5 盗難被害 (学群・学類別、学年別、男女別、全体)

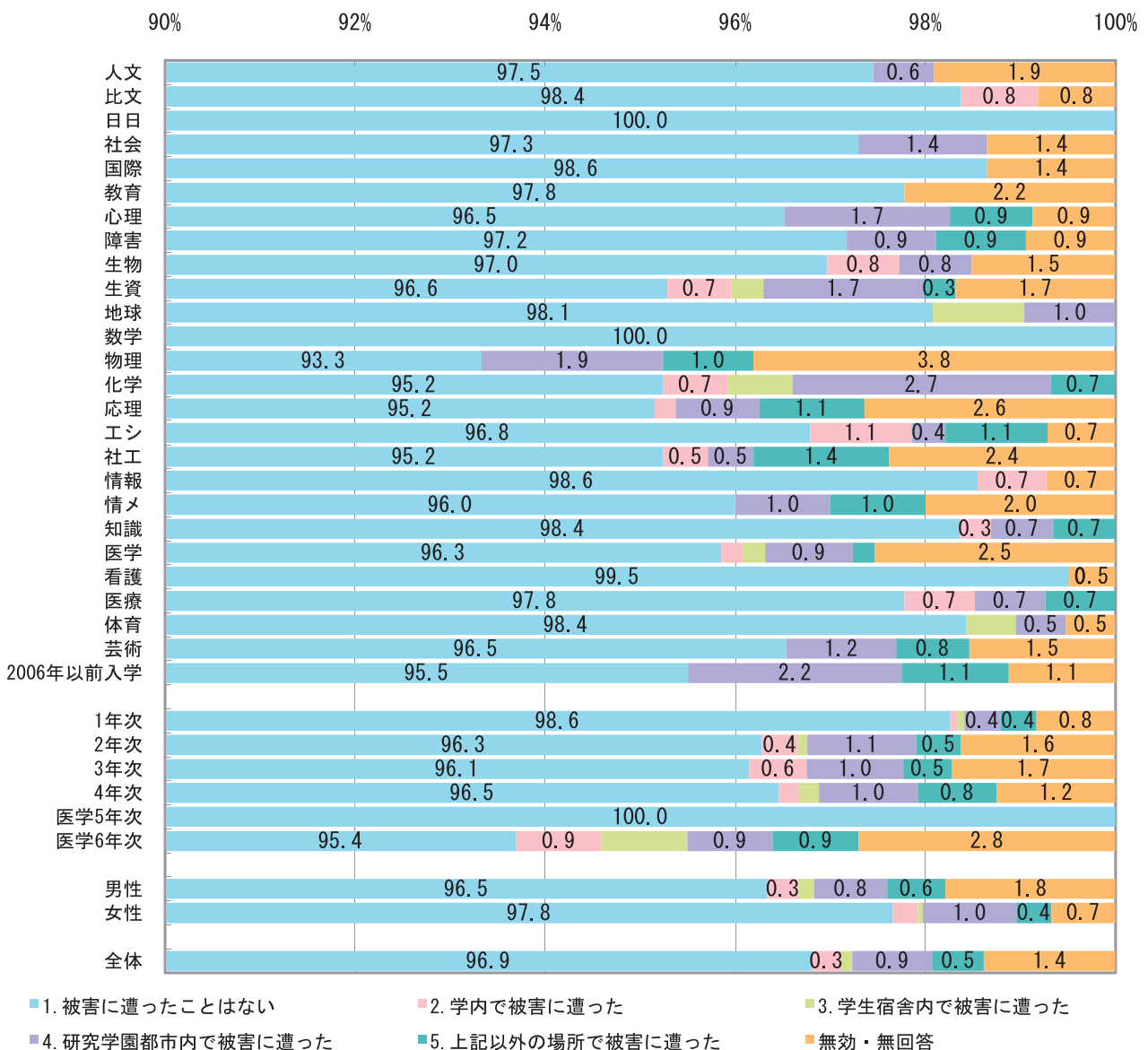


3.6 傷害等の被害について (問 24)

- ◎全体の2%弱が傷害等の被害者。
- ◎研究学園都市内の被害が最も多い。
- ◎学内での被害は2年次以降に発生しやすい。

大学入学後の傷害等の被害に関して、図 3.6 に示す。今回の設問では、被害の詳細については尋ねず、被害の有無を場所別に、「学内」「学生宿舎内」「研究学園都市内」「それ以外」のいずれであったかについて複数回答で尋ねた。全体の発生率は1.8%であり、前回より減少している。前回は医学類の被害が顕著であったが、今回は医学専門学群の6年次が3.6%と多かった。また、化学類が4.8%と全体で最も多かった。発生場所は研究学園都市内が最も多く、次いで研究学園都市外、学内、学生宿舎内の順であった。学内での被害は2年次以上に多くなっている。ただし、年次が進むごとに経験が累積していることを考えると、全体では1年次の被害発生が最も多い可能性がある。大学として、入学後まもない学生に対する注意喚起の必要があると考えられる。

図 3.6 傷害等の被害について (学群・学類別、学年別、男女別、全体)



3.7 カルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘について（問 25）

- ◎全体の 29%が参加勧誘を受けている。
- ◎全体の 38%が人の勧誘を見たり、聞いたりしている。
- ◎人文学類では、半数以上が勧誘を受けている。

今回から新設された設問であり、大学入学後のカルト宗教団体や啓発セミナーなどへの参加勧誘に関して、「いやな思いをした」「人がこまっているのを見たり、聞いたりしたこと」の経験について尋ねた。全体の 29%が参加勧誘を受けており、その値は決して小さくない。また、人文学類では半数以上（51.6%）の学生が参加勧誘を受けており、顕著である。それに伴い、人文・文化学群の各学類では、人の勧誘を見たり、聞いたりした割合がいずれも 50%を超えている。関連して、参加勧誘は大学院でもその傾向は見られ、人文社会科学研究科（25%）は他研究科（15%前後）に比べ顕著であった。

学年別に比較すると参加勧誘は、4 年次では 3 年次に比べ 4.6%増になっており、過去の比較ができないため一概には言えないが、就職難の社会情勢時には啓発セミナー等で 4 年次を中心に参加勧誘が盛んになると言われており、3・4 年次生に対しても注意喚起が必要である。

図 3.7.1 カルト宗教団体や啓発セミナーへの参加勧誘について（学群・学類別、全体）

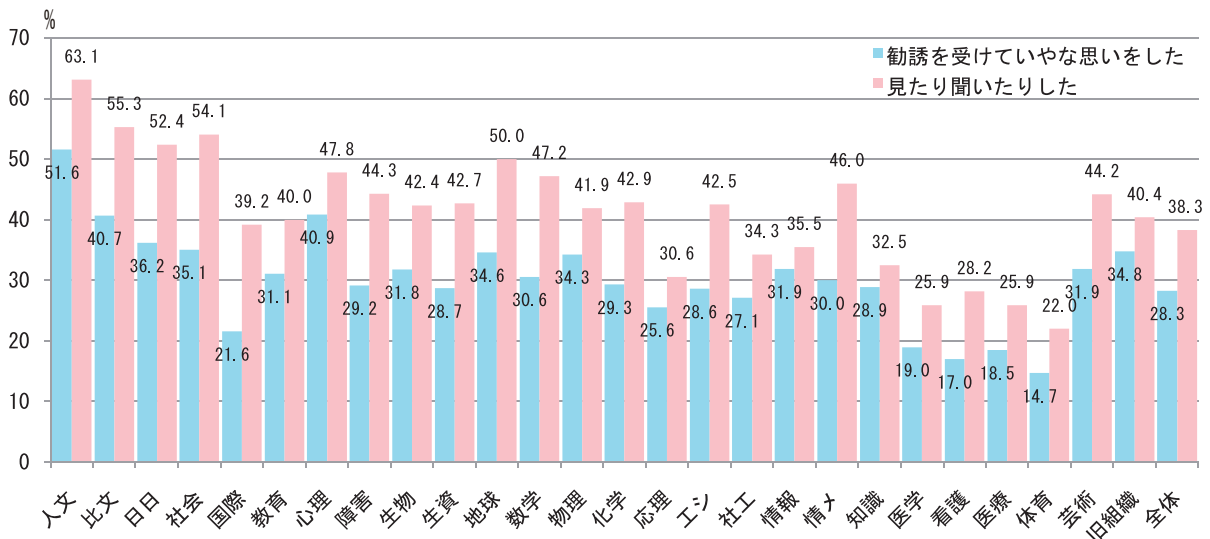
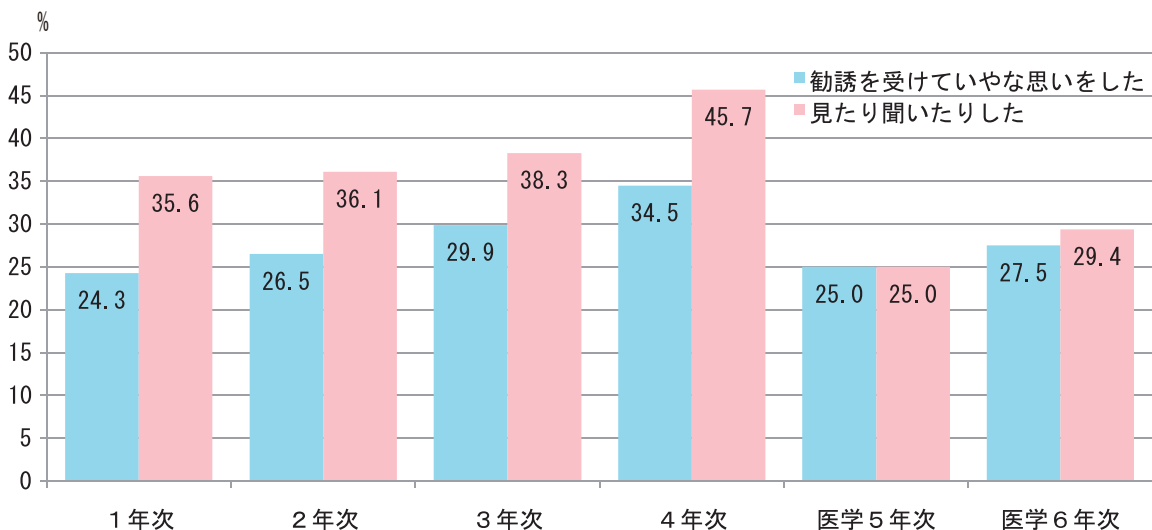


図 3.7.2 カルト宗教団体や啓発セミナーへの参加勧誘について（学年別）



第4章 健康状態について

4.1 健康状態について（問26）

- ◎全体の52.8%が過去一年間で「健康である」と回答した。前回調査からは減少。
- ◎女性の健康状態の悪化がうかがわれ、各々の病気、問題で回答率が男性よりも高い。
- ◎2年次で「心理的な問題」、4年次で「精神的な問題」と学年特有の問題が見られる。

この設問は、「過去一年間の健康状態」について該当するものを複数選択する形式である。前回調査では「4つ以内」で選択する形式を取っており、選択方法が一部変更されている。また、選択肢も前回調査では「病気・けが」で「通院・入院」をそれぞれ分けていたものを、今回は「身体の病気・精神的な問題・心理的な問題・けが」で分ける形式に変更しており、より具体的な健康状態を見る形式となっているが、前回の調査結果と直接的に比較するには注意が必要である。

今回の調査で「健康である」を選択した学生の割合は全体で52.8%（前回56.7%）であり、特に女性で47.1%（前回54.8%）、2年次で45.2%（前回52.4%）、医学5年次で40.0%（前回47.8%）の減少が見られる。また、全体的に見ても0.4%～16.1%の範囲で低下が見られており、健康状態が徐々に悪化しつつあるように思われる。しかし、複数選択による影響（回答比の分散）の可能性は否定できず、本結果からの断定は難しい。

学年別で見ると、2年次において「健康である」の回答率が低く、内訳をみると「数日間寝込んだ」「身体の病気で受診・入院」「心理的な問題で相談機関を利用した」が他学年に比して回答率が高くなっている。2年次における健康状態の減少は前回の調査結果と通じるものであるが、この学年は大学生活にも慣れ、正課以外にも課外活動や人間関係などにおいても非常に活発になる時期である。そうした中で自分自身に無理を強いたり、人間関係において悩みが多くなる時期であると推察される。また、4年次では「精神的な問題で受診・入院した」の回答率が他の学年に比して高くなっており、就職活動や卒業にまつわる問題（単位取得、休・退学など）が学生の健康状態に悪影響を及ぼしている可能性がある。4年間の大学生活において、2年次と4年次には特に注意が必要になる時期と言えるだろう。前々回においてみられた4年次での回復傾向は、前回の調査結果と同様、今回の結果からは見られなかった。

表 4.1 過去一年間の健康状態（全体、男女別、学年別）

	全体	男性	女性	1年次	2年次	3年次	4年次	医学5年次	医学6年次
	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率
1 健康である	52.8	57.6	47.1	58.9	45.2	52.4	53.5	40.0	53.2
2 健康不良で数日寝込んだ (受診・入院を除く)	28.3	25.5	31.9	25.6	31.2	29.2	27.6	30.0	31.2
3 身体の病気で受診・入院 した	14.2	11.1	18.0	11.3	18.0	13.8	14.2	27.5	11.9
4 精神的な問題で受診・入院 した	2.0	1.5	2.8	1.4	1.7	1.7	3.1	5.0	4.6
5 心理的な問題で相談機関を 利用した	2.2	1.5	3.2	1.7	3.2	1.9	1.9	5.0	1.8
6 けがで受診・入院した	6.1	5.7	6.6	4.4	8.8	7.4	4.7	5.0	2.8
7 その他	1.2	1.1	1.1	1.7	0.9	0.3	1.7	0.0	0.9
無効・無回答	1.0	1.3	0.5	0.7	1.0	1.6	0.7	2.5	0.9

4.2 過去一年間の困り事・悩み事について（問 27）

- ◎最も多い困り事・悩み事は「進路」で52.3%、次いで「学業や研究の不振」が35.5%。
- ◎学生相談室の利用には至らないが、実際に自身の内面の問題で悩む学生は多い。
- ◎女性の方が内面、対人関係での悩みが多く、学年ごとに悩み事の種類が変化していく。

この設問は「過去一年間にどのようなことで困ったり悩んだりしたか」について該当する項目をすべて選択するものである。前回調査の「保健管理センターの学生相談室で相談したいこと」から設問が変更されており、前回との直接比較は難しい。選択肢の変更もある。主な変更点は「単位取得の問題」が新たに追加、前回の「対人関係」は今回から「友人・教員・研究室内・サークル内」に細分化され、前回の「情緒」は今回から「精神的・心理的状态」に、そして「ハラスメント」は1つにまとめられた。

全体で最も高かったのが「進路」52.3%であり（前回と同様の結果）、次いで「学業や研究の不振」35.5%であった。また、「自分の性格」29.6%、「自分の精神的・心理的状态」31.0%と高く、自身の問題で悩む学生も比較的多い。前回の学生相談室で相談したいことでは「情緒」は10%に満たなかったが、このことから相談には至らないが実際には自身の内面の問題で悩む学生は多いと考えられる。人間関係が活発となる大学生において、「友人・恋愛・サークル内」での問題も3割程度示され、学生が多様な人間関係に苦慮している姿がうかがわれる。学生生活に多大な影響を与えうる「経済状態」も22.2%を示しており、大学における経済支援の必要性は高い。

男女別では女性の方が「友人との関係」、「自分の性格」、「自分の精神的・心理的状态」で高く、自身の内面や対人関係での悩み事の多さは前回の結果と同様であった。学年別では、2年次で「転学類・転学群」、「サークル内での問題」、「経済状態」が高まる傾向にあるが、3・4年と学年を経るごとに徐々に減少していくようである。次いで3年次では「進路」、「就職」が高まり、4年次では「就職」がさらに高まっている。また、4年次で「教員との関係」、「研究室内の問題」、「ハラスメント」が最も高くなり、卒業研究等の関係で高まっているとも考えられる。このように、男女別、学年別で悩み事・困り事の内容が異なるため、それに応じた支援が必要となるだろう。

表 4.2 過去一年間の悩み事・困り事（全体、男女、学年別）

	全体	男性	女性	1年次	2年次	3年次	4年次	医学5年次	医学6年次
	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率	回答率
1 学業や研究の不振	35.5	33.5	38.2	34.9	32.9	34.5	40.6	22.5	37.6
2 単位取得の問題	26.1	28.5	23.4	23.8	33.5	29.6	21.3	0.0	5.5
3 休学・退学	3.0	3.6	2.1	1.6	3.5	3.3	4.3	0.0	1.8
4 転学類・転学群	4.3	4.6	3.9	4.9	6.6	4.2	1.6	0.0	0.0
5 進路	52.3	48.4	57.8	46.6	47.9	59.3	55.9	55.0	67.9
6 就職	26.5	24.6	29.2	8.2	22.9	38.3	42.9	15.0	35.8
7 友人との関係	23.6	18.4	30.2	25.9	28.7	23.9	15.5	25.0	15.6
8 教員との関係	3.2	3.0	3.5	1.7	2.2	3.3	6.2	2.5	3.7
9 研究室内の問題	3.2	3.1	3.1	0.3	0.9	2.7	10.3	0.0	1.8
10 サークル内の問題	24.0	20.7	28.3	15.6	32.8	31.2	18.2	25.0	29.4
11 恋愛関係	24.0	21.1	27.6	19.6	25.7	26.9	25.6	27.5	21.1
12 家族関係	10.3	7.6	13.5	11.3	9.4	9.5	9.9	15.0	17.4
13 自分の性格	29.6	24.4	36.6	30.0	30.8	29.8	27.6	27.5	28.4
14 自分の精神的・心理的状态	31.0	24.8	39.2	30.6	35.4	29.9	28.4	32.5	27.5
15 経済状態	22.2	21.5	23.0	17.8	25.0	25.4	22.1	20.0	22.0
16 ハラスメント	0.8	0.6	1.0	0.2	0.8	0.9	1.4	0.0	0.9
17 その他	2.8	2.4	3.2	3.4	2.9	2.5	2.3	5.0	0.0
18 特にない	11.4	14.8	6.9	15.1	10.7	8.6	9.9	12.5	12.8
無効・無回答	1.9	2.3	0.9	1.7	2.3	2.2	1.1	2.5	0.9

4.3 過去一年間の精神的な健康について（問 28）

- ◎やりたいことができている、大学生活が充実していると感じている学生は8割弱。
- ◎何となく不安になると感じる学生は8割、気分が憂鬱と感じるのは4割。
- ◎何をやってもうまくいかないと感じる学生は4割弱。

この設問は、精神的な健康状態や学生生活の状況について7項目から構成されている。前回調査の「気分が沈んでいる」は今回「気分がゆううつである」に変更され、「『死にたい』と思ったことがある」が今回から追加された。「自分のやりたいことができている」では、「とても当てはまる」と「少し当てはまる」の合計は77.3%、「大学生活が充実している」では80.1%であり、前回調査時より若干上昇している。これらの結果から、数年前から見ても本学には学生生活が比較的良好な学生の割合が多い。一方、「何となく不安になることがある」や「気分がゆううつである」では「当てはまる」の回答率の合計がそれぞれ80.4%、40.0%であり、前回調査時と同様であった。前々回調査時からの悪化傾向は変わらず、学生が感じる精神的な不安定感が維持されている。

さらに男女別でみると、女性は項目内容に関わらず「はい」と回答する傾向が男性より高い。また、学年差でみると「やりたいことができている」は2年次から低下するが、4年次で持ち直し、「気分がゆううつ」、「死にたい」は2年次で増加し、その後一定傾向を示している。本学の学生生活が比較的良好に見られる一方で、そうとも言えない学生もいることに注意が必要である（簡易表記とするため、「とても当てはまる」「少し当てはまる」を「はい」、「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」を「いいえ」として再集計した結果が表4.3.2である）。

図 4.3.1 精神的な健康状態（全体）

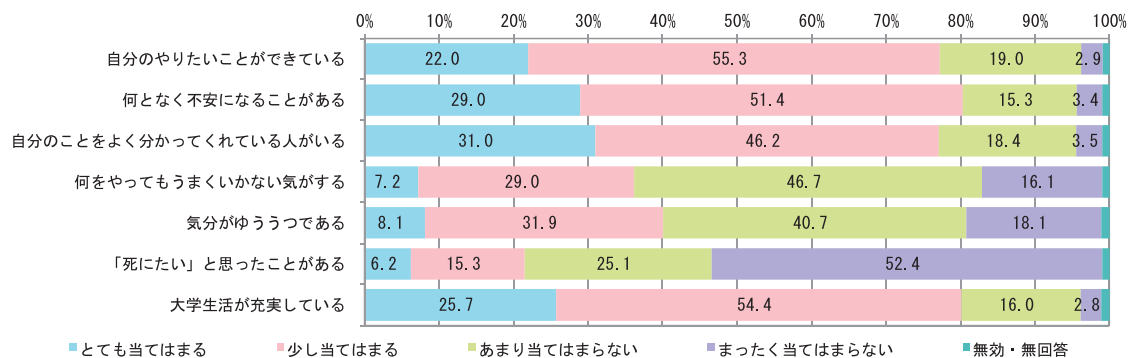


表 4.3.2 各項目に対する回答の割合（全体、男女別、学年別）：単位は%

	全体		男性		女性		1年次		2年次		3年次		4年次		医学5年次		医学6年次	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
A 自分のやりたいことができている	77.2	21.9	74.6	24.3	81.3	18.3	78.3	21.1	74.1	25.0	75.6	23.0	79.3	20.1	92.5	7.5	86.2	12.8
B 何となく不安になることがある	80.4	18.6	76.4	22.4	85.7	13.8	79.6	19.8	81.8	17.4	81.1	17.1	79.8	19.4	80.0	20.0	77.1	22.0
C 自分のことをよく分かってきている人がある	77.1	21.9	72.1	26.6	83.9	15.6	77.7	21.7	75.3	23.9	75.2	22.8	79.5	19.8	85.0	15.0	80.7	18.3
D 何をやってもうまくいかない気がする	36.2	62.8	36.3	62.4	36.0	63.5	36.1	63.3	35.2	63.8	37.5	60.5	36.0	63.3	42.5	57.5	32.1	67.0
E 気分がゆううつである	40.1	58.8	37.6	61.0	43.2	56.2	38.2	61.1	40.7	58.2	41.0	57.2	42.0	57.2	40.0	57.5	29.4	69.7
F 「死にたい」と思ったことがある	21.5	77.5	19.5	79.3	24.0	75.4	19.5	80.0	23.6	75.6	21.0	77.3	23.2	75.9	20.0	80.0	14.7	84.4
G 大学生活が充実している	80.1	18.8	77.4	21.2	84.1	15.3	85.0	14.2	79.2	19.8	75.8	22.5	77.5	21.4	95.0	5.0	88.1	11.0

第5章 クラス制度、学生組織、サークル活動等について

5.1 クラスの機能について（問 29）

◎クラスは友人・知り合いをつくる場としての機能が最多。

◎学年が上がるにつれてクラスの機能が低下。

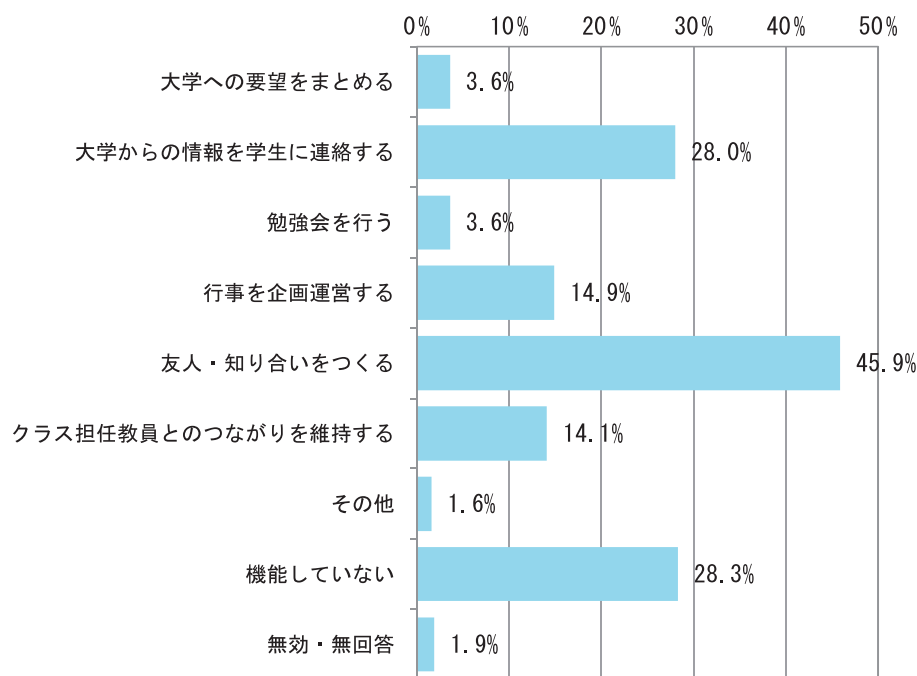
クラスがどのように機能しているかを前回（平成20年度）に引き続き調査した。

図5.1に示すように、全体ではクラスの機能として「友人・知り合いをつくる」が最も高く45.9%（前回、40.0%）、続いて「大学からの情報を学生に連絡する」が28.0%（前回、23.9%）であった。この傾向は、前回の調査結果と同様であった。一方、「機能していない」との回答は、全体では28.3%（前回、36.2%）であり、学年別に見ると学年が上がるにつれて増加する（1年次：11.1%、2年次：27.9%、3年次：35.4%、4年次：42.6%）。

学群・学類別に見ると、社会、工学システム、社会工学、情報科学、情報メディア創成の学類では、「機能していない」の回答が40%を超えている。逆に、教育、障害科学、地球、医療科学の学類では、「機能していない」の回答が10%未満であった。また、男女別では、「機能していない」と回答する割合は女性の方がは男性よりも少ない（男性：33.2%、女性：21.8%）。

前回の調査結果と比較すると、「友人・知り合いをつくる」や「大学からの情報を学生に連絡する」などの割合が増え、「機能していない」は減少している。

図 5.1 クラスの機能（全体）



5.2 学生組織の活動について（問 30）

◎クラ代会と全代会の活動をよく知らない学生が7～8割。

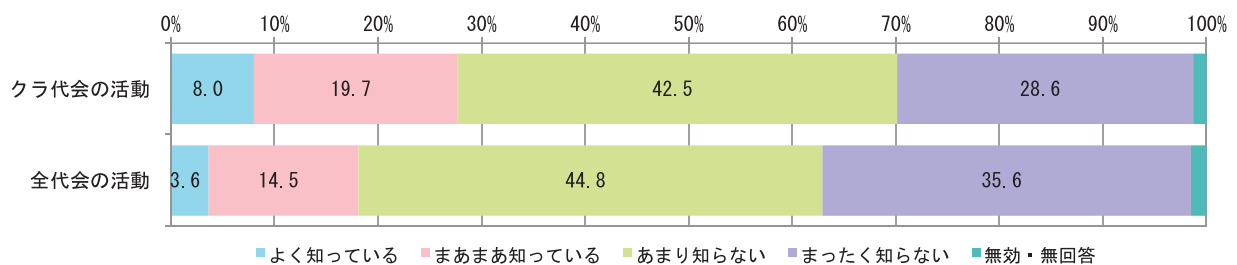
クラス代表者会議（クラ代会）と全学学類・専門学群代表者会議（全代会）の活動の周知度について、「よく知っている」、「まあまあ知っている」、「あまり知らない」、「まったく知らない」の4項目で調査した。

図 5.2 に示すように、クラ代会と全代会の活動の周知度はどちらも極めて低い。クラ代会の活動に関して、「まったく知らない」と「あまり知らない」を合計すると71.1%で、「よく知っている」と「まあまあ知っている」の合計は27.7%であった。また、全代会の活動については、「まったく知らない」と「あまり知らない」の合計は80.4%で、「よく知っている」と「まあまあ知っている」の合計は18.1%であった。これらの傾向は、前回（平成20年度）の調査とほぼ同様の結果であった。

学群・学類別に見ると、クラ代会については、人文、日本語・日本文化、国際総合、地球の学類で40%以上の学生が、「よく知っている」あるいは「まあまあ知っている」と回答している。全代会については、日本語・日本文化と国際総合の学類で30%以上の学生が「よく知っている」あるいは「まあまあ知っている」と回答している。逆に、教育、心理、社会工学、医学、看護の学類では、クラ代会について「よく知っている」あるいは「まあまあ知っている」と回答する学生が20%未満で、全代会については心理、医学、看護の学類で「よく知っている」あるいは「まあまあ知っている」と回答する学生は10%未満であった。

学年別や男女別では、クラ代会および全代会の活動の周知度に大きな違いは認められなかった。今後は、クラ代会および全代会の活動を学生に周知させていくことが必要であろう。

図 5.2 学生組織の活動（全体）



5.3 サークル活動について（問 31）

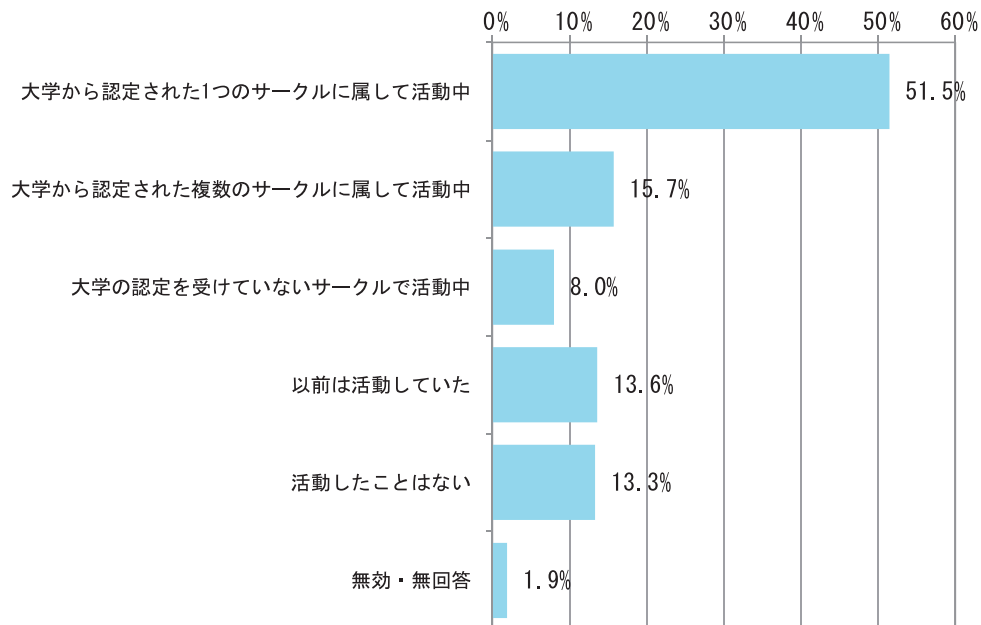
- ◎サークル活動への参加者は増加。
- ◎学類・学群や学年によって、参加実態が異なる。

サークル活動への参加について、前回（平成 20 年度）に引き続き調査した。前回の調査では、「現在活動中」、「以前は活動していた」、「活動したことがない」の 3 つ中からあてはまるものを選択する形式であったが、今回は活動形態を「大学から認定された 1 つのサークルに属して活動中」、「大学から認定された複数のサークルに属して活動中」、「大学の認定を受けていないサークルで活動中」に区分し、より詳細に調査した。

全体では、「活動中」あるいは「以前は活動していた」と回答した学生は 88.8% であり（図 5.3）、前回の調査の 78.6% を大きく上回った。また、「活動したことがない」と回答した学生は 13.3% で、前回の 16.5% より低下した。今回は複数回答であった影響もあるが、前回調査までの 20 年間続いたサークル活動への参加の減少傾向はようやく止まったと考えられる。また、活動しているサークルは、51.5% が大学から認定された 1 つのサークル、15.7% が大学から認定された複数のサークルで活動しており、合計 67.2% が大学から認定されたサークルで活動している（図 5.3）。一方、大学の認定を受けていないサークルで活動している割合は 8% であった。

学群・学類別では、サークル活動をしたことがない学生が芸術専門学群に目立って多い（38.1%）。また、学年別では、学年が上がるにつれて「活動中」が減少し（1 年次：85.7%、2 年次：79.1%、3 年次：72.2%、4 年次：60.3%）、「以前活動していた」が増加する（1 年次：3.5%、2 年次：11.1%、3 年次：14.9%、4 年次：27.2%）。男女別では大きな違いは認められない。

図 5.3 サークル活動（全体）



5.4 サークル活動の動機について（問 32）

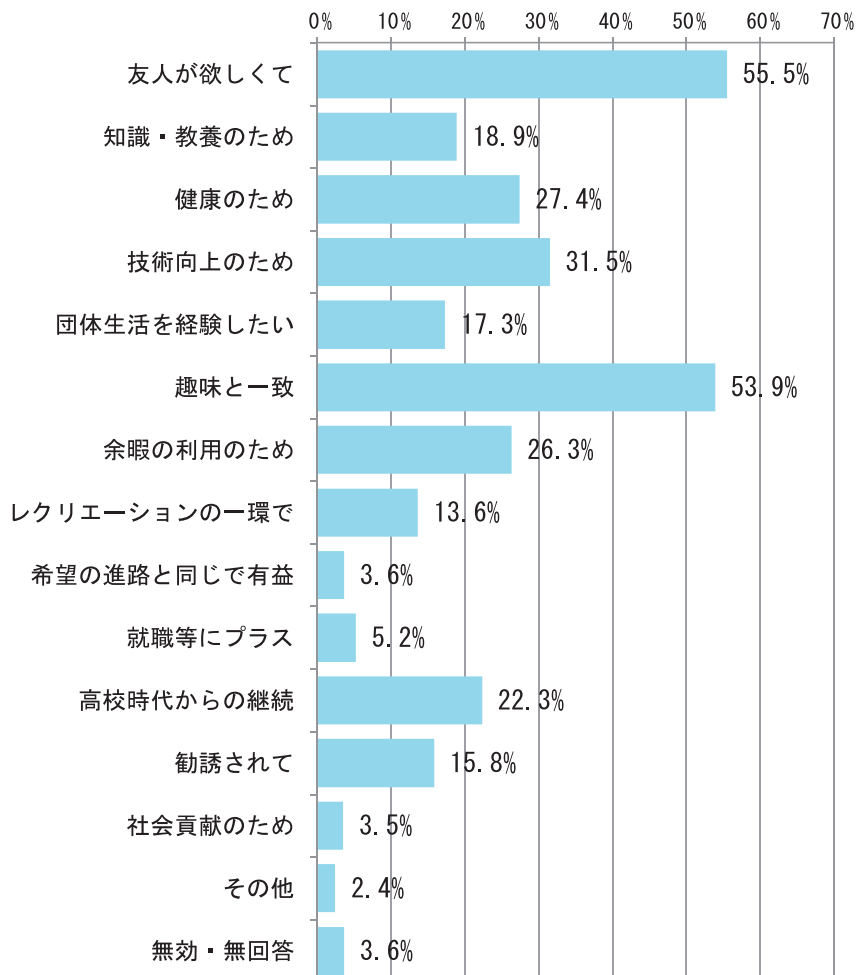
◎サークル活動の動機は友人関係と趣味が5割以上。

現在、サークル活動をしている、または、以前していた学生を対象に、サークル活動の動機について、前回（平成20年度）に引き続き複数回答で調査した。

全体では、図5.4に示すように、「友人が欲しくて」と「趣味と一致」が50%を超え、半数以上の学生の動機となっている。この結果は、前回の調査結果と同様の傾向であり、また1988年の調査以降変わっていない。参考までに、1984年の調査では、「趣味」と「高校からの継続」が上位2項目であった。

学群・学類別に見ると、体育専門学群、医学類、医療科学類以外では、全体の結果と同様に「友人が欲しくて」と「趣味と一致」が上位2項目を占める。体育専門学群では、「技術向上のため」と「高校時代からの継続」がそれぞれ66%を占め、上位2項目となっている。また、医学類は、「友人が欲しくて」と「健康のため」が上位2項目となっている。医療科学類では、「友人が欲しくて」に続いて、「趣味と一致」と「健康のため」が同率で第2位を占める。また、学年別、男女別の大きな違いは認められない。

図 5.4 サークル活動の動機（全体）



第6章 相談相手について

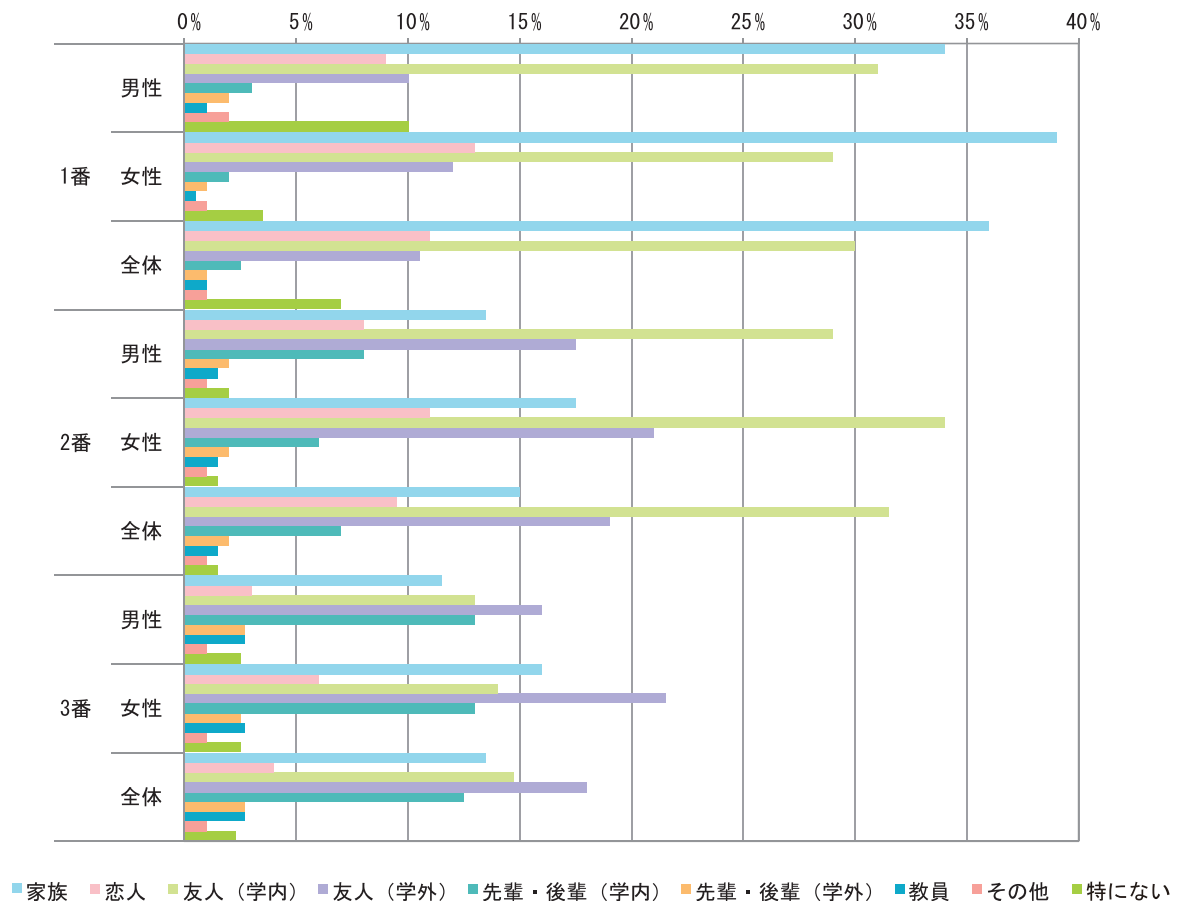
6.1 主な相談相手について (問 33)

- ◎相談相手として最も選ばれやすいのは、家族 36.2%、次いで学内友人 30.1%である。
- ◎ほとんどの学生が相談相手を有するが、特に男性で相談相手を持たない場合がある。

この設問は「あなたが重要なことを話したり、悩みを相談する人はどなたですか?」という問いに対して、該当する番号を上位3番目まで選択させるものである。その選択肢を集計したものが下記の集計図である。全体として最も多く選ばれたのは「家族」であり、最も1番に選ばれやすい相手も家族であった(36.2%)。その傾向は女性で顕著に見られる。次いで、2番目に多く選ばれたのは「学内友人」(30.1%)、そして3番目には同程度で「恋人」(11.1%)と「学外友人」(10.8%)が選択されていた。他大学から入学してくる可能性が高い大学院生とは異なり、入学から卒業まで学内で生活時間の多くを費やす学群生では、学内友人が選択されやすいことは容易に予想できる。また、2番目の相談相手として選択率が上がるのが「学外友人」であり(19.4%)、家族や学内友人、恋人だけでなく学外にも相談できる友人を持つこと(相談相手の選択肢の幅を広げることも)も学生生活の重要な要素の1つであるかもしれない。

1番目に「特にない」を選択した者はほとんど見られないことから、ほとんどの学生が相談相手を有していることを示しているが、「特にない」の選択者は全体で6.9%、特に男性では10.2%に上る。女性に比べ、男性は自身の悩み事を打ち明けることが少ないことは従来指摘されていることであるが、学群生においては特に男性において注意が必要といえる。なお、学群生が教員に相談する機会は、非常に少ないようである。

図 6.1 主な相談相手 (男女別、全体)



6.2 相談相手に話す機会（問 34）

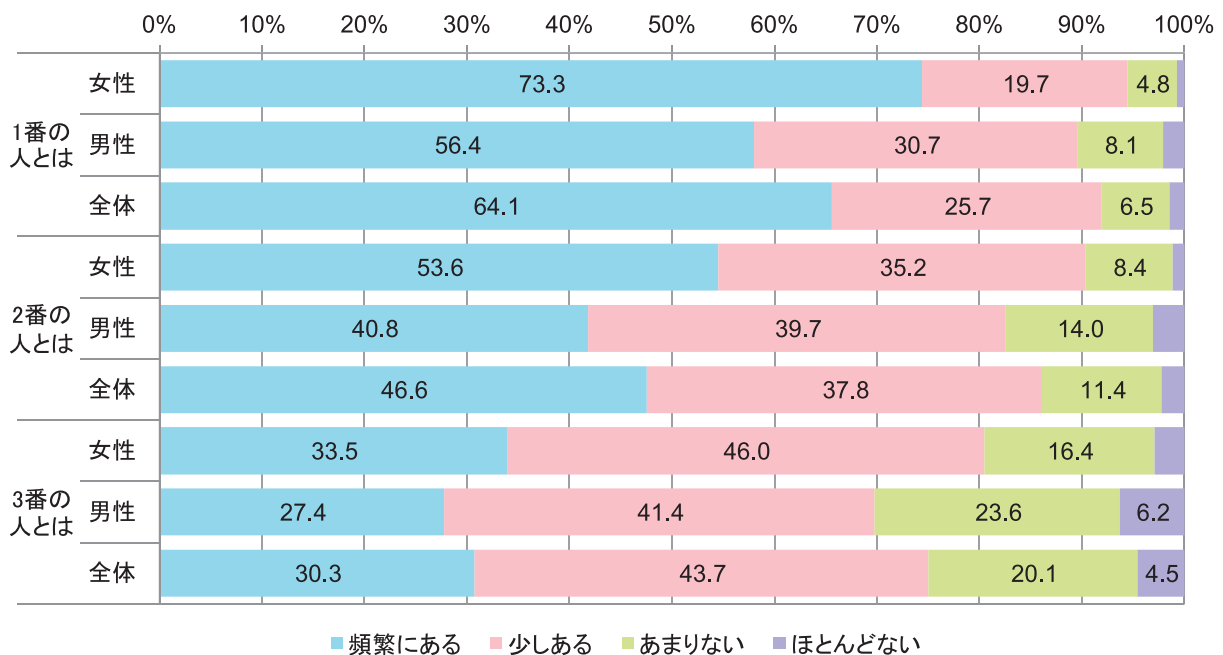
- ◎相談相手に選択した人に話す機会は当然のことながら高くなる。
- ◎話す機会に大きな学年差はなく、女性の方が「頻繁に話す」機会が男性よりも高い。
- ◎特定の相談相手に偏る傾向がある。第3・4の関係といった幅を広げることも重要。

この設問は、問 33 で重要なことを相談しやすい相手として選択した人が、各々 1 番の人、2 番の人、3 番の人に対してどのくらい話をする機会があるかを「頻繁にある」「少しある」「あまりない」「ほとんどない」の中から回答する項目である。図 6.2（無効・無回答を除く）はその単純集計の結果であるが、全体においては話す相手の順番に限らず、相談相手と話す機会が多い様子が見られる（74.0%～89.8%の学生が「頻繁にある」、「少しある」に回答）。また、男女別でみると、1 番目から 3 番目の相手に対して「頻繁に話す」を選択する割合は男性よりも女性の方が高く、「少しある」、「あまりない」、「ほとんどない」では男性が上回るようになってきている。これも問 33 で述べたように、女性が悩みを打ち明ける傾向が高いのは従来の指摘通りの結果であるが、男性は悩み事・困り事を打ち明ける機会が全体的に少ないように見受けられる。学年差に関しては、大きな違いは見られなかった。

3 番目の相談相手となると、男女問わずに「あまりない」、「ほとんどない」の回答率が上昇する傾向にある。もちろんこれは、1 番目や 2 番目の相談相手と話をするため、3 番目の相手とは話をする機会も減少すると考えられる。しかし、一人二人の特定の人間関係に偏らずに、第 3、第 4 の相談相手を持ち、話をする相手の幅を広げていくことも重要であろう。

この設問では、どのように相談できているかといった質的な部分は不明確である。相談というものは、相手と多く話ができればそれでいいというものではなく、話す頻度は少ないながらも一回で密度の濃い相談ができる場合もあるだろう。今回の設問に加え、個人の相談に関する満足度も検討する必要があるのかもしれない。

図 6.2 相談相手と話す機会（男女別、全体）



第7章 筑波大学の志望理由等について

7.1 筑波大学の志望理由について（問 35）

- ◎「教育や研究の特色に魅かれて」と「受験の実力ランクを考えて」が拮抗。しかし、経年変化では異なる傾向が見られる。
- ◎とくに女性では「大学説明会」が有力な要因に。

「筑波大学を志望した主な理由」を2つまで選択するという質問では、前回（平成20年度）に続き、「受験の実力ランクを考えて」と「教育や研究の特色に魅かれて」が2大理由として、それぞれ40%超を占めている（図7.1.1）。

この質問については、昭和63年度（1998年）から継続的にデータが収集されている（図7.1.2）。初回からの回答傾向の変化を見ると、現在の2大理由のうち、「教育や研究の特色に魅かれて」はあまり大きな変化がない（やや増大傾向）のに対し、「受験の実力ランクを考えて」は、2000年以前は10%超程度の選択率であったものが、2000年以後急増し、今や半数に及ぼうとしている。全国的傾向としての大学選択の理由が変化してきているのか、それとも本学への進学傾向が変化してきているのか、興味深い現象である。それに比する形で、「施設や設備が充実」という理由の選択比率が減少していることも興味深い。

前回調査から項目として追加された「大学説明会に参加して」という項目が、僅かながらも選択率が高くなっている。とりわけ女性では12.4%が大学説明会を理由に挙げていることも、今後の傾向を検討するうえで重要な結果であろう。

図 7.1.1 筑波大学を志望した理由（全体）

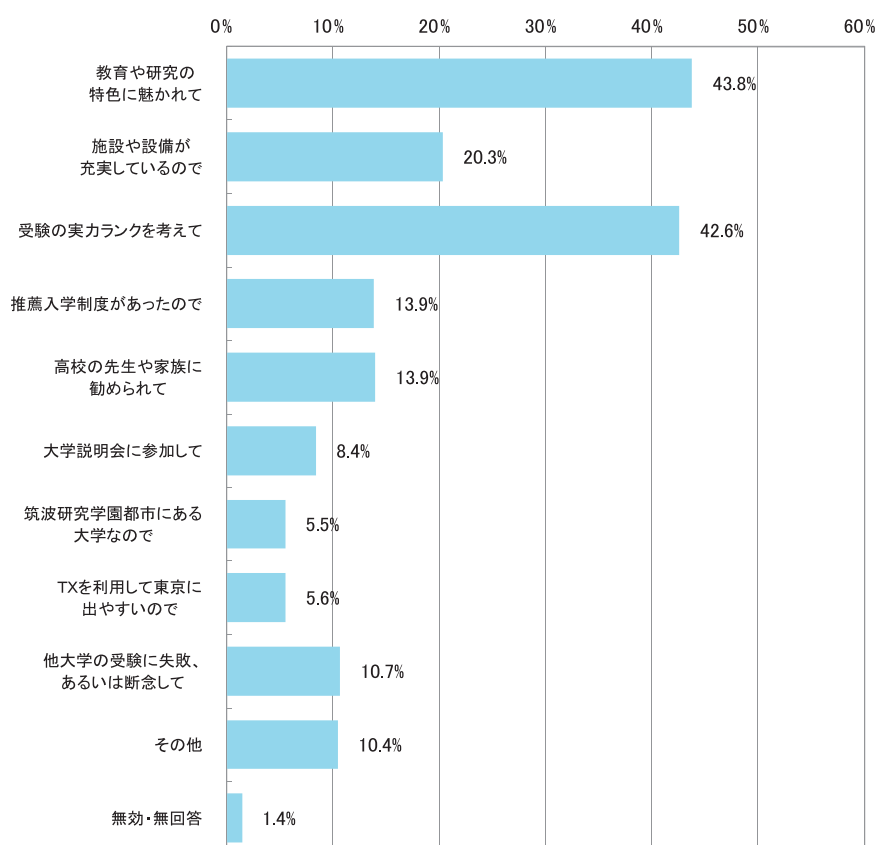
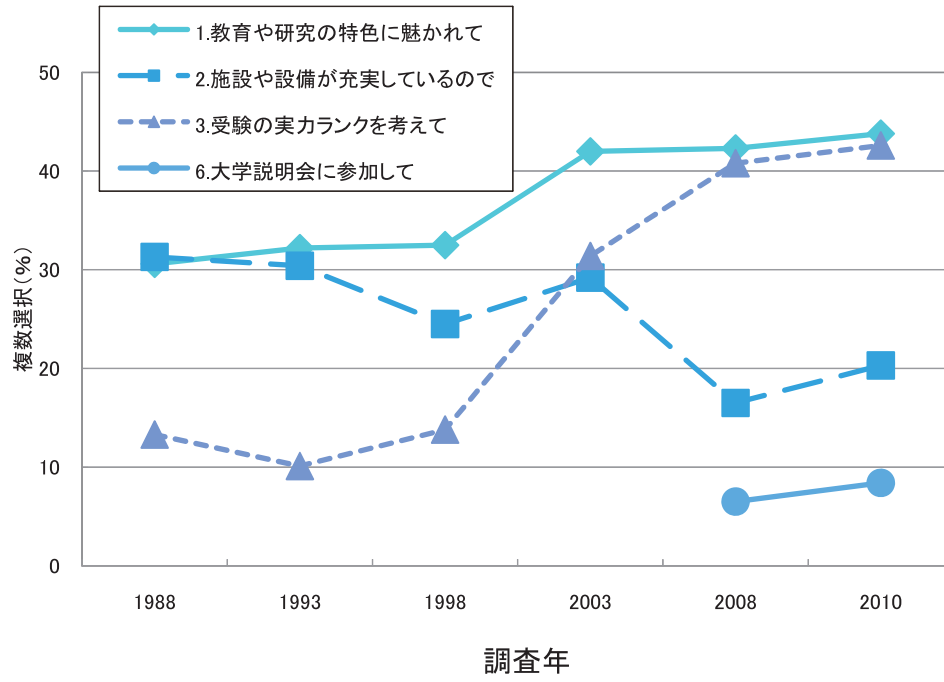


図 7.1.2 筑波大学を志望した理由の変遷



7.2 筑波大学のイメージについて：入学前後の変化（問 36）

- ◎「閉ざされている」イメージが入学後に急増。「開かれた」イメージは10%前後で、入学後も特に変わらず。
- ◎「自由」と「国際的」なイメージは入学後に増加。

13項目のうちから、入学前/後の筑波大学のイメージを3つまで選択した結果をまとめたのが表7.2である。入学前には「研究」「教育」「研究学園都市」の3大イメージがもたれていたものが、入学後には「閉ざされた」「国際性」「自由」とかなりイメージが変わっていることが示されている。この傾向は前回調査ともほぼ同一である。

今回の調査において、入学前後で増減の変化があったもの（統計的に意味があると認められたもの）に▲▽のマークを付してみた。「研究」は若干減少するものの、入学後も比較的その印象が高く保たれている。「自由」が大きく増加しているのは、筑波大学がもつ「自由」な学風を示すと同時に、大学生になり、一人暮らしを始めたことによる「自由」なイメージも反映されている可能性がある。非常に残念なことは、「閉ざされている」というイメージが大きく増えている点である。地理的な不便さからくる「閉塞感」はやむをえないが、なぜここまで「閉ざされた」イメージがもたれるのか、真摯に検討してみる必要がある。

逆に、校是の一つである「開かれた」イメージは、入学前も入学後も10%弱と変わらない、真に筑波大学を「開かれた」大学として実現していくために、どのような対策を考えていくべきか、大きな問題を投げかける結果と考えられる。

興味深いことに、「国際的」は入学前に比べ、入学後のイメージが大きく向上している。実際に国際的であり、またそれを国際的だと感じることもできているという筑波大学の特性を、いかに有効に活用していくのか、今後の検討事項といえよう。

表 7.2 筑波大学のイメージについて：入学後の変化

	A. 入学前		B. 入学後		変化の有無
	回答数	回答率	回答数	回答率	
1 伝統	672	15.0	336	7.5	▽
2 新構想	476	10.7	302	6.8	▽
3 教育	1,620	36.3	772	17.3	▽
4 研究	2,028	45.4	1,695	37.9	▽
5 開かれた	422	9.4	422	9.4	
6 閉ざされた	753	16.9	2,084	46.6	▲
7 科学技術	1,322	29.6	693	15.5	▽
8 スポーツ	1,196	26.8	1,242	27.8	
9 国際性	739	16.5	1,169	26.2	▲
10 研究学園都市	1,420	31.8	1,000	22.4	▽
11 首都圏	353	7.9	130	2.9	▽
12 自由	533	11.9	1,368	30.6	▲
13 管理	37	0.8	189	4.2	▲
14 その他	131	2.9	194	4.3	▲
無効・無回答	159	3.6	162	3.6	

第8章 筑波大学をより良い大学にするための期待や要望等について

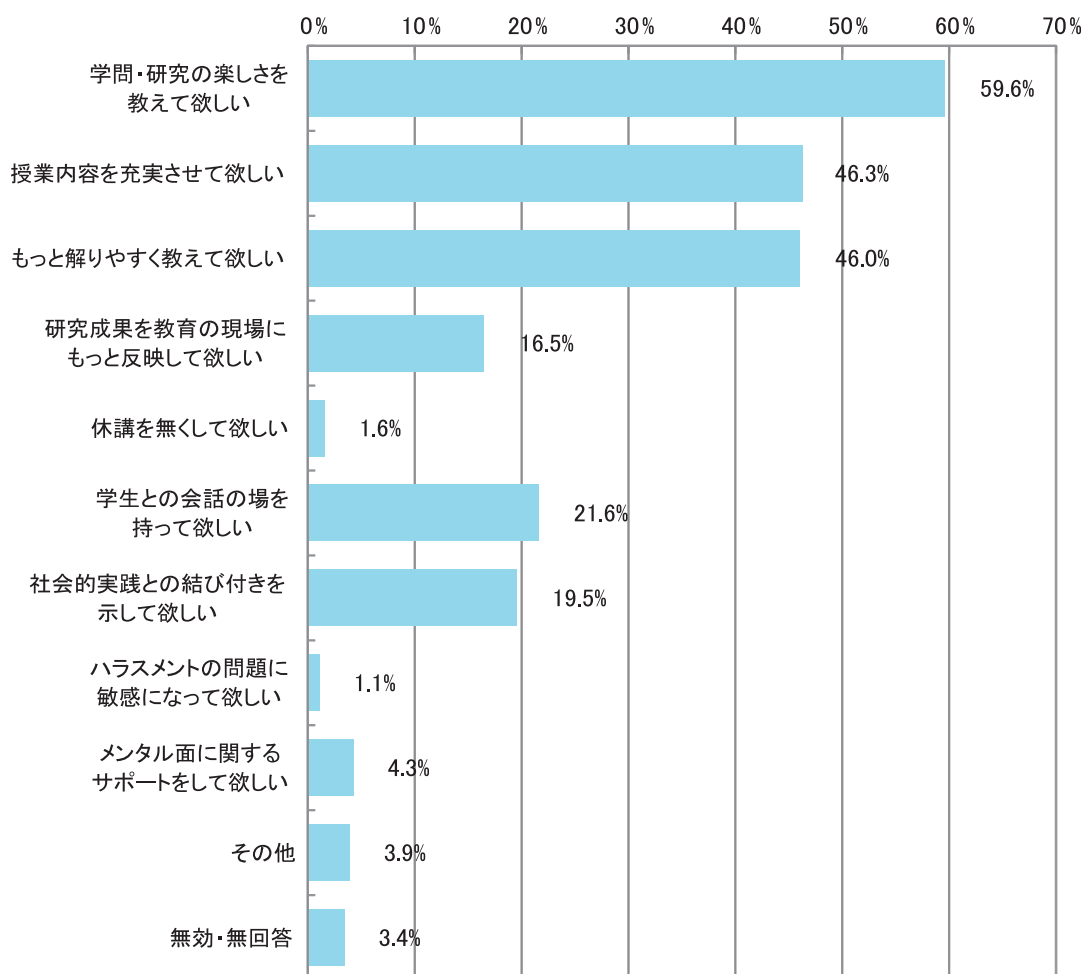
8.1 教員に期待することについて（問37）

- ◎「学問・研究の楽しさを教えてほしい」という要望は60%弱。
- ◎他にも「授業内容」「わかりやすく」と指導・授業に関する希望が大半。

複数回答可（3つまで）で「教員に期待すること」を尋ねたところ、「学問・研究の楽しさを教えてほしい」「授業内容を充実させてほしい」「もっとわかりやすく教えてほしい」の3項目がどの学年、いずれの所属でも選択されていた。このうち、「授業内容の充実」ならびに「わかりやすく」の2項目は従来の調査でも常に最もよく選ばれていた項目であった。

今回の調査では新たに「学問・研究の楽しさを教えてほしい」を含めたところ、60%弱の選択が見られた。従来の調査では「学問・研究の厳しさを教えてほしい」という項目があったが、長年にわたり10%を越えることがなかったのとは対比的な結果とも言えよう。

図8.1 教員に期待すること（全体）



8.2 教育面や制度面で不十分な点について（問 38）

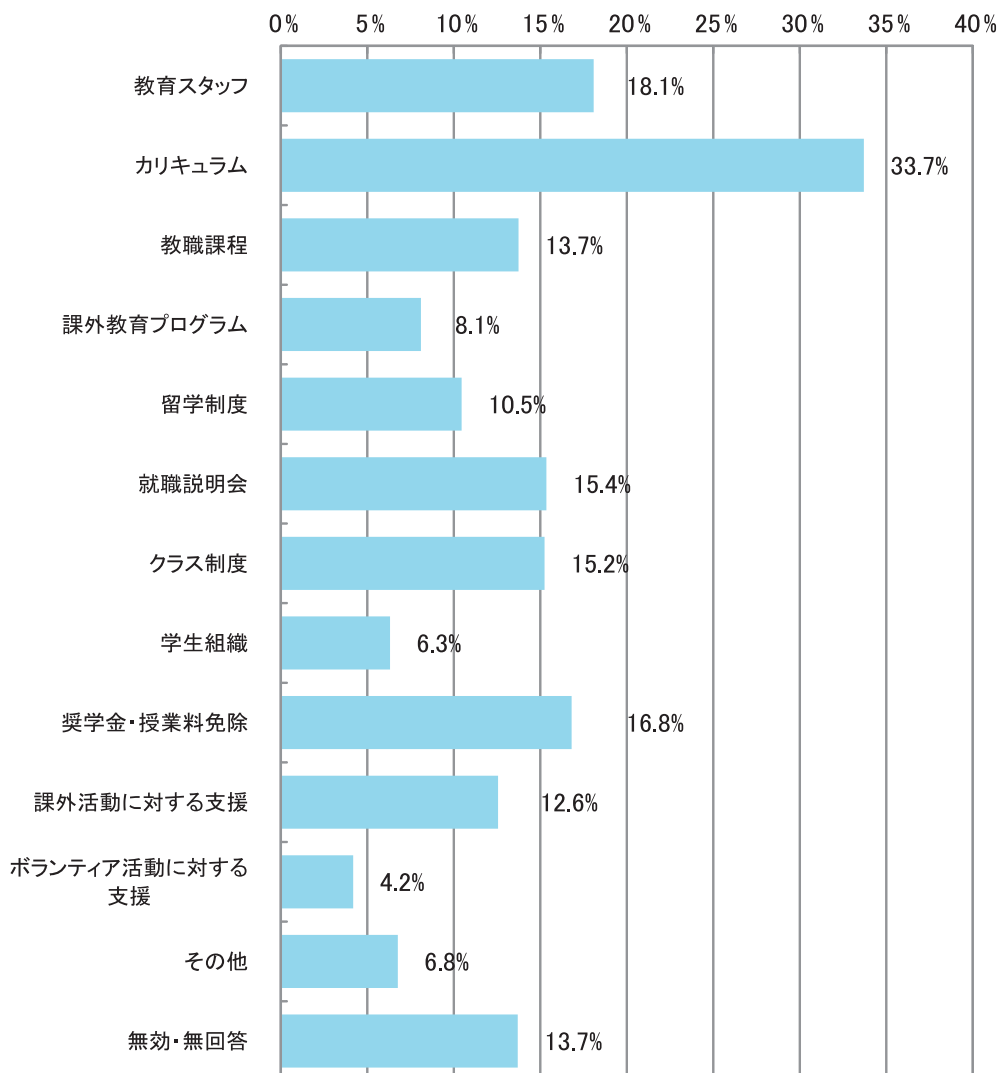
- ◎「カリキュラム」への要望をもつものは3分の1。
- ◎要望事項は多岐に渡っており、様々なシーンに応じて検討が必要。

複数回答可（3つまで）で「教育面や制度面で不十分であると感じること」を尋ねたところ、平均で1.6項目（「その他」への自由記述を含む）の不十分な点が選択された。前々回（2003年）までの調査に比べると、全体としての要望選択数は減少傾向にある。

もっとも選択比率が高かったのは、カリキュラムであるが、これは従来の調査と同様の結果となっている（2008年36.2%、2003年50.3%）。それ以外に10%を越える項目としては「教育スタッフ」「奨学金・授業料免除」「就職説明会」「クラス制度」など7項目が挙がってきている。所属や学年、性別などで大きな違いはないが、それぞれの学生のおかれた状況によって、要望事項が異なってきていることが伺える。

「その他」として自由記述された中では、「3学期制の問題点」をあげる記述がもっとも多く（69件）、ついで「支援室など事務での窓口対応」（40件）であった。数としてはそれほど多くないが、自由記述の中で一定数のまとまった反応が得られたことはなんらかの検討の必要性を示唆しているように思われる。

図 8.2 教育面や制度面で不十分なこと（全体）



8.3 整備・充実して欲しい施設等について（問 39）

- ◎自転車置き場、外灯、道路整備（自由記述）など、外回りの施設整備への要望が強い。
- ◎自由記述を含め、所属別など、より詳細な調査分析が必要。

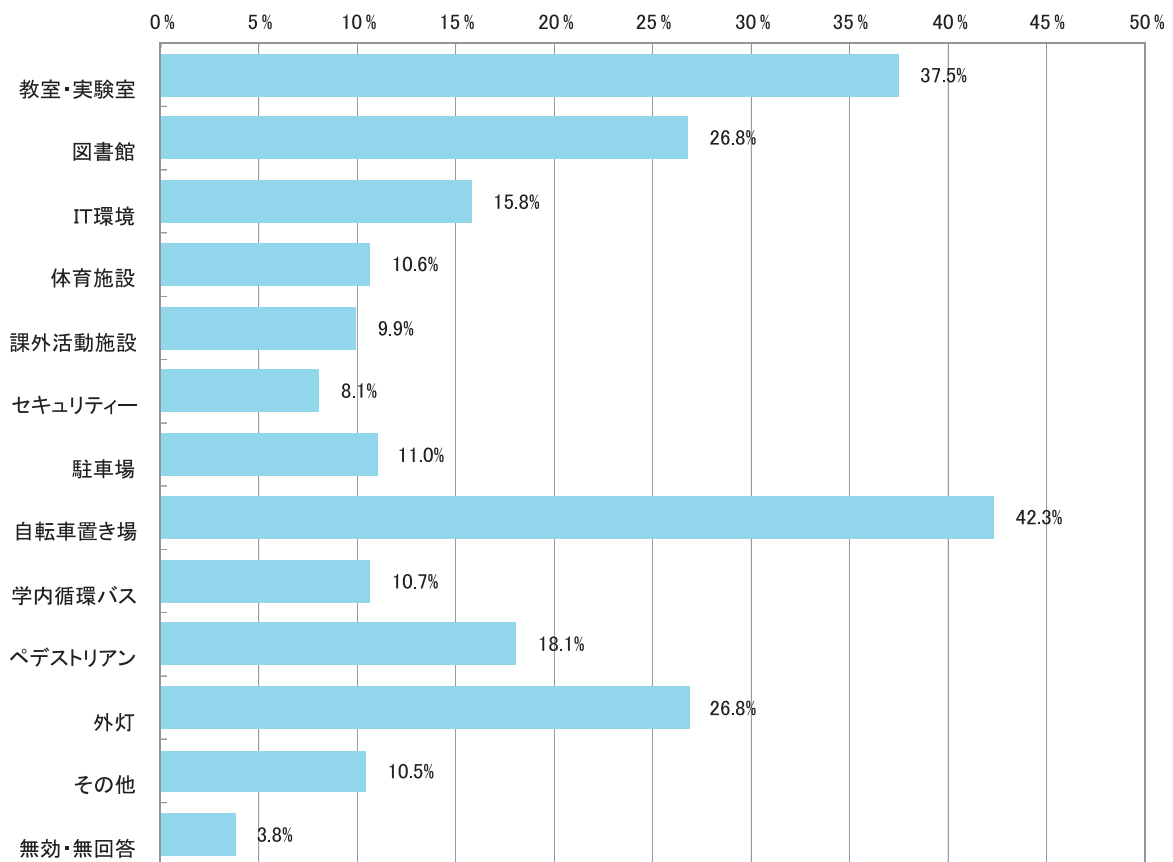
複数回答可（3つまで）で「整備・充実して欲しい施設など」を尋ねたところ、平均で2.28項目（「その他」への自由記述を含む）の要望項目が選択されていた。

もっとも選択比率が高かったのは、「自転車置き場」であり、40%を越えている。前回（2008年）調査では35.7%、前々回（2003年）調査では23.1%となっており、要望の強さが増していることに注意しておきたい。続いて多いのが「教室・実験室」の37.5%、「外灯」の26.8%である。

「その他」として自由記述された中では、「空調の整備、時間」（77件）をあげる記述がもっとも多く、次いで「道路整備（ほこぼこで危険など）」（63件）、「トイレ」（35件）であった。宿舎・食堂については、別項目として設問が用意されているが、本項目の自由記述欄においても、それぞれ個別のエリア・建物を指定した上で整備の要望が述べられていた（合計すると、宿舎については36件、食堂については81件）。生活・学習活動を行う建物についての要望もさることながら、自転車置き場、外灯、道路など「活動をしていく上で必須の外的環境」について、改善が強く求められている様子がみられる。

紙幅の関係で詳細な分析は割愛するが、自由記述では「春日キャンパスで」「医学棟で」といった「学内の他の設備と比べて」の要望も述べられており、各所属・部局ごとの分析・調査結果の活用が望まれる。

図 8.3 設備・充実してほしい施設（全体）



8.4 学内の福利厚生施設に関する満足度について（問 40）

◎福利厚生施設には、約 8 割の学生が不満を感じていない。

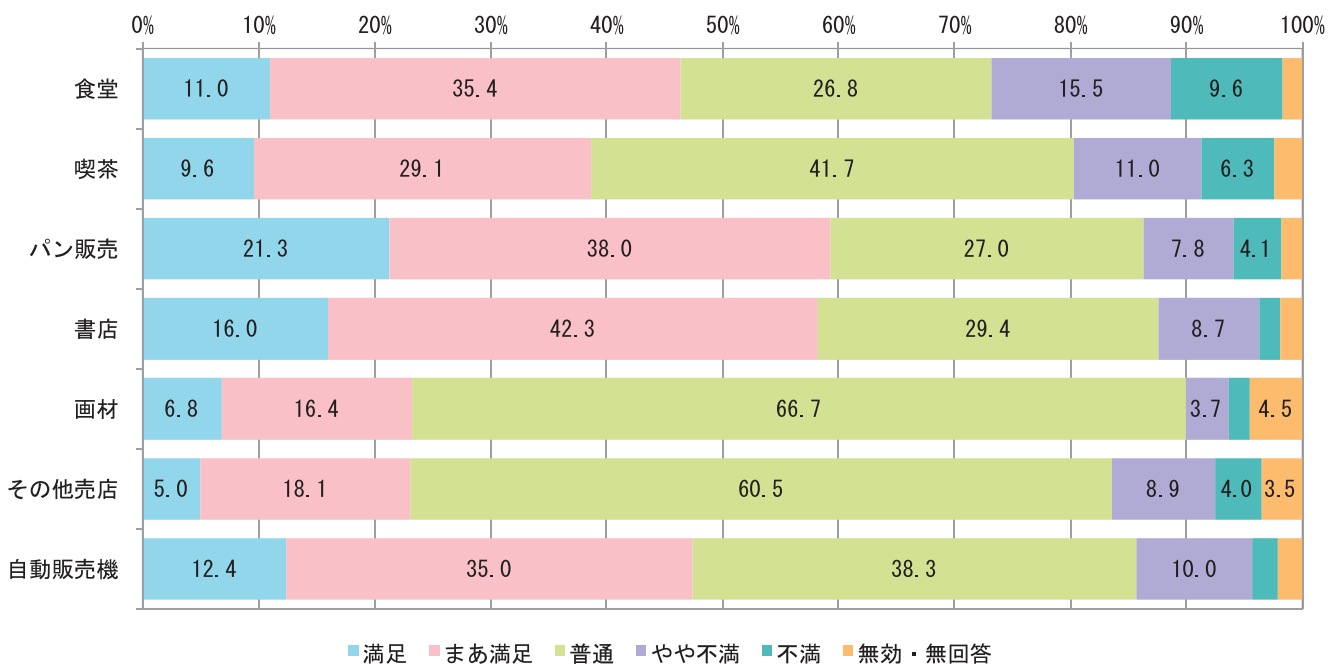
今回は、新たに学内の福利厚生施設の満足度について、「食堂」「喫茶」「パン販売」「書店」「画材」「その他売店」「自動販売機」の 7 項目で調査した。

この結果、パン販売、書店の満足度は非常に高かった。特にパン販売は、昼休みの限られた時間で簡単に食事がとれること、研究室等への持ち帰りが可能なこと、また販売場所のほとんどが教室棟の中にあり身近で購入できることなどから、高い評価になったと推測される。また、書店については、近隣地区に専門の大型書店等が少ないこと、学内の各エリアに売店を配置し一般の書店より廉価（1 割引）で購入できることなどから満足度が高かったものと思われる。

一方、食堂や喫茶については、満足している学生は 5 割を下回っているが、不満の学生も 2 割前後とそれほど高くない結果となった。不満の理由として多く挙げられたのは、「学食としては値段が高い」「各エリアの食堂に差がありすぎる」「一部の狭い食堂は、昼食時の混雑がひどい」などである。画材、その他売店、自動販売機については、「普通」と答える学生が多数派であった。

全体的には、大半の学生が福利厚生施設に大きな不満は感じていないと思われるが、広大なキャンパスの各エリアに福利厚生施設が点在していることから、2 割程度の学生は、特定のエリアの福利厚生施設に不満感をもっているものと思われる。

図 8.4 福利厚生施設の満足度（全体）



8.5 TWINS の満足度について (問 41)

◎ TWINS に満足している学群生は3割弱に止まる。

TWINS の満足度について、全体的に「満足とも、不満とも言えない」が6割程度(59.4%)、「満足している」が3割弱(26.9%)、「不満である」が1割程度(11.7%)を占めている。特に、「満足している」と回答する学生の割合は、過去2回の調査と比べて最も低い水準となる一方、「不満である」と答える割合は、前々回の14.5%ほどではないものの、前回の7.8%より増加している。この結果を項目別で細分化すると次のような特徴が見られる。

(1) 年次別で見れば、現状に満足する学生の分布はほぼ均一的である。これに対し、不満である学生は、2年生が相対的に多い。履修科目の増加が理由ではないかと考えられる。同様に、医学の5、6年次の8割以上が「満足とも、不満とも言えない」を選んでいるが、これも履修科目の減少と関係があるように思われる。

(2) 更に、所属別で比較すれば、「不満である」と答える学生が2割以上になる学類はほとんど情報系または工学系(例えば、情報科学類 35.5%、工学システム学類 28.6%、知識情報・図書館学類 28.2%、情報メディア創成学類 27.0%など)である。これは専門的な知識に由来する「不満」であると考えられる。他方、「満足している」と答える学生の所属分布には明確な特徴が確認できない。

(3) 「満足とも、不満とも言えない」と回答する学生は年次と所属のいずれの分布においても最多となっている。一方、設問への回答について、男女の違いはほとんどない。

以上の結果からみて、TWINS の機能について依然として改善する余地があると言わざるを得ない。否定的な見解を示した学生は少数に止まっているものの、その数は微増している。逆に、大半の学生は特に不満がないとはいえ、現在のシステムがまだ彼らにとって満足と言える基準には達していないことも読み取れる。今後、この大多数を占める「意見なし」層の需要を更に満たすよう努力する必要があるように思われる。

表 8.5 TWINS 満足度 (全体)

		回答数	回答率
1	満足している	1,200	26.9
2	満足とも、不満とも言えない	2,656	59.4
3	不満である	522	11.7
	無効・無回答	90	2.0
	合計	4,468	100.0

8.6 向上を望むキャンパス内マナーについて（問 42）

◎学群生の運転・交通マナーの改善が依然として課題。

全体的には交通面におけるマナーの向上への要望が目立つ結果となっている。とりわけ、「自転車の運転マナー」（40.4%）、「自転車・バイクの駐輪マナー」（40.3%）に対する回答率が高い。その他、「各種の勧誘活動」及び「喫煙マナー」の向上を望む声もそれぞれ15%弱に達しており、関心の高さが示されている。これらのデータは、前回及び前々回の調査の結果に照合してみると、大きな変化が見られておらず、いずれも本学のキャンパスライフにおける懸案を改めて浮き彫りにさせたものとみてよからう。項目別に精査すると、次のような諸点が指摘できる。

(1) 交通マナーへの関心については、各年次ともに高い。学群・学類別では、比較文化学類が「自転車の運転マナー」（56.9%）、日本語・日本文化学類が「自転車・バイクの駐輪マナー」（56.2%）で高率の結果が出ているが、交通マナー改善の要望は全学的に強く、エリアごとの差異はあまり見られない。

(2) 喫煙マナーについては、医学類で22.5%と高く、とりわけ、医学専門学群の5・6年次生では3割を超える学生が改善を望んでいる。

(3) 男女別に見ると、「自転車の運転マナー」（男37.6%、女44.5%）および「自転車・バイクの駐輪マナー」（男37.1%、女44.8%）では女性が高率で、一方、「アルコールハラスメント」（男9.4%、女6.4%）では男性の方が高いという結果になっている。

以上の結果に示されたように、やはりマナー面において最大の問題は交通関連の問題であり、今後、駐輪施設の改善などと共に、引続き各種キャンペーンを通して意識の向上を図る必要がある。

表 8.6 キャンパス内のマナー（全体）

		回答数	回答率
1	自動車・バイクの運転マナー	1,483	33.2
2	自動車の駐車マナー	655	14.7
3	自転車の運転マナー	1,803	40.4
4	自転車・バイクの駐輪マナー	1,800	40.3
5	アルコールハラスメント	360	8.1
6	各種の勧誘活動	651	14.6
7	談話室等共有スペースの利用マナー	355	7.9
8	喫煙マナー	628	14.1
9	その他	98	2.2
10	特になし	521	11.7
	無効・無回答	198	4.4
	合計	8,552	

第9章 進路や就職活動について

9.1 卒業後の進路について（問43）

- ◎1年次では、進学・就職を考えている学生が61%、未定は無回答を含めて38.6%。
- ◎高学年になるにつれ進路は決定されていくが、4年次でも約20%の学生が未定。
- ◎4年次でみると、進学46.4%、就職32.4%と進学希望者が上回る。

進路は進学と就職に大きく分けることができるが、4年次では、進学希望（選択項目1～4）が46.4%、就職希望（項目5～9）が32.4%である。2年前の調査時で初めて、進学希望の割合が就職希望の割合を上回ったが、今回はその傾向がより顕著になった。男性と女性では、女性の就職希望者が42.8%と男性の29.0%よりかなり高く、それに対して、進学希望者は、男性が41.6%と女性の23.1%より高い。

生物、物理、化学、応用理工、工学システム、情報科学の各学類は、高度な専門知識の習得のために、半数以上が進学を希望している。進学希望者を学群ごとに集計してみると、次のような数値になる。人文文化学群13.2%、社会国際学群10.1%、人間学群25.6%、生命環境学群50.3%、理工学群55.9%、情報学群29.3%、医学群14.1%、体育専門学群13.6%、芸術専門学群21.5%。

表9.1.1 卒業後の進路（学年別、男女別、全体、すべて%）

	1年次	2年次	3年次	4年次	医学5年次	医学6年次	男性	女性	全体
1 筑波大学大学院	23.7	17.6	30.4	43.5	2.5	0.0	34.3	18.5	27.3
2 国内の他大学大学院	6.8	5.5	4.7	2.5	0.0	0.0	6.2	3.2	4.9
3 海外の大学院	1.2	0.8	1.0	0.1	0.0	0.0	0.7	0.9	0.8
4 (進学) その他	0.5	0.5	0.3	0.3	0.0	0.9	0.4	0.5	0.4
5 企業	9.8	17.6	21.2	19.1	10.0	6.4	13.4	19.4	16.1
6 教員	5.5	6.1	4.1	3.7	0.0	0.9	4.6	5.0	4.8
7 公務員	9.0	9.0	9.6	5.1	0.0	1.8	5.5	11.0	8.0
8 自営・起業	0.8	0.9	0.2	0.3	0.0	0.9	0.7	0.5	0.6
9 (就職) その他	3.7	4.1	3.4	4.2	45.0	64.2	4.8	6.9	5.7
10 その他	0.3	0.7	0.3	1.0	7.5	4.6	0.4	1.1	0.7
11 決まっていない	22.8	21.1	15.7	14.5	20.0	15.6	15.3	23.8	18.8
12 まだ考えていない	4.6	4.0	1.7	0.8	0.0	0.9	3.1	2.7	2.9
無効・無回答	11.2	12.3	7.3	4.8	15.0	3.7	10.7	6.8	9.1

表 9.1.2 卒業後の進路（学群・学類別、すべて％）

学類名等	筑波大学大学院	国内の他大学大学院	海外の大学院	(進学) その他	企業	教員	公務員	自営・起業	(就職) その他	その他	決まっていない	まだ考えていない	無効・無回答
人文	8.9	5.7	0.0	0.0	26.1	12.7	10.2	0.6	0.0	0.6	27.4	3.8	3.8
比文	7.3	4.1	0.0	0.8	39.0	8.9	12.2	0.0	0.0	0.8	24.4	1.6	0.8
日日	7.6	1.9	1.9	1.0	30.5	15.2	7.6	0.0	2.9	0.0	25.7	1.9	3.8
社会	2.7	5.4	0.0	0.0	36.5	2.7	17.6	1.4	0.0	0.0	27.0	4.1	2.7
国際	4.1	1.4	5.4	1.4	28.4	4.1	10.8	0.0	1.4	0.0	33.8	2.7	6.8
教育	11.1	0.0	0.0	0.0	24.4	15.6	11.1	0.0	0.0	0.0	22.2	2.2	13.3
心理	27.0	2.6	1.7	0.9	19.1	1.7	11.3	0.0	0.9	0.9	27.8	1.7	4.3
障害	22.6	0.9	0.0	0.0	11.3	13.2	19.8	0.0	0.0	0.9	22.6	1.9	6.6
生物	46.2	8.3	3.0	1.5	9.1	1.5	0.8	0.0	0.0	0.0	15.2	1.5	12.9
生資	40.6	5.8	1.4	0.7	11.3	1.0	7.5	0.7	0.0	0.0	18.8	1.4	10.9
地球	37.5	6.7	0.0	0.0	6.7	2.9	6.7	1.0	0.0	0.0	21.2	3.8	13.5
数学	30.6	1.4	0.0	0.0	11.1	19.4	1.4	1.4	1.4	0.0	27.8	1.4	4.2
物理	33.3	20.0	2.9	0.0	8.6	4.8	1.0	0.0	0.0	1.0	11.4	1.9	15.2
化学	57.8	7.5	0.0	0.7	2.7	4.8	4.8	0.0	0.0	0.0	8.8	2.0	10.9
応理	54.0	8.8	0.4	0.2	4.6	1.5	1.3	0.7	0.0	0.0	10.1	1.3	17.0
工シ	60.7	7.5	0.7	0.0	6.8	0.4	1.4	0.0	0.4	0.4	7.5	1.4	12.9
社工	14.3	6.7	1.9	0.5	41.9	0.5	7.1	0.5	0.0	0.0	13.3	2.9	10.5
情報	58.7	5.8	0.0	0.7	8.7	0.0	1.4	0.7	0.0	1.4	13.0	2.2	7.2
情メ	34.0	4.0	1.0	0.0	22.0	0.0	8.0	0.0	0.0	0.0	21.0	2.0	8.0
知識	7.5	2.0	0.3	0.0	22.6	3.6	39.7	0.7	0.7	0.0	16.4	3.9	2.6
医学	2.8	1.4	0.5	0.2	3.9	0.2	3.5	0.9	41.0	3.7	21.1	9.0	11.8
看護	10.7	3.4	0.0	1.0	5.3	9.2	16.5	1.0	23.8	1.0	21.8	2.4	3.9
医療	36.3	5.2	0.0	0.7	9.6	0.0	1.5	0.0	5.9	1.5	28.1	3.0	8.1
体育	12.6	0.5	0.5	0.0	28.8	20.9	2.6	1.0	0.5	0.5	21.5	2.1	8.4
芸術	17.3	3.1	0.8	0.4	29.2	8.1	0.8	1.9	1.5	0.8	25.8	3.1	7.3

9.2 進路決定の際の相談相手について（問 44）

- ◎全体では、家族、親戚・知人に相談する学生が約 8 割。友人、先輩が約 6 割。
- ◎教員、事務職員に相談する学生は 1 割に過ぎない。
- ◎4 年次では、教員に相談する学生が微増。

進路決定の際の相談相手について尋ねた。複数回答を採用したため、回答率の合計は 159%になっているが、全体では、「家族」が 74.5%、「友人、先輩」が 58%と大きな割合を占めている。「教員」は 12.2%、「事務職員」は 0.5%であり、教職員は学生の進路決定の際の相談相手としては重要視されていない傾向にある。ただし、4 年次生になると、教員を相談相手とする割合がわずかであるが増えている。入学当初は、クラス担任への相談が多く、4 年次になると進路として進学を選択する割合が多いことから、専門知識を有する教員を相談相手としていることが伺われる。男女で見ると、「家族」を相談相手とする割合が女性の方が 8%ほど高いが、大きな差はない。

前回調査（平成 20 年度）との比較では、大きな違いは出ていない。「家族」と「教員」を選んだ割合は、それぞれ少しだけ増加している（前回は 71.9%と 11.0%）。表では示していないが、学群・学類別にみると、「家族」を選んだ割合は、比較文化学類、日本語・日本文化学類、体育専門学群で 8 割を超え、高率となっている。面白いことに、この傾向は前回調査から変わっていない。「教員」を選ぶ率は、生物学類と教育学類で 20%を超えており、比較的高くなっている。生物学類は、前回は 24.0%と高かった。一方、「教員」を選ぶ率が低いのは、社会学類、情報メディア創成学類、社会工学類などで、5%程度である。進学率や就職活動の分野などが関係しているのかもしれない。

表 9.2 進路決定の際の相談相手（学年別、男女別、全体、すべて%）

	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	医学 5 年次	医学 6 年次	男性	女性	全体
家族	78.9	77.6	70.8	71.6	57.5	59.6	71.2	79.4	74.5
親戚・知人	7.5	5.9	6.6	4.5	0.0	1.8	6.3	5.5	6.0
友人・先輩	47.5	61.5	64.9	57.6	85.0	80.7	57.2	59.3	58.0
教員	17.0	7.4	9.9	13.5	12.5	9.2	11.4	13.5	12.2
事務職員	0.7	0.3	0.5	0.5	0.0	0.0	0.5	0.4	0.5
その他	3.4	4.8	2.9	6.8	2.5	3.7	5.1	3.5	4.3
無効・無回答	2.7	3.5	4.6	3.4	5.0	5.5	4.6	1.9	3.6

9.3 進路を決める理由について（問 45）

- ◎全体では、「やりがい」や「自分の能力や適性」を考慮して、進路を決定。
- ◎「給与が多い」「大学で学んだことが生かせる」を考慮して、進路決定する割合は低い。
- ◎「専門知識を深める」は、4年次になって増えている。

進路を決める理由について、複数回答方式で尋ねた。その結果、進路を決める理由は、「やりがい」と「自分の能力や適性」が約4割で高くなっている。一方、「給与が多い」「大学で学んだことが生かせる」「社会的評価」「地理的利便性」などは、10%以下でありあまり考慮されていない。「安定した生活」「専門知識を深める」「将来性」「社会的貢献」は、その中間で、ある程度考慮されていると言えようか。「専門知識を深める」は、1～3年次生では、10～15%台であったのに対して、4年次生では26.8%と高くなっている。これは4年次生になり進学希望が明確になったものと考えられる。

学群・学類別に目立っているものを拾ってみると、「やりがい」における体育専門学群（64.9%）、「社会的貢献」における国際総合学類（25.7%）、「安定した生活」における知識情報・図書館学類（39.3%）、「自分の能力や適性」における比較文化学類（61.0%）、「専門知識を深める」における物理学類（28.6%）などが、他の学群・学類に比べ、かなりの高率になっている。なお、前回調査との比較では、全くといってよいほど違いが見られなかった。

表 9.3 進路を決める理由（学年別、男女別、全体、すべて%）

	1年次	2年次	3年次	4年次	医学5年次	医学6年次	男子	女子	全体
やりがい	51.4	47.8	44.5	41.6	47.5	53.2	45.3	49.0	46.9
社会的貢献	12.2	10.6	11.4	9.5	12.5	14.7	9.7	13.0	11.1
給与が多い	6.7	10.2	10.4	5.4	2.5	8.3	9.9	5.5	8.1
安定した生活	24.5	27.6	26.4	19.0	12.5	11.9	21.7	27.3	24.0
自分の能力や適性	40.9	44.8	36.7	33.9	42.5	33.0	35.5	43.8	39.2
専門知識を深める	14.4	10.7	14.1	26.8	22.5	25.7	17.6	15.4	16.5
大学で学んだことが生かせる	10.8	9.7	9.1	8.5	7.5	10.1	8.5	11.1	9.6
社会的評価	3.3	4.2	4.0	4.4	0.0	1.8	4.8	2.8	3.8
将来性	14.3	14.0	15.6	19.0	27.5	20.2	18.2	12.9	15.8
地理的利便性	1.2	2.1	1.5	3.7	15.0	16.5	2.0	3.2	2.5
その他	2.4	1.8	3.0	4.3	0.0	0.9	3.1	2.3	2.7
無効・無回答	2.3	2.8	3.9	2.5	5.0	0.9	3.4	1.7	2.8

9.4 将来の進路についての感じ方について（問 46）

- ◎将来の進路について関心をもっている者は82.8%。
- ◎職業生活を充実させるには自分自身の責任が大きいと感じている者は87.8%。
- ◎希望する進路に進むための具体的な計画を立てている者は34.3%。

自分の将来に対する関心の程度をたずねたところ、進路への関心の程度については、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計が82.8%であった。一方、働くことについて真剣に考えた経験についての肯定的な回答（反転項目のため「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の合計）は60.6%であり、将来への関心の高さと比較すると、働くことへの関心は相対的に低い。

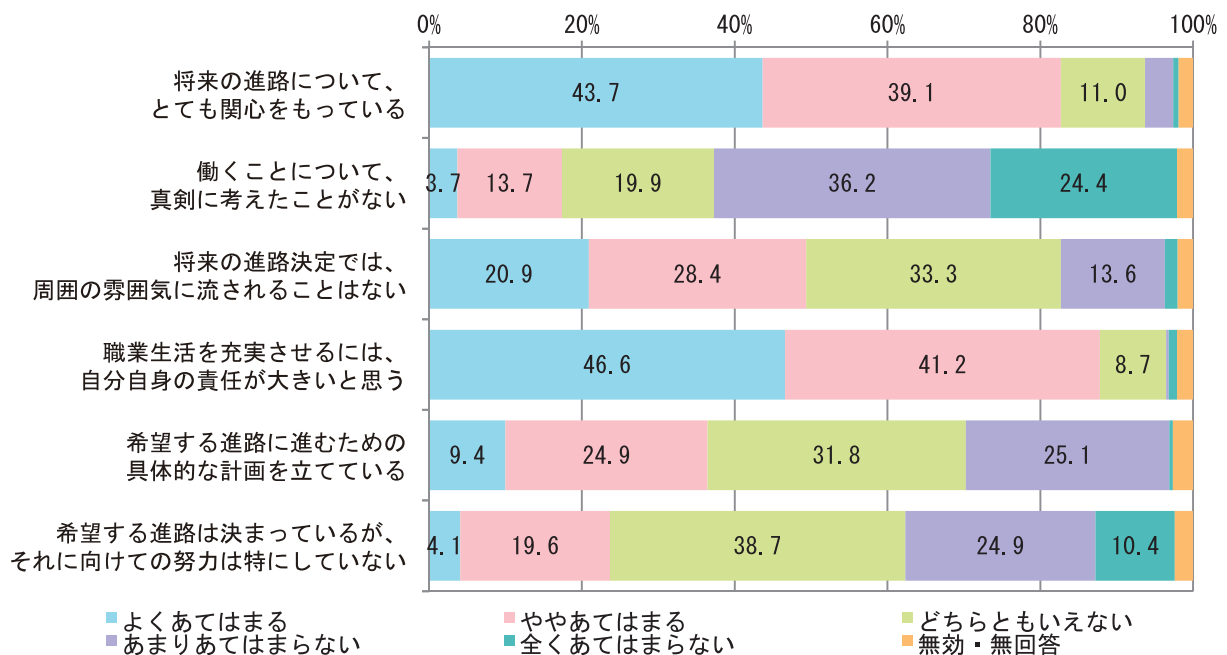
進路決定や職業生活に対する自律の程度をたずねたところ、進路決定場面における自律度については、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計は49.3%であった。職業生活全体における自律度においては、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計は87.8%であった。当面の進路決定においては、周囲の雰囲気気を気にする者が約半数を占めるが、職業生活の充実のためには自律が重要であると認識されていた。

進路を実現するための計画や実行の程度をたずねたところ、計画の具体性については、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の合計が34.3%であった。進路の実現のための努力についての肯定的な回答（反転項目のため「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の合計）は35.3%であった。

将来への関心の強さと比較すると、進路を実現するための計画の立案やその実行ができていると思っている者の割合がかなり低い。希望する進路の実現に向けて、具体的な計画や行動を促すような支援が必要であると考えられる。

学年差をみると、将来への関心と進路実現のための計画・実行の程度については、学年を追うごとに高まる傾向があるが、自律の程度については学年による差はほとんどなかった。

図 9.4 将来の進路についての感じ方（全体）



9.5 CARIO（つくばキャリアポートフォリオ）の活用について（問47）

- ◎学類では、知識、比文、日日の活用率が相対的に高い。
- ◎フレッシュマン・セミナーでCARIOを活用した割合が高い学類は、調査時点においても継続的に活用している割合が高い。
- ◎男子学生よりも女子学生の方がCARIOを活用している。

CARIOの活用状況は学群・学類によって差がある。「現在、活用している」および「時々、活用している」と回答した継続的なCARIO活用者の割合は、知識情報・図書館学類（15.4%）、比較文化学類（12.2%）、日本語・日本文化学類（11.4%）が相対的に高い。一方、数学類（2.8%）、医療科学類（1.5%）が相対的に低い。

フレッシュマンセミナーでCARIOを活用した割合が高い学類は、調査時点においても継続的にCARIOを活用している割合が高い。

年次別に継続的なCARIO活用者の割合をみると、1年次（8.8%）が相対的に高く、学年を追うごとに低下する傾向がある。男女別では、女性（9.0%）の方が、男性（4.9%）よりも活用している割合が高い。

全体の活用者の割合（「現在、活用している」「時々、活用している」「フレッシュマンセミナーでのみ活用した」の合計）は、15.8%であり、前回調査結果（16.9%）と比較するとわずかに減少している。しかし、内訳をみると、「現在、活用している」「時々、活用している」の合計は、今回（6.7%）が前回（5.2%）を上回っているのに対し、「フレッシュマンセミナーでのみ活用した」は、今回（9.1%）が前回（11.7%）を下回っている。フレッシュマンセミナーでのさらなるCARIOの活用が期待される。

表 9.5 CARIO の活用（全体）

	1年次	2年次	3年次	4年次	男性	女性	全体
1 現在、活用している	1.3	1.0	1.3	0.5	1.3	0.6	1.0
2 時々、活用している	7.5	6.7	5.4	3.5	3.6	8.4	5.7
3 フレセミでのみ活用した	11.8	8.4	9.6	7.1	6.9	11.9	9.1
4 活用していない	78.6	81.8	80.2	87.2	85.7	77.7	82.1
無効・無回答	0.9	2.2	3.4	1.7	2.4	1.4	2.1

9.6 就職活動に役立った情報源について（問 48）

◎就職活動をする学生では、インターネットによる情報収集が突出している。次いで、「大学の就職ガイダンス」と「就職情報誌」である。

就職活動に役立った情報源について、「就職活動をした方と、就職活動中の方が回答してください」との限定を付け、3つまでの複数回答を求めた。限定が付いているために、1年次、2年次、医学5年次はほとんどが無回答である。また、3年次では77.0%、4年次では60.6%、医学6年次でも60.6%が無回答である。3、4年次生の無回答については、3年次生はこれから就職活動を始めようとする学生が多く、4年次生は約半数が進学決定（あるいは、進学希望）者であるためであると考えられる。

回答者の内訳をみると、情報源として「インターネットによる企業情報」が突出していて、3、4年次平均で79.2%となっている。これは、民間の就職情報提供サイトにエントリーすることから学生の就職活動が始まっているためである。次いで、「大学の就職ガイダンス」22.1%、「就職情報誌」20.6%、「就職課・キャリア支援室」17.3%となっている。

「スチューデントプラザの就職資料コーナー」と「大学の就職情報提供システム」については、主な情報源というよりは、副次的な役割で利用されていると思われる。

学年別にみると、3年次で「企業によるインターンシップ」の割合が高く、4年次で「OB・OG訪問」の割合が高くなっているのが目に付く。3年次の夏休みにインターンシップを経験する学生が多い一方で、実際に就職活動を行った4年次生にとっては、OB・OGからの情報が重要性を増しているためであると考えられる。

表 9.6 就職に役立った情報源（学年別、3、4、6年次、回答者のみの%）

	3年次	4年次	医学6年次	3・4年次平均
就職情報誌	19.8	21.1	23.3	20.6
企業からのDM	10.1	13.5	2.3	12.2
インターネットによる企業情報	78.0	79.9	62.8	79.2
就職課・キャリア支援室	14.5	19.0	0.0	17.3
スチューデントプラザの就職資料コーナー	8.8	8.7	0.0	8.7
大学の就職情報提供システム	11.0	9.5	0.0	10.0
大学の就職ガイダンス	24.7	20.6	18.6	22.1
企業によるインターンシップ	27.8	10.6	4.7	17.0
OB・OG訪問	7.9	16.1	9.3	13.0
その他	3.0	5.0	16.3	4.3

9.7 就職活動の学習への影響について（問 49）

- ◎就職活動をした4年次生の25%が「支障が非常に起きている」と答えた。
- ◎「支障が多少は起きている」学生も5割近く。

「就職活動をした方と就職活動中の方」に限定して、就職活動が大学での学習に支障が起きているか否かを尋ねた。無回答を除き、就職活動経験者の回答は表9.7に示すとおりである。4年次になると、約25%の学生が「支障が非常に起きている」、約5割の学生が「支障が多少は起きている」と答えている。また、3年次生でも、「支障が非常に起きている」が約15%、「支障が多少は起きている」が40%を超えている。

前回調査時（平成20年度）と比較してみると、前回は4年次生で「支障が多少は起きている」が45.0%、「支障が非常に起きている」が21.8%、3年次生で「支障が多少は起きている」が45.5%、「支障が非常に起きている」が13.9%であった。大きな伸びというほどではないが、大学の学習に対する影響が強まっている傾向がみられる。就職活動の開始時期および長期化の問題はやはり深刻である。

表 9.7 就職活動の学習への影響（学年別、3, 4, 6年次、回答者のみの%）

	3年次	4年次	医学6年次	3, 4年次平均
支障はまったく起きている	12.7	10.4	44.2	11.2
支障はほとんど起きている	28.8	16.5	32.6	21.0
支障が多少は起きている	42.9	48.3	23.3	46.3
支障が非常に起きている	15.6	24.8	0.0	21.5

第10章 その他

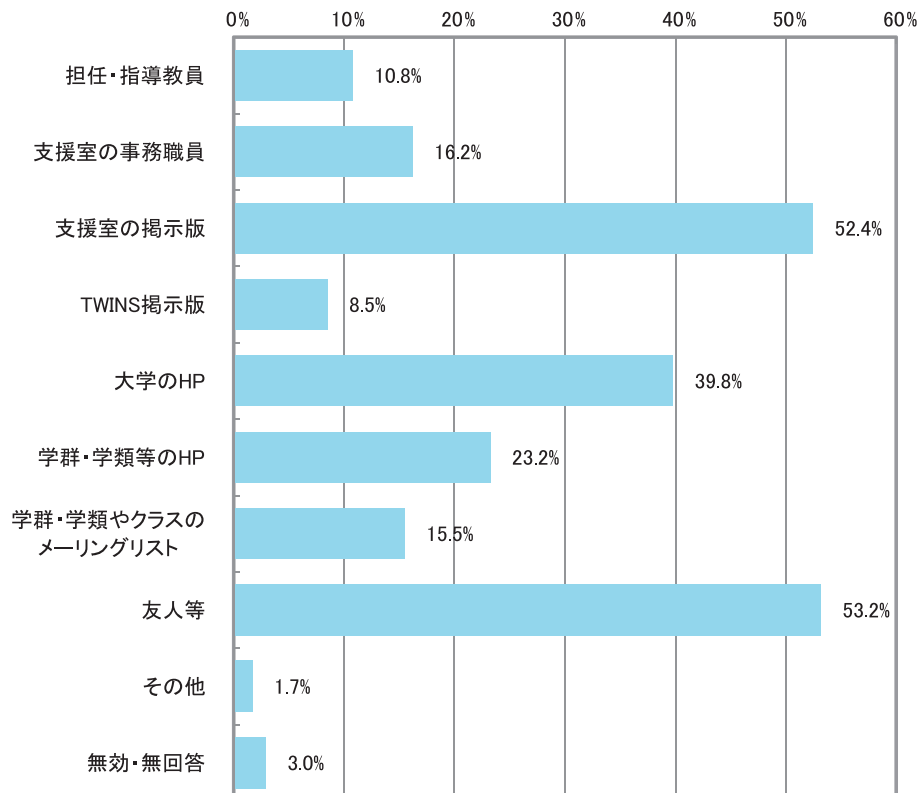
10.1 情報取得源について (問 50)

◎学群生にとって最大の情報源は友人と支援室の掲示板である。

この項目は今回新設したものであるが、「学業や生活に関わる一般的な情報を得ようとするとき、主に誰にあるいはどこにアクセスしますか」という問いに複数選択（3つ以内）で答えてもらった。全体的な結果で見れば、公式情報源としての各支援室の掲示板（52.4%）と友人等の個人的なチャンネル（53.2%）が重要な情報源となっていることがわかる。この2つがほぼ拮抗する数字になっている。大学のウェブページも比較的利用されているようである（39.8%）。ただし、支援室掲示板と大学のウェブページの両方を選択した学生は、791名（17.7%）に減り、また、支援室の掲示板と友人等の両方を選択した学生も1,168名（26.1%）にとどまるため、各種の情報源をうまく組み合わせて利用しているとは必ずしも言えない状況である。一方、TWINSの掲示板および学群・学類やクラスのメーリングリストの利用はあまり進んでいないようである。教員および事務職員に関しては、特定の情報が必要なおよび、コンタクトをとるぐらいの感じであろうか。

各回答の中身を精査してみると、教員および職員からの情報取得率は1年生から4年生にかけて高学年ほど高くなっていくことが分かる。また、情報関係の学類の学生が他学類に比べてより多く学群・学類HPの情報を利用している（情報科学類 55.8%、情報メディア創成学類 48.0%、など）。これらの学類では、利用しやすい、または、利用しがいのあるHPが用意されているためであると考えられる。各選択肢に関して、男女差はほとんどみられなかった。

図 10.1 情報取得源（全体）



10.2 相談機関について (問 51)

◎相談機関の存在を知っていながらも、利用率は高くない。

今回初めて、学内にある3つの相談機関（窓口）の利用等について尋ねた。窓口の存在自体を知らない学生は、2～3割程度である。平成21年度にスチューデント・プラザ内に開設された総合相談窓口についても、7割近くの学生が認知している。3機関のなかで、認知度と利用率が最も高いのは保健管理センターの学生相談室であるが、実際に利用したことがある学生は1割強となっている。利用の必要性を感じる学生がすべて利用しているとは限らないが、利用者が増えてきていることは確かである。

年次別で見ると、低学年の方が高学年に比べ、「存在を知らない」学生の割合が少なくなっている。近年の新入生オリエンテーションやフレッシュマン・セミナー等における相談機関の周知活動が一定の効果をもたらしていると言えるかもしれない。ただし、存在を知っているものの、利用の仕方等を知らない学生が3～4割にのぼることをみると、利用方法などについては今後さらに工夫をして広報していく必要があると思われる。

表 10.2 相談機関（全体）

		利用したことがある		利用の仕方等を知っている		存在を知っている		存在を知らない		無効・無回答	
		回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率	回答数	回答率
A	保健管理センター 学生相談室	591	13.2	464	10.4	2,435	54.5	874	19.6	104	2.3
B	保健管理センター 精神科	130	2.9	301	6.7	2,367	53.0	1,559	34.9	111	2.5
C	総合相談窓口 (SP内)	200	4.5	299	6.7	2,443	54.7	1,412	31.6	114	2.6

10.3 定期的に読む学内広報誌について（問 52）

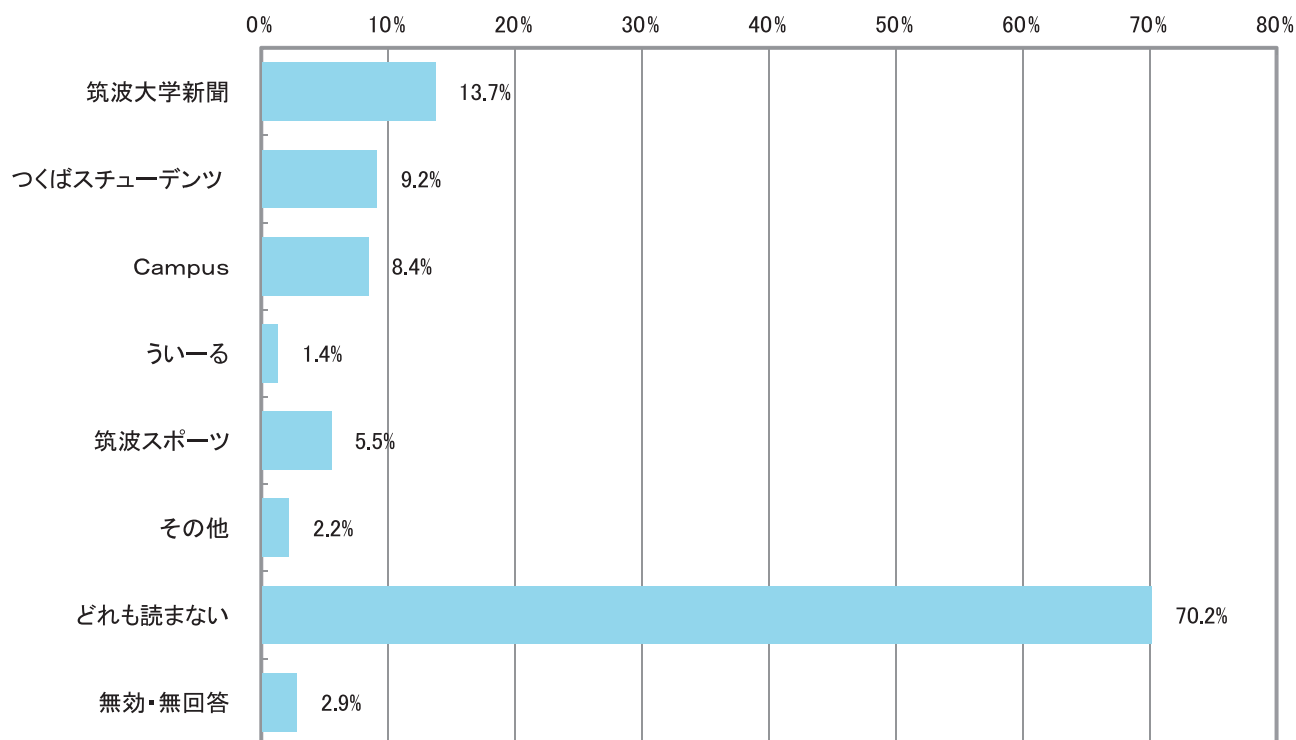
◎学群生の大半は学内広報誌を定期的には読んでいない。

今回の調査で学内広報誌5誌を取り上げたが、いずれもあまり広く読まれていない。逆に、そのどれも読まない回答者が7割にも達しており、学内広報誌が学生のコミュニティに浸透していない実態が表れた結果となっている。今回取り上げた5誌の中で「ういーる」を除く4誌は前回（平成20年度）の調査でも対象となっていたが、前回と比較しても、程度の差こそあれ、それぞれの定期的読者の割合ははっきり減少している（前回の結果は、「筑波大学新聞」19.6%、「つくばスチューデント」12.7%、「Campus」8.9%、「筑波スポーツ」6.0%であった）。

ただし、これらの数字の低さは設問の中身に関係している可能性もある。前々回の調査では、『つくばスチューデント』だけを取り上げる設問であったが、そこでは「時々読んでいる」という選択肢があり、それを選んだ回答者は45%に達していた。前回および今回は、「定期的に読む」読者に絞る形を取ったため、回答率に一定の影響が出ているかもしれない。

しかしながら、いずれにせよ、所属、学年、男女の各カテゴリーにわたって差異はほとんど見られない形で「学内広報誌離れ」の現象が生じていることは間違いない。インターネットや各種の新たな情報媒体の出現により、紙媒体の需要が減じていく傾向は避けられないと思われるが、大学の公式の情報伝達手段としてのこれら広報誌のあり方について、引き続き、真剣に議論していかなければならない。

図 10.3 定期的に読む学内広報誌（全体）



10.4 学外研修施設利用の有無について（問 53）

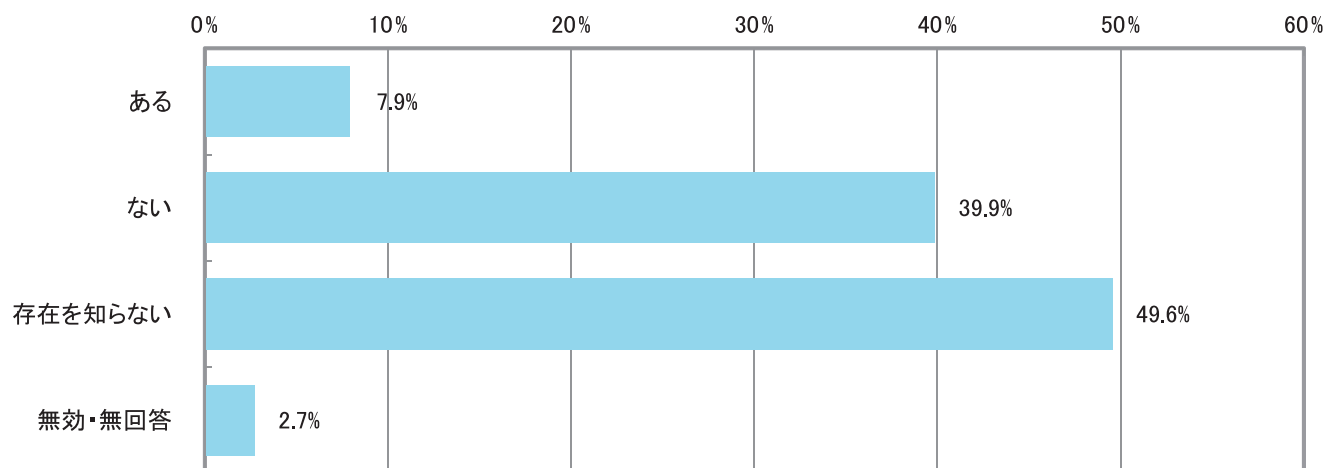
◎学外研修施設への認知度はなお低い。

本学は山中、石打、館山の3か所に学外研修施設を保有しているが、その抜群の立地条件にもかかわらず、学群生の半数近く（49.6%）がこうした施設の存在すら知らないという結果である。実際利用したことのある学生も、全体の1割未満（7.9%）にすぎない。本学からの移動にかなり時間がかかる、施設の老朽化が進んでいるなどの理由で、課外活動団体等の利用が減っていることが主な原因であると思われる。

前回（平成20年度）の調査では、「ある」が10.9%、「ない」が31.7%、「存在を知らない」が53.7%という結果であった。比較すると、周知度はわずかに向上したが、利用者は確実に減っていることになる。研修所離れの傾向は進んでいると言わざるをえない。

ただし、年次別でみると、高年次ほど利用者数が多いのは当然であるが、年次があがると確実にその割合が増えていることから、在学期間中、一度利用してこれらの施設のメリットさえ分かれば、繰り返し利用する学生が多くなる可能性は十分である。また、地球学類（26.9%）や物理学類（14.3%）などで、比較的これらの施設を多く利用する学類も見られており、これらの学類の経験を生かしながら、今後施設の整備と広報活動に力を入れてゆけば、利用率の改善も期待できるのではないかと思われる。

図 10.4 学外研修施設利用の有無（全体）



第 11 章 自由記述

1. はじめに

自由記述欄は、筑波大学の教育環境や学生生活全般に対する要望や提言等を自由に記述することを求める趣旨のものであり、アンケート有効回答数 4,493 件のうち、自由記述欄に回答したものは総数で 771 件を数えた。約 6 分の 1 にあたる。

自由記述欄回答の集計に際しては、回答を大きく以下の 4 つに分類し、さらに小区分を設けてまとめることとした。

- A 制度（カリキュラム、就職支援など）に対する要望
- B 教職員に対する要望
- C 施設（空調、図書館、宿舍、食堂・売店など）に対する要望
- D その他

2. 記述内容に対する概観

A 制度に対する要望・不満

A1 3 学期制

2 学期制の希望が 62 件あり、その理由として、就活・インターンシップに不都合、長期休業が他大学と合わないので大学間交流に不都合、ボランティアなどの大学生向け行事に参加できない、9 月の学会時期に休講が多くなる、などを挙げている。他に 3 件も長期休業が他大学と合わないことに関する不満。前回の実態調査の時以来、状況が変わっていない。

A2 経済的支援

25 件の回答があり、奨学金、授業料免除に関する不満、就活の交通費の援助、宿舍に入れない場合の家賃の援助などの要望もあった。

A3 カリキュラム

前回の実態調査と同様 100 件を超える回答があった。履修に関する要望・不満、教職に関する意見が目立っている。履修に関する説明・相談などのサポート、申請を容易に、超過申請の期間延長、などの要望、集中の日程発表が直前で申請が難しい、同じ講義演習のクラスによる格差などの不満などがあった。教職に関しては、履修サポートの要請、集中に関する苦情、単位が取りにくいなどの意見があった。その他の点として、講義内容や卒業要件に関する不満、英語（英会話）教育充実の要望、体育の授業に関する不満、休み時間にゆとりがない、なども見られた。

A4 キャリア・就職関連

3 学期制のため就活が難しいという意見を除き、36 件の回答があり、就職支援の強化、就職情報の充実、就活ガイダンスを増やし受けやすくすること（講義以外の時間に実施）、公務員試験・教員採用試験対策などの要望があった。また、教員側の就活に対する理解がないことへの不満の声もあった。キャリア支援室による努力がなされているが、就職難の時代故に、引き続き改善の努力が必要と思われる。

A5 連絡広報体制

55 件の回答があった。掲示板に関する要望が 18 件あり、見やすく、早く、休講情報は日付順に、不必要になったものの削除、デジタル化（PC や携帯でも見られるように）、などの要望があった。また、TWINS の機能向上に関する要望が 26 件あった。年間の申請登録単位数計算機能（年間 45 単位に関連して）とか、卒業要件までの単位試算機能を導入や本来あり得ない科目区分を設定した場合に履習登録が不

可能になるシステムの導入、TWINS上で開設科目やシラバスも参照できる機能、セキュリティーの強化と共に学外から容易にアクセスできるように、などの要望があった。TWINSにおいて休講などに関して、掲示板が有効に活用されていないとの指摘もあった。

A6 その他

その他に分類された回答は65件である。留学に関して10件あり、ガイダンスや学資援助、英語教育の充実、留学し易い環境などの要望があった。その他、課外活動の支援、他大学との交流、学類間の交流、留学生との交流、留学生への支援、クラス制度の見直し、などの要望があった。

B 教職員に対する要望・不満

B1 教員に対する要望・不満

72件の回答を数え、教員による授業の進め方に対する不満・要望が多く見受けられた。授業運営に関する一層の創意工夫が必要であり、そのためのFD・研修会のさらなる充実が望まれる。また、昨今の就職事情を反映してか、教員の就職活動への無理解を訴える回答も見受けられた。

B2 ハラスメント

アルコールハラスメントに関する回答2件にとどまった。

B3 事務職員の対応への不満

71件の回答があり、支援室事務職員の窓口対応に対する不満が多く見受けられた。また、事務受付時間を授業時間後まで延長するように訴える回答も多く見受けられた。これはA3のカリキュラムに対する要望とも重なるが、一部の学群・学類では早朝から夜まで授業が詰まっていて、支援室で事務手続きをするのもままならないようである。カリキュラム編成の見直しと共に、支援室の受付時間の見直しも検討したい。

B4 その他

保健管理センターへの要望、自殺対策、就職対策等の要望があった。

C 施設に対する要望・不満

C1 学内施設

191件にのぼる多数の回答があった。そのうち90件以上の多数を占めたのはエアコン増設(1B,1C,6A,6B棟の要望が多い)や空調期間の延長などを求める要望であった。次いで、体育館や音楽関係などの課外活動施設の充実を求める意見が約20件あった。その他、建物(6A,6B棟と球技体育館)の雨漏り対策、喫煙スペースの整備、ロッカーの整備、春日キャンパスの整備を求める要望が多かった。この分類の回答件数が2年前より大きく増加しているが、猛暑の影響により空調関連の要望が増加したものと思われる。電気代の予算やCO₂排出量削減などの問題もあるだろうが、授業期間中についてはもう少し改善できないだろうか。

C2 図書館

21件の回答があり、その約3分の1は長期休業中の開館日の増加や通常の開館時間の延長を求めるものであった。

C3 学生宿舎

75件の回答があり、学生宿舎に関する不満や環境の改善を求める意見が多く見受けられた。特に浴場やシャワーに関連するものが20件程度あり、24時間使用できるシャワー室の設置・増設などを求める意見が多かった。宿舎が老朽化し不潔であるといった不満も多い。少数意見の中には、宿舎の料金が同じ場

合でも設備が違うといった不満や、最近導入された青色防犯灯についての批判的な意見（安眠できない等）もあった。宿舎環境の改善には経費がかかるという大きな問題があるが、建設されてから長い時間が経過し、時代のニーズに合わなくなっている面もある。着実に改善していくことが望まれる。

C4 学内食堂・売店

67 件の回答があり、その約 4 分の 3 は食堂に関するものであった。主な意見として、メニューあるいは食堂の増設による充実化（特に医学地区）が最も多く、価格の値下げの要望（質に比べて価格が高い等）が次に多かった。残りの 4 分の 1 は売店や書籍部に関するものであるが、その大半は学内へのコンビニエンスストアの設置要望であった。

C5 ペDESTリアンデッキなど

前回調査より 30 件多い、72 件の回答があった。ペDESTリアンやループの改修に関する要望が約半数を占めた。特に自転車の交通が多いことから、ペDESTリアンの拡幅や学内ループを自転車で走りやすくするように改修することを望む声が多いようである。残りの大半は外灯増設の要望（特に一の矢地区、学外では東大通り）であった。

C6 駐輪場・自転車走行・マナー

37 件の回答があり、駐輪マナーが悪いあるいは駐輪場が少ないという意見が目立った。駐輪場のスペースについては、建物から離れているところに空きスペースもあるため、マナーの問題と考えることもできる。このほか自転車運転マナー（傘さし、無灯火など）に関する意見も多かった。少数意見としては、車の運転マナーや喫煙に関するものがあった。

C7 防犯

17 件の回答があった。宗教団体の勧誘活動を取り締まってほしいという意見が多く、次いで C5 にも関連するが、夜間の帰り道が危ないという理由から外灯増設の要望が多かった。

C8 キャンパス交通システム

12 件の回答があり、路線バスの増発、路線バスと TX との接続改善を求める声が多い。このほかバスの遅れを改善してほしいという意見もあった。

C9 その他

15 件の回答があり、駐車場の案内が分かりにくいなど駐車場に関する意見や石打研修所に関する意見があった。

D その他

D1 本アンケートに対する要望・不満

12 件の回答を数え、その多くはアンケートが長いというものであった。また質問内容があいまいであるという意見や結果のフィードバックを求める声もあった。

D2 その他

37 件の回答があった。内容は多岐にわたるが、筑波大学の環境が閉鎖的であるという意見や交流を増やしてほしいという意見が目立った。そのほか、自宅通学生への配慮や自殺対策に関する意見もあった。

3. まとめ

自由記述欄には、多様な意見や要望が寄せられたが、紙面の関係上、すべてを書くことはできなかった。学生からの生の意見に真摯に耳を傾け、他大学に先んじて、学生生活の向上に向けて努力をしていく必要があるだろう。

平成 22 年度学生生活実態調査 [学群]

平成 23 年 3 月発行

編集 学生生活支援室
学生担当教員会議

表紙デザイン:田中佐代子(人間総合科学研究科 准教授)
発行 筑波大学
つくば市天王台 1-1-1
☎ 029 (853) 2959

University of Tsukuba

